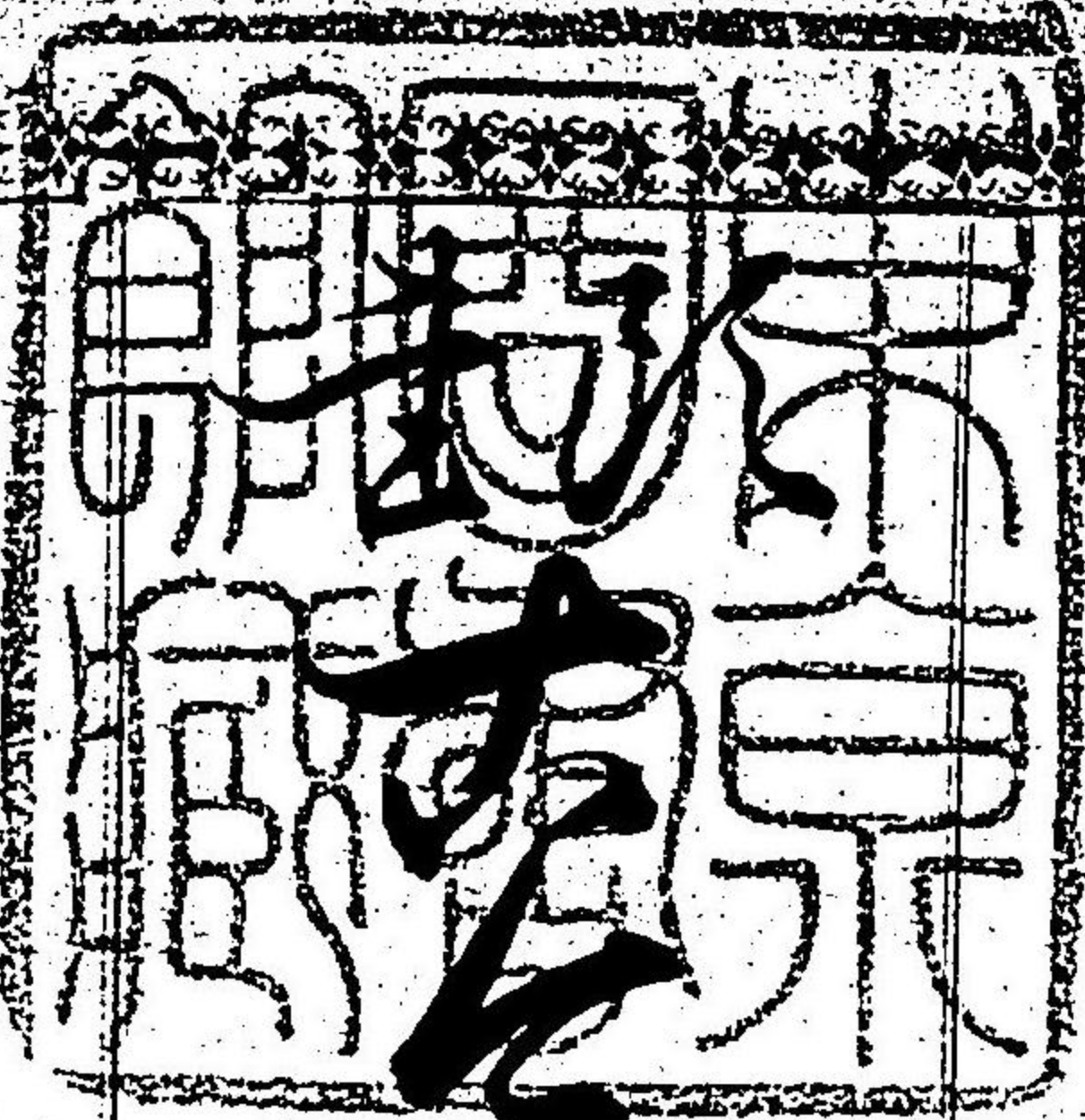


No. 215/1770



山崎氏印

和歌集遠鏡
卷上

山崎氏印



ほくろくしんしん山崎美成

漆園義書

古今集遠鏡端書

雲のある遠き梢もとほ鏡うつせばこゝに見ぬのみち葉

此書ハ・古今集の歌どもと。とくく今の世の俗語に譯せるなり。そ
もくこの集ハ。よよ物よく忘れりし人々の。ちうさくどもあま
たありて。のこれるふしもあらざなるに。今ちらなるわざはいかなれ
ばといふに。かの注釋といふすぢハ。たとへばいとえるかなる高き山
の梢どもの。ありとばかりハ。ほのかに見ゆれど。その木とだよ。あや
めもわがぬと。その山ちがき里人の明暮のつま木のたよりに。よく
見まれるに。きしておれいととひたらむに。何の木くれの木。もとだ
ちいさむと。稍のあるやうハ。おくなむとやうに。語り聞せたらむが
ごとし。おのいかによきなりて。ちやうづむに物したらむにも。

人づての耳い。おきりしあれば。ちかて見よめのまをしきには。猶
にるべくもあらざめ。世に遠目おねとみふなる物のあるして。
うつし見るに。いかにとほきもあつしきまて。たゞこのしとにう
つりきて。枝さしの長きみじかき下葉の色のこきうすきまて。のこる
くまなく。見え分れて。軒近き庭のうゑ木に。こよなき。けぢめもあら
ざるばかりに見ゆるにあらざや。今この遠き代の言の葉の。くれなゐ
深き心ばへを。やすくちかて手染の色にうつして見ずるも。もえらこ
のめがねのたとひにかなへらむ物をや。かくて此事ハも。尾張の横
井千秋ぬしの。そやくよりこひもとめられたるすぢにて。そじめより
うけひきて。いありける物かな。なにくれといとまなく。事さげきにう
ちまぎれて。えしもをたさざあまたの年へぬる。いかにくとさば

しばれどろかざるに。あながちに思ひたこして。こたみかく物しつ
る。さきに神代のまほこと。此同じぬしのぬきとにこそありし
か。さのみ聞けむとやうに。さううごつともおらもあぶらめれ。め
例のいと深くまめなることろさしい。みくなし山の神とはなしに。あ
て過るべくもあらざてなむ。
○うひまなびなどのため。い。ちうさくはいかにくはしくときたる
も。物のあちはひを甘しからしと。人のかたるを聞たらむやうにて。
詞のいきほひてに。おはのはたらきなど。こまかなる趣にいたりて。
猶たしむにはえあらねば。その事を今たのむ心に思ふがごと。は。あを
りえがたき物なる。と。とびごと譯したる。い。たゞにみづからめれも
ふにひとしくて。物の味を。みづからなめて。されるごとく。いかにし

の雅言ミヤゴトみな。たのがはらの内の物としなれ。ば。一うたのこまかなる
心ばへの。こよなくたし。およえらる。よとたほきをぞおし。

○俗言ソコゴトい。おの國クニこの里サトと。よなることたほきを中なかに。みやびとに
ちおきもあれども。おたよれるおなごのことば。あまねくよもに
わたしがければ。おゝるとにとり用ひおたし。大がたハ京わたりの詞
して。うすうすきおとなり。たゞ一京のにも。えりすつぐきありて。
なべていとりおたし。

○俗言ソコゴトにも。おなト一のある中に。あまりいやしき。又たいれすぎた
る。又時々のいまめき詞などい。おぶくゞし。又うらハしくもつけ
ていふと。うちとけたとのたがひあると。歌ウタい。ことに思ふ情コトのあるや
うのまゝに。なごめいでたる物なれば。そのうちとけたる詞して。譯カタ

すゞき也。うちとけたるは。心のまゝにいひ出たる物よて。みやびと
のいきほひに。今すこしよくあたればぞおし。又男のより。さうなの
詞は。ことにうちとけたるとの多くて。心に思ふすぢのふとあらハな
るものなれば。歌ウタのいきほひによくおなるも多ければ。さうなめき
たるをもつおふべきなり。又ハをゆるめたことをも用ふべし。たとへ
ばれのまごぞ。うらハしくハわたくしといふぞ。はぶきてつねに。ワ
タシともワシともいひ。ワシハといふべきぞ。ワシヤ。それハソレ
ヤ。すればぞスレヤといふたぐひ。またそのやうなこのやうなぞ。ソ
ンナユンナといひ。ならばたらばぞ。ばを省シラてナラタラ。さうしてぞ
ソシテ。よおらうぞヨカロ。とやうにいふたぐひ。ことにうちとけた
るとなるぞ。これたたいきほひよとたがひてい。なごくハにうるハし

といふよりいふもくあたりて聞ゆるふしたほければなり。
 のすべて人の語い。同じくいふともいひきまひきほひにきたがひて。
 深くも淺くも。をむしくもうれたくも聞ゆるわざにて。歌いことに心
 のあるやうを。たゞにうち出たる趣なる物なるに。その詞の口のいひ
 きまひきほひいしも。たゞに耳にきよとらてい。わきがたければ。詞
 のやうをよくあぢいひて。よみ人の心をたしをかりひて。そのいきほ
 ひを譯すべきなり。たとへば。「春をれば野々よまづちん云々」とい
 うせむうの譯のばてに。いゝいゝと。笑ふ聲をそへたるな
 ど。ならにたのも今のたはむれにいあらず。此下句の。たはふれてい
 へる詞なるを。をむむとてぞむし。おもしろとぞだよそへされば。
 たはふれの答へなるよしのあらえれがたければなり。おもしろたぐひ

いろくたほし。なだらしてをむむと。

○みやびごとい。二つにも三つにも分れたるを。をむむとび言にい。合
 せて一ツにいふあり。又雅言は一ツあるを。をむむとび言にては。二つ
 三つにわかれたるもあるゆゑに。ひとつ俗言をこれにもおれにもあ
 り。とあり。又一つ言の譯語のこととむしこと。異なるともあるなり。
 ○あつしくあつぎ俗言のなき詞にい。一つに二ツ三ツをつらねて
 うつすとあり。又い上下の語の譯の中にその意をこむるともあり。あ
 り二句三句を合して。そのすべて在意をもて譯すもあり。そはたとへ
 ば「よならばなむすやいあらぬ櫻花などの。ことならばといふ詞な
 ど。一つはなちては。いかにうつつすべき俗言なければ。二句を合せ
 て。トアモ此ヤウニ早ウ散クラサナラバ一向ニ初メカラサカヌガヨ

イニナゼサカズニハ井ヌヅと譯せるがごとし。

○歌によりて。もとの語れつゞきさま。ていふをあたにもいひらで。すべて意どひて譯すゞきあり。もとの譯つゞき。こにはなごも。かたくまもりてい。かひりて一うたの意にうとくなるともあれば也。たとへば「こそとやいはむとしとやいはむなど。詞どまらば。去年ト云ハウカ今年トイハウカ。と譯をづけれども。さて、俗言の例にうとし。去年ト云タモノデアラウカ今年ト云タモノデアラウカ。とうつすぞよくあたれる。又「春くるととたれかまらましなど。春ノキタチ云くと譯さゞれば。あたりがたし。來ると來タとは。たがひあれども。此歌などの來るハ。來ぬるとあるゞきとなるぞ。さしいひがたき故に。くるといひへるなれば。そのころをひて。キタと譯すゞき也。かゝ

るたぐひいとたほしなごらへてさとするし。

○詞どかへてうつすゞきあり。「花を見てなどの見てい。通言にハ見とはいえずれば。花ヂヤト思フテと擇すべし。「わぶとこたへよなどの類のこたふるは。浴言にい。こたふるといえず。たゞイフといへば。難義ナシテ居ルトイへと擇すべし。又てにどいどかへて擇すゞきもあり。「春ハ來にけりなどのほしじい。春ガキタツイと。ガよかふ。此類多し。又てにどはと添ふゞきもあり。「花咲にけりなどい。花ガ咲タロイと。ガとどふ。この類ハとよたほし。すべて浴言にい。ガといふとの多き也。雅言のぞとも。多くハガと云へり。「花なき里などハ。花ノナイ里と。ノととふ。又はぶきて擇すゞきもあり。「人しなけれは。ぬれてどゆかひなど。さとしなど。擇言とあては。

ながく〜にわろし。

○詞のところでたきかへてうつすべきとれほし。「あかきとやなく山郭公などは。郭公を上へうつして。権公は残りオホウ思フアノヤウニ鳴クカと澤し。「よるをへ見よとてらす月影は。ヨルマデ見ヨトテ月ノ影カテラスとうつし。「ちごきに物を思ふころ哉のたぐひは。ころを上にうつして。ユノゴロハイロ〜ト物思ヒノシゲイノカナと澤し。「うらさびしくも見ぬわたるかなは。わたるを上へうつして。見ワタシダトユロガキツウマア物サビシウ見エルノカナと澤すたぐひにて。これ雅言と俗言と。いふやうのたぐひなり。又てにをばるところをかへて澤すべきあり。「ものうめる音に驚そなくなど。ものうめるねよぞと。ぞよじは上にあるべき意なれども。をばいひがたき故に。

これはぞよいとちかければ。その例によれり。山風にぞ云く雪とのみぞ云く。といひたらむに。いくばくのたがひもあらざれば也。さるをまひていさゝかのけぢめをわかむとすれば。ながく〜にうとくなると也。「たが袖ふれしやどの梅ぞも。」戀とするかな。などのたぐひのもじは。マアと澤す。マアはやがてこのもの轉れるにぞあらむ。疑ひのやよじは。澤語にはみな。ガといふ語のつゞきたるなからにあるはそのえてへうつしていふ。「春やとき花やれそきとは。春が早イノカ花ガオソイノカと澤すがごとし。

○んは。成言にはすべて皆ウといふ。來んめかんと。ユウイカウといふ類なり。けんなんなどのんも同じ。「花やちりけんは花ガナツタデアラウカ。「花やちりなんは。花ガナルデアラウカと驛す。さて此ナツ

鶯の下シメよれけるなれば。その心をひて聰ワカすべき也。此例多し皆ミナなすらふべし。

○てにぞその事。ぞもしは増カツすべき詞なし。たとへば「花ハナぞ昔ムカシの香カよにほひけるのこぎ。殊コトに力チカラを入たるぞなるぞ。整言には花がといひて。その所にちがらざりて。いきほひにて雅言ニヤクゴトのぞの意に聞キカするとなるぞ。さむ口クチにいふいきほひは。物には書カキとるべくもあらざれば。今はサといふ辭コトバを添ツへて。ぞにあて。花ガサ昔ムカシノ云イハと識ワカす。ぞもじの例レイ。みな然シカり。こそはつかひさま大オホがた二フタつある中に。「花こそちらめ根ネさへかれめやなどやうに。むむへていふとのあるは。さとびごとも同じオナく。こそといへり。今一つ「山風ヤマカゼにこそみだるべらなれ。」雪とのみこそ花はちるらめ。などのたぐひのこそは。うつすべき詞コトバなし。

タデといふと。ナルデといふとのかはりをもて。けんとなんとのけぢめをさるべし。さて又語コトバのつゞきたるながらにあるんは。多くはうつしがたし。たとへば「見ん人は見よ」ちりなん後ぞ。ちるらん小野のなどのたぐひ。人へつゞき。後へつゞき小野へつゞきて。んは皆ミナなからにあり。此類タガヒは。卻語サトシゴトにはたぐに。見ル人ハナツテ後ニナル小野ノとやうにいひて。見ヤウ人ハナルデアラフ後ニナルデアラウ小野ノ。などはいさをれば也。さむるに此類タガヒをも。さむてんならんの意を。こまかに澤ソコとるとならば。散チなん後ぞは。オツ、ケナルデアラウガソノ散チ後ニサと釋ワカし。ちるらん小野のは。サダメテ此ゴロハ萩ノ花カナルデアラウカ其野ノ。とやうに釋ワカすべし。然シカれども。此語コトバにさはいえざればなむにうとし。同じとながら。「春霞ハルカスミたちかすら

ん山の櫻をなどは。山ノサクラハ霞^カカクシテアルデアラウニ。と澤
してよろし。又おの見ん人は見よれども。見ヤウト思フ人ハとうつせ
ば。卻語にもおあへり。歌のさまによりては。かうやうにもうつすべ
し。

○らんは釋はくごとくあり。「春たつけふの風やとくらんなどは。風
カトカステアラウカと釋す。アラウらんにあたり。カ上のやにあたれ
り。「いつの人まにうつろひぬらんなどは。イツノヒマニ散^チテシマウ
タコトヤラと澤す。ヤラらんにあたれり。「人に忘れぬ花やさくら
んなどは。人ニシヲサヌ花カ咲^イタカシラヌと澤す。カシラヌヤとらん
とにあたり。又上にや何^{ナニ}などいふ。うたがひとばなくて。らんを結び
たるには。ドウイフ^フテといふ詞^{コト}ごとへてうつすも多し。又「相坂の

ゆふつけ鳥もわがごとく人や戀^{コイ}しき音のみ鳴らんなどは。人ハ戀シ
イヤラ聲^{コエ}チアゲテヒダスヲナクとうつす。これはとちめのらんの疑^{ウタガ}
ひを。上へうつして。やと合せて。ヤラといふ也。ヤラはずなをちやら
んといふ也。又「玉がつら今はたゆとや吹風の音にも人のきこぬづ
らんなどのたぐひも。同じく上へうつして。やと合せて。ヤラとし
て。下句をば。一向^{イツコウ}ニオトツレモセヌと。落^オつつけてとちむ。これらは
らんとうたがへるとは。上^{カミ}にありて下にはあらざればなり。

○らしは。サウナと釋^カす。サウナは。さまなるといふとなる。音便に
サウといひ。るをさぶける也。然れば言の本の意も。らしとれたじに
もむきにあたる辭^{コトバ}なり。たとへば物思ふらしと。物ヲ思フサウナと釋^カ
す。如^トき。らしもサウナも共に。人の物思ふさまなるを見て。らしは

かりたる言なれば也。さてついでにいはむは世にらんをらしとをた
 だ疑ひの重きと輕きとのたがひとのみ心得てみづがらの歌にも。そ
 のころもてよむなるはひびとなり。たといば時雨ふるらんは。時雨
 カフルテアラウ也。時雨ふるらんは。時雨カフルサウナの意也。此欲
 言のアラウとサウナとの意を思ひて。そのたがひあるをわきまふべ
 し。
 ○おなはさとびごとにもカナとらん。語のつゞきとまた。雅言のま
 りにては。うとさきもきければつゞける詞をば。上下にたきあつしあ
 るは言どくはつなごとして驛とづし。すべて此辭は。歎息の詞にて心
 をふくめたるをばほければ驛にはそのふくめたる意の詞を。くを
 ふべきわざなり。

○つゞの語は。くま〜あり。又雪はふりつゞなど。いひそて〜とち
 めて。上へ〜らざるは。テと文して下にふくめたる意の詞をくはふ。
 いひそてたるつゞは。必下にふくめたる意あれば也そのふくめたる
 意は。一首の趣にてさしむる。

○けりけるければ。ワイと少り。「春は來にけりぞ。春カキタワイとい
 へるがごとし。またこそこの結びにも。ワイをそつてうつそことあり。
 語のきれざるなむらにあるけるければ。とに通さそ
 ○なりなるなれば。ヂヤと嘉そ。ヂヤハ。テアルのつゞまりて。ルのは
 ぶかりたる也。さる故に東の國にては。ダといひなり。なりもとにあ
 りのつゞまりたるなれば。鄙言のヂヤダと。もと一ツ言なり。又一ツ
 「春くれば雁かへるなり。」人まつ虫の聲すなりなどの類のなりは。あ

なたなるとをこなたより見聞ていふ詞なれば。これはアノ鷹カカヘ
 ルツアノ松虫へ聲カスルツなど通すべし。此なりはデヤと採すなり
 とは別よて。語のつゞけをまもるはれり。デヤとつゞす方は。つゞく
 詞よりうけ。此なりは。切るゝ詞よりうくるをだまりなり
 ○ぬぬる。つゞつたりたる。きとなど。既に然るうへといふ辭は。体言
 には。皆にしなべてタといふ。なりぬかりぬるをばナツタ來つ來つる
 をば。キタ。見たり見たるをば。見タ。ありきありしをば。アツタといふ
 が如し。タは。タルのルをばおける也。

○あはれを。ア・ハレと擧せる所多し。たとへば。あれにけりあをれ
 いくよのやどなれやを。何年ニナル家デヤツヤ。ア・ハレキツウ荒
 タワイと布せる類なり。かく議す故は。あはれはもと歎息をばにてす

なほち今世の人の歎息てア・ヨイ月デヤ。ア・ツライイデヤ。見ハレ
 見事ナ花デヤ。ハレヨイ子デヤなどいふ。このア・とハレとをづらぬ
 ていふ辭なればなり。あはれてふことをあまたにやらじとや云ふは。
 花を見る人の。ア・ハレ見事ナといふその詞をあまたの櫻へゆらじ
 と也。あえれてふところうたて世の中を云ふは。ア・ハレオイトシ
 ヤト人ノ云テクレル詞コソ云ふなり。大かたこれらにて心得べし。さ
 てそれより轉りては。何事にまれ。ア・ハレと歎息あるよとの名とも
 なりて。あはれなりとも。あはれを志すしらぬなど。さまとひる
 くつかふ。そのたぐひのあはれは。ア・ハレと思えるよとをさして
 へるなれば。雜語には。たぐひにア・ハレとはいえず。そは又その思へる
 ずぎにまたかひて。別に模語あるなり。

○すべて何事にまれ・あなたなるとには・アノ・或ハアノヤウニ・又ソノヤウニなどいひ・こなたなるとには・ユレ・式は此、ヤウニなどいふ詞を添て寫せるとれほきは・その事のれもむきをだかにせんとてなり。

○物によせて・その詞をふしたる・又物の縁の語のよしなど・すべて詞のうへよよれる趣は・催語と成語とは・ことごとなれば・たゞには寫しがたし・さる類は・切語のうへにてもことわり聞ゆべきをまに・語をくはへて倦せり。

○枕詞序などは・歌の意にあづかれるとなきは・すてゝ寫さざ・これを衝しては・事の入まじりて・ながくにはまきはしければなり・その歌の趣にめられるすぢあるとば・その趣にまたがひて親す

○此ふの書るやう・寫語のむぎりは・片假字をもちふ・假字づひひをも正さざ・便よきまめせたり・摸のがたはらに・とりく平假字して・ちいしく書るとあるは・その歌の中の詞なるをこゝは此詞にあたりといふとを・猶たしむまめせる也・數のもじは・その句をまめしたる也・又かたへに長くも短くも筋を引たるは・歌にはなき詞なるをそへていへる所のさるしなり・そもくもしく多く詞をそへたるゆゑは・すべて歌は・五もじ・七もじ・みそひともじと・むぎりのあれば・今も昔も思ふにはまめせず・いふべき詞の・心にのこれるもれほければ・そとをめぐりて・れきなふべく・又あらにそへて・たすけもそへべく・又うひまなびのともがらなどのために・そのれもむきをたしむにせむとて也・**一** **二** **三** **あ** **は** **上** **な** **ら** **る** **は** **枕詞序** **な** **ど** **語** **を**

ぶげるところをしめせるなり。但しひをあたあしびきなど。人のよく
枕詞と知りたるは。此まゝしをたぶげり。一二三は句のついで。上は
かみの句也。

○うつし語のまじりよつぎて。ひらもなして書ぶとあるは。模の及びが
たくてたらはざるぞ。たそけていへるぞ。又あつても。いをまほしき
とども。いをよめづといへるなり

○大かたいにしへの歌を。今の世の語にうつ寫そぢにつきては。猶
いをまほしきとゞも。いと多かれど。まのみはうをさければ。なぞら
へてもまじりねと。みなもらして。今はたゞこれかれいさよかいへの
みなり。又今さだめたる。すべての寫ともの中には。なほよく考へな
ば。いをまほしきとゞも。いをよめづといへるなり

て。此、事にのみは。いをいさよめづらはで。一わたり思ひよれるまに
まに物しる也。歌よを見しれらん人。なほまされるを思ひひたらむふ
しもあらば。そはよめざるも。あらためしよめし。

本居宣長

頭書 古今和歌集遠鏡卷之第一

やまとうたを人の心とたねとしてよろづのとはとぞ
なれりける

○哥うたト云物ハ人ノ心ガタチニナツテイロクノ詞ことばニナツタモノザヤワイ
世の中にある人ことわざとけきものなれば心よおもふ
とを見るものきく物おつけていひだせるあり

○世よ中ニカウシテ居ル人ト云フモノハ。イロクト事ことノ多イモノザヤニ
ヨツテ。ソノナニヤカヤノ事ニツケテ。心ニ思フコトヲソノ時。見ル物
ヤ聞クモノニツケテ。云ヒ。マシタノザヤ

花はなよなくうぐひす水みづよすむかりづのこゑをきけハはなき
としいけるものいづれか歌とよまざりける

○花はなノ枝えだヘキチ鳴ク鶯うぐひすヤ水ニスンデアかきル蛙かきヤナドノ聲チキケハソノ

やまといハ本ト大和
國くにのとなり代よ久し
く皇都みやことなしませし
皇國みやくにゆゑに、やまを
云てをへて日本の
とともなりゆよりて
こゝハ日本の歌てふ
意なり

歌ハ古ハかならず
たひしもの故に人の
みならせ鳥けた物も
虫も音たて、鳴さへ
づるハ音かれら心

よりうたひ出すなれ
人の歌にかはらぬ
と云なり哥として必
よみうたふべきもの
ぞ

此事ハわかしも今も
常あるとなり雄略天
皇の御ころろたけ
くしくませるに歌
もて和奉りしと日本
紀に見えし類ひこれ
らの歌の徳をいへる
なり

おもふに此注は凡天
慶の末圓融花山の御
ころろなごに古のと

面白イトコロハミナ歌キヤヌレヤ生テアルホドノモノハ何カ歌ヲ

ヨマヌツ鳥類畜ルキマデ皆メンクニソレノノ歌ヲヨムチヤワイノ
ちからをもいれぎしてあめつちをうごかじめに見えぬ
おは神とあわれと思ひせ男女のなかまもやはらげたけ
まものふのころろをもなぐさむるハ歌なり

○チカラモ入レズニ天地チウゴカシタリ。目ニ見エヌ鬼ヤ神ヲ感シサシ
タリ。男ト女トノアヒダヲ。ムツマシウナルヤウニシタリ。アラクマ
ノイ武士ノ心ヲヤハラケタリナドスルモノハ哥キヤ
この歌あめつちのひらけはじまりける時よりいできに
けり

○サテ此哥ト云モノハ。天地ノハジマツタ時カラ。デケタワイ
あまのうきはしのしたにてめ神を神とかり給へ
ることさしへる歌なり

○ソレハカノ伊弉諾伊弉册ノ尊ガ天ノ浮橋ノ下デ。御夫婦ノ神ニオナリ
ナサレタコトヲ。オヨミナサレタ哥ノコトヤヤ
しかあれども世よつたばることハひさかたのあめにし
てのしたてるひめよばじまり

○サウチヤケレヒ。シツカリト哥ト云テ世中ニツマハツテキタノハ
(天デハ下照姫ト云)神カラハヨマリ
またてるひめどのあめわかみこのめなりせうどの神のかたちをか
谷ようつりてかやくをよめるおびすうたなるべし。これらハも
じのかずもさだまらず。歌のやうもあらぬとなり

○下照姫ト云神ハ天若彦ト云テ神ノ御内シヤウデアツヌ。ソノ歌ト云ハ
下照姫ノ兄ゴガ。殊ノ外ウツクシイ神デ。ソノ身ノ光リガ。ソコラノ岡
ヤウ谷へ映リテ照リカ。イタコトヨシダエヒス歌ト云ガアルガ。其事
デアラウ。コレラハ文字ノ數ナドモ定マツタコトモナウテ。歌ノヤウデモ

善も徳得ぬ人のしわ
となりより注ご
に難あり。一も女神
男神となり給へる
と云夫婦の契始たま
へるといしらるれ
ご右のとどくにひ
てははじめて女神男
神と成たまへると云
に聞なされて文のつ
たなきなり女體男體
もとよりわかちませ
るをヤ
えびす歌ハ日本紀
にこの歌を夷曲と書
てひなぶりと訓むそ
れしらぬ人の夷はえ
びすともよむも思
ひあやまれるなり

五七五の定めもなし
心のゆくまゝにつら
ねたるをこそ心の心辨
まへがたしきやこは
いぶかしき響さまな
りにしへまなぶ人
は大かたにあきらむ
るまいかでおきがた
きとほいふ

こは素盞雄尊のはト
めて三十一言によみ
ませしにて人の世
となりてぞそれにな
らひてよむと云をか

ナイコト、モギヤ

あらかねのつちよてりすこのをの尊よりぞおこりける

○ あらかねの此ノ國土テハ素盞鳴尊カラサハヨマツタワイ

ちはやぶる神代に歌のもじもさだまらずすなほにし
てことこのころあきがたかりけらし

○ あひやぶる神代ノ時分ニハ歌ノ文字ノ數モマダ定マツタフモナシ。コトノ

ホカ古風ナリデ。ドウ云フヲヨシメモノヤラシノ歌ノ心ガ今見テハワ
カリニクイフデアツタサウナ

人の代となりてすこのをのみことよりぞみそもじあま
りひともしのよみける

○サテ人ノ代ニナツテカラ。カノ素盞鳴尊カラ始マツタ歌ノトホリニ。

卅一字ニヨヨムコトニハナツタワイ

すこのをのみとはあまてるおはん神のこのかみあり女とすみ給ハ

く詞を尋ていひか
つ句を上下におきか
へてかけるは文の一
體なりうたにもこの
體を隔句にて專らよ
むなり

八色の雲と云は八の
字假りてかけるより
思ひあやまりて云も
のぞやくも八雲の彌
立つをいふなり八重
がきも彌重めぐらす
垣なりさて稲田ひめ
をこめまゐらすると
て作りませる宮なり

むとていつもの國は宮づくりし給ふ時よそのことろよあいらの雲
のたつを見てよみ給へるなり

○スサノヲノ尊ハ天照大神ノ御兄ゴ様ヤヤ。シテソノ御歌ト云ハ。女ト

一所ニ御住ナサレトテ。出雲國へ御殿ヲオタテナサル。時ニソノア

マリへ八色ノ雲ガ立ツタヲ御覽ナサレテ。オヨミナサレテ御歌ノフヂ

ヤ

八雲たついづも八重垣つまこめよ八重垣つくる

その八重がきを

○アレイクヘモ雲ガタツタ。アノ出ル雲ノ八重垣ワイノ。吾妻ヲ入レル

宮ノタメニ。アレ雲ガ八重垣ヲ作ツタ。アノ八重垣ワイノ

らづも。らでくもなりてつゝまりて。つとある。こは國名よハ

あらず。

かくてぞ花をめで鳥をうらやみ霞をあされひ露とかか

あまなげくに言にそへて稱るにも愁ふるにもいへりかなしひの身にむかひに云千里の道も一歩に出で山も微塵より登ると云漢文によりてかいらたりよろづのこどその始は少なかるが後には高くも廣くもなり行なり

みかどとはいにしへ朝の字にあて、何天皇の朝をなにのすめらみことのみかどといへり

この注もあやまれりすてに御父天皇宇治のみこを皇太子に立おかせ玉へ、東宮を夫れに譲給ふとは云まじきことなり天皇の御位をこそゆづりあひたまへられた王仁がいぶかしめること國史に見えず此歌はすでに御位につかせ給ふて後にいはひて奉りし意なりこの花を梅なりといふも後の説なりいにしへ木の花とは諸木の花をいへり

浅香山ゆげさへ見ゆる山の井のあさくハ人を我思はなくに

あさか山のとのばはうねへのたはふれよりよみて

○アサカ山ノ歌ハ奥州采女ノタハムレカラヨシメ歌デ

大さゝきのみかどのなみのづよてみこと聞えける時東宮をたがひよづりてくらゐにつき給ひて三年よなりまければ王仁といふ人のいぶかり思ひてよみてたてまつりける歌なりこの花ハ梅の花をいふなるべし

○難波津ノ歌ト云ハ。仁徳天皇ノ難波津ニ御座ナサレテ。皇子ト申シタ時ニ東宮宇治ノ若郎子ト御タガヒニユヅリアフテ。御位ニ御ツキナサレイデ三年ニナツタニヨツテ。王仁ト云々人ガマナカネテシンキニ思フテ仁徳天皇ヘヨシメ上テ哥サヤ。其歌ニコノ花トヨシメハ。梅ノ花ヲ云マデアラフ

わがをしへ子須賀直見がいひけるハ。東宮をハ東宮とを。寫しあやまれるなり。とををと似たり。

とふころろとばおほくさましくになりよける

○サウシテサ。花ヲ賞斷シタリ。鳥ヲウラヤンタリ。霞ヲ感シタリ。露ヲ愛シタリスルヤウナ心詞ガオホウサマザマニナツタモノヤワイとほきところもいでたつあじもとよりはじまりて年月をわたり高き山もふもとのちりひぢよりなりてあま雲たを引までおひのほれるごとくよこの歌もかくのごとくかるべし

○キツウ遠イ所デモ。タツタ一足フミマス。足モトカラ始マツテ。イク月モ何年モカ、ルホドノ所マデモユキ。又キツウ高イ山デモフモトノナリホコリホドノ土カラ段々ツモツテ。雲ノタナビクホド高ウナルヤウナ物デ。此歌モンノトホリナ物デアラウ

難波津のうたのみかどのおほんばぢめなり

○サテ難波津ノ歌ハ天子ノ御事ヲヨシメ歌ノハヨシメヤ

山の井いあさきもの
なればみおこせるな
り濃香山は陸奥にあ
りさてかやうに下に
てにさよみさむるを
後世は必上へかへる
言させりにしへは
たしいひおさふる意
なりさてこの葛城王
は班田使とて田をわ
かちて作らしむるこ
とのあるがその任な
るにてくたせ給ひ
けん

さて二歌とも世に
めでたき功ある歌な
る故にいにしへ書な
らふは下めにまつ終
てあたへかつきなへ
もならばしぬとなり

かつらきのおほきみをみちのおくへつかりたりける時に國のつかさ
ことおろそかなりとてまうけなせたりけれとすさまじがりければう
ねへなりける女のかいりけとりてよめるなりこれよどおほきみの心と
けよける

○コレハ葛城王ト云テ。御用テ奥州ヘツカハサレタ時ニ國ノ守ナドガ御
馳走申シタケレレ。アシラヒガ鹿末ナトテ葛城王ガ。キツウフケウニ思
ハレタ時ニ。其國ノ采女デアツタ女ガ。盃ヲ持テ出テヨシダ歌デヤ。
トコロガ此歌デ。葛城王ノキゲンガナホツタツイ

此ふた歌ハ歌ノ父母ノやうよてぞ手ならふ人のばあめ
よめしける

○此ナニハツトアサカ山ト二首ノ歌ハ歌ノテ、親ハ親ノヤウデ。子
供ノ手習ノ始メニモマツ是ヲナラウコトデヤツイ

そもそも歌のさまむつかりからのうたにもかくぞある

ベキ

○サテマツ歌ニ六ッノワケガアルデヤ。唐ノ詩ニモ大カメ此六ッノワケガ
サアルデアラウ

そのむくさのひとつにのそへうたおほさ、さのみかをを
そへ奉れる歌

○ソノ六イロト云一ツニハッヘ歌。カノ仁徳天皇ヲオヨソヘ申シタ歌
かひのづよ咲やこの花冬ごもり今をはるべとさくやこ
のばな

○難波津ニサクコノ花ガ三サアモウハ春サキチヤト云テサクコノ花ガ
といへるなるべし

○ト云ヤウナガサウデアラウ
ふたつにのそへうた

咲花に思ひつく身のあぢきなき身よいたつきのらるも

詩の六義もていへれ
どそれなしらぬよそ
とくにいへるは上手
の筆つきなりされど
こゝにあげたるは漢
の六義と意義異なる
ぞ

おほさ、さのみかご
といふこの歌までこ
れ又誰ぞ一人の注な
るべしそれを後に本
文に書きさらはせし
ものよこれと大字に
かくはわるし

宇萬伎みなにはづの歌はそののみ只今渡來たるから人のはやくこの詞を得てかくまでうるはしびたる歌をよみ出んとさのいぶかしきなり猶しひていは日本紀素宴の歌にて大ざいきの天皇の御うへを題にさしり得たる人のよみけるにやあらん

朝霜になすらへておきてといふなり

しらきて

○咲テアル花ニ。ウツカリト思ヒ入テ居ル者ノサテモイラザルコワイノ。身ニ心勞ナコトノデケテ。クルモシラズニサといへるなるべし

これのたゞといひて物よたとへなせぬものなり此、歌いかよいへるよかわらむそのこゝろがたくいつよたゞと歌といへるなりこれよのかなふべき

○此カヅハ歌ト云ハ。ソノ事ヲタビコトニ云テ。物ニタトヘナドモセヌモノヤヤ。ソレニ此、咲花ニト云歌ヲカヅハ歌ニ出シタハドウ云心チヤヤラ。ガタンガイカヌ。五番メノタビコトウヲト云所へ出シタ歌ガナ。此、カヅハ歌ニハ叶フデアラウ

みづよのあすらへうた

君よけさわたの霜のおきていなむ戀とまきとよきえ

やわたらむ

○オマヘガ。別レテ起テイナシヤツタナラ。ウシハ今カラ。戀シツ思フタビゴトニ。消ルヤウニ思フテタテルテガナアラウ。君よの。一本君がとあるよろし。といへるなるべし

これの物よもなすらへてそれがやうよなむあるとやうにいふなりこの歌よくかなへりとも見えす

○此ナスラハ歌ト云ハ。物ニナツラヘテ。ソノ物ノヤウナド云ヤウニヨシタラ云ヤガ。此君ニケサト云歌ハ。ヨウ叶ウタトモ見エヌ

たらちめのおやのかふこのまゆごもりいふせくもあるか妹よわたきて

○養蚕ノマエニコモツテアルヤウニ親ノヒザモトニ居テ外へ出ヌ娘ナレヌ。ドウモエアハイデ。サテモノモレンキナカナ

たらちめといふの後
のあやまりなり萬葉
集垂乳根之母我養蚕
さかけり萬葉にふる

に野歌の下に入へ
くこゝにハ叶ハズ

ありそ海は荒磯海を
ついでていふよちん
算ふるなり

戀おもふことのかぞ
もしられずさまん
に思ひみだるゝをい
はんとて浪のままと
にたとへていへり

かくれたるこころな
きは詩の奥の體もて
いふにてあかし須摩
のあまの歌はよくか
舌へり

かやうなるやこれよのかなふべからむ

○此ヤウナ歌ガ。此ナステハ歌ト云ニハ叶ウデアラウカ
よつよのたとへうた

わが戀のよむともつきじありう海の濱のまごどりのよみ
つゝすとも

○タトヒ海ノ濱ノ砂ノ數ハヨミツクスト云テモ。オノレガ戀ノシゲイ數
ハヨミツクサレマイ

これのよろづの草木鳥けだものよつけて心を見するなり。此歌
のかくれたるこころなむなきされどはじめのそへ歌ごおなじやう
なればすこしさまをかへたるなるべし

○此タトハ歌ト云ハ。イロノノ草木ヤ鳥ケダモノナドニヨセテ思フ心
ヲ見セダモノギヤ。ソレニ此ワガ戀ハト云歌ハ。カクレタ所ガナイ
タトハ歌ハ物ニタトヘテ云テ。アラハニハ云ハヌギヤニヨツテ。カク

たにこゝの物にも
よせずこの意をあ
りのまゝにいへるな
り

この歌は少のかざり
なく直にいひつけ
しなり

レタ所ガナウテハスマス。ギヤケレモ始メノソハ歌ト同シヤウナナ
レバ。スユシモヤウノカハツタ歌ヲ出シタモノデアラウ
すまのあまの鹽やく煙風をいたみ思はぬかたに
たあびきけり

○スマノ浦ノ海士ガ鹽ヲヤク煙ガ風ノハゲシサニ。思ヒモヲラヌ方ヘナ
ビイタイタウイ

この歌などやかなふべからむ

此ノ歌ナトガ。タトハ歌ニハ叶ウデアラウカ

いつよのたとへうた

いつはりのなきよありせむいかばかり人の言のさうれ
とからまじ

○偏リト云フイガナイ世ノ中デアラウナラ。ドレホド人ノ云フテクレル詞
ガウレシカラウゾ

この注も詩の雅の體
 き云にてこの言語
 にかなはず正の字を
 たいさよめい
 はその意にあらむ直
 の字をたゞもなほ
 さもよむその義なり
 山さくらの歌はかく
 れたるをまなけれど
 詞はたゞこゝにあら
 ずかざりしころあ
 ればかなはず
 いはひいむを延て
 云詞なり神につか
 るに物ごをいみつ
 しみてする時は非
 常を思をもて神をい
 はひ君をいはふなど

とらへるなるべし

これりそのとりのほりたゞさきとらふなり

この哥のこゝろさらよかならずとめうたをやいふべからむ

○此、タビコト歌ト云ハコトノト、ノウテ。タビコトイノヲ云ギヤ。コノイ
 ツハリノト云フ歌ノ心ハチガラ叶ハヌ。此、歌ハトメ歌ト云フ物デアラ
 ウカ

山櫻あくまで色を見つるかな花ちるべくも風ふ
 かぬまに

○山櫻子腹一ハイ十分ニ見ヌサチモアリガタイ一カナ。花ノナルクラサ
 ノアライ風モフカヌ。ケツカウナ御代デサ此、歌ナドガ。タビコト歌ト
 云ニハ叶ウデアラウカ

むつれいはひうた

此どのうづもとみけりなまぐくのみのつばよつばよ

殿づくりせり

○此、御屋形ハゲニモ御繁昌ナリヤワイ。御殿くノツマトガ段々
 ト三ツモ四ツモツバイテサテくケツカウナ御普請ギヤ
 とらへるあるべし

これの世はめて神よつぐるなり。此、哥いはひうたどの見えす
 なむある

○此、イハヒ哥ト云ハ。御代ヲホメテ。其、事ヲ神へ申スノギヤ。ソレニ
 此、コノ殿ハト云哥ハドウモ。イハヒ哥トハ。見エヌテイギヤ

春日野にわかになつみつゝ萬代をいはふ心の神ぞ
 あるらん

これやすことかなふべからむおはよとむくまよわかれむとはあ
 るまじきことよなむ

○コレラナドノ哥ガ。イハヒ哥ト云コハ。スコシ叶ウデモアラウカ。マ

云なりそれよりうつ
 して祝ひの事にもい
 はふといへり
 さき艸さひさゆり花
 ならんこの百合は並
 あかく木に三ツ枝に
 わかれて花咲葉と葉
 と相むかひたるに似
 たればなりされどそ
 の始つから國の福草
 よりしていはひ物に
 する故によみしと云
 べけれど此の歌も定
 めてさきくさの三ツ
 さいはん冠におき
 たるなるべし

世をほめて神に告る
 さいふは漢の頭の義
 にてこの詞にかな
 はずこゝには世をほ

めて神につくるさい
はでもいはふそのみ
にと足れるなり

春月野の歌はいはひ
歌なれど注にいふ意
はこもらす凡そ六
くさにわかれんこ
はあるまよと云ば
ろし

今の世の中は今の
京となりて延喜の
るまを云

これは歌の徳をしひ
てかされるものなり
御國のいにしへ人は
こころにうらうへお
かすよつて心のまこ
このみを打いづれば
戀の歌多きなりこ
もから人のこころも

アタイテイ。哥ノヤナイ。六イロニ分レウフハドウモサウハワケラレ
ヌフデサゴザル

今のよのなかいろよつき 人の心花よなりよけるよりあ
だなる歌はかなきとのみいでくれ

○サテ今ノ世ノ中ハ人ノ心ガ花トイフニツイテ。ウハキニナツタカラ
マテ。アダナキツトセヌ哥ハツカリデケルニヨツテ

いろこのみの家よろもれ木の人とれぬとよなりてまめ
なるところよの花すゝきはよいたすべきことよもわら
ずなりよたり

○大切ナ歌ガ。色事シノ家ノ村。ナイヨウウゴトニナツテ。カタイト

花

アラハシテダサレヌヤウニナツテシマウタ

ろのはじめをおへばかゝるべくなむわらぬ

○ホンヌイノトコロヲ思フテ見レバガウアラウコトデハヤナイ

てかけり
むかしハ御身近くつ
かふまつる人々に歌
をよませて御あそび
ありしなり

御國のいよしへの朝
に歌をもて人の賢愚
をこころみ給及弟の
列國史に見わたるこ
となき下に僧正通昭
の歌はまことすくな
しといひ業平の情あ
まりてなきいへり還
昭ハ先帝の御ために
出家してつひに僧正
位ニのぼるまでめで
たき終なき業平

古のよののとかと春の花のわた秋の月の夜をどにさ
ふらふ人ととめしてとよつけつゝ歌をたてまつらしめ
給ふ

○昔ハ御代々ノ天子様ガ。春ノ花ノ時分ヤ。秋ノ月夜ナド云キニハ。イ
ツデモ。ツメテ居サツシヤル衆ヲ御前ヘメマテ。ナンツレカツレノ事
ニツケテハ。哥ヲ上ルヤウニ仰付ラレヌ

あるの花とこふとてたよりなきところさまとひあるの
月を思ふとてあるべきなきやとよたどれる心を見給ひて
さかおろかなりとあるとめとけむ

○サウシテ。或ハ花ヲ見タウ思テ。ヨリツキモナイ。所ナドマデ尋チマ
ハツテアルイタリ。或ハ月ニ執心ヲテ見ニ行テハ。マダ出ヌサキヤ
入テマウタアトナド聞イノニ。案内モシラス所ヲアチラヘコナラ
ヘトシテアルイタリ。スルヤウナ風流ナ心々ヲ。ソノヨシメ哥デ考ヘ

の歌のまことすくなく
 し楽平のいかにのみ
 たりにおはするが賢
 情もあまれるものに
 いへるこの人々の
 よむ歌とて、るさま
 のうちうへなるをい
 ひながら賢愚の歌も
 てわかち給はんこと
 おぼつかなきことな
 り前にも云御國に詩
 歌もて科場を立られ
 しこと是よりいにし
 へたしかなる書籍に
 は見ぬぬことなり

ヲ御覽ナサレテ。ツノ歌ニヨツテ。アレハカヤコイモノチヤ。アレハ
 オロカナ者チヤト云フチ。御存知ナサレテモヤウヤ昔ハサ
 花をこふといふより。やみよたどれるといふまですべて。風流たる人
 のさまをいへるなり。まかるよ諸説。これを愚なる方よとれる。ひが
 となり。さかしおろかなるをまろしめすりさてよめる歌のさまをもて
 こそ考へ給へるなれ。もしこれらおろかなるかたのまわざとせば。今ひ
 とつかしき方をいはてり。とどくのはすたも愚なる方のみをいひ
 て。やむべきよりのあらざるをや。
 とかわるのことにあらずとれ石にたとへつくは山よか
 けて君とねがひ
 ○サテ又サウハカリデナシニ。サレ石ニタトヘタリ。筑波山ニツクナリ
 シテ君ヲ御祈リ申シ
 よろこび身にすぎたのしみこころよあまり

のにもかげのあれど
 君がみかげにますか
 げもなし

かしくつゝ世をやつ
 くさん高砂のをのへ
 にたてるまつならな
 くに
 墨の江のきしの姫松
 人ならびいく代かへ
 しささハましものを
 われさても久しくな
 りぬ住よしのきしの
 ひめ松いく代へぬら
 ん

○又ハ身ニ過タヨロコビノアルキヤ。心ニアマルホドオモシロイコトノ
 アルキヤナド
 ふどのけふりによそへて人とこひ松虫の音ふ友をしの
 び
 ○アルヒハ又富士ノケムリニヨツヘテ。人ヲ戀シウ思フコトナ云タリ。松
 虫ノ聲チキイテ友ダチヲナツカシウ思タリ
 高砂住の江の松もあひおひのやうよて
 ○キツウ年ガヨツテハ。高砂ヤ住ノ江ノアノ久シイ相違ナヤウニ思ハレ
 タリ。スルキニモヨミ
 わひおひの。今の俗語よもいふとよて。相違なり。そのもとだがひよ
 追み追れみする意より出たる言よて。いくばくの前後もなく。大かた
 同じほどあるとよいへり。
 をとこ山のむかをしを思ひいで。をとなへくのひととまよ

今もこそあれわれも
むかし小男山さゆゆ
く時もありこしもの
を
秋の野になまめきた
てるをみなへしあな
かしがまし花もひこ
き
残りなくちるぞめた
きさくら花ありてよ
の中はてのうけれは
秋風にあへすちりぬ
るもみちの行へさ
ためぬわれぞかなし
き
あら玉の年の終りに
なるほどに雪もわが
身もふりまきりつゝ
行年のましへもめる
哉まがみ見るか

くねるにも。歌をいひてぞなぐさめける。

○又年ヨツテハ。男ハ。ヲトコザカリテアツタ昔シノ事ヲ思ヒマシ。女ハ
ソカザカリノ早ウスギタコトヲ愚癡ニクヨクト思ウヤウナ時モ
ミナ歌ヲヨンデヤ心ヲハラシタギヤソイ

又春のわじたま花のちるを秋の夕くれよこの葉の落
るをき

○又春ノコロ朝花ノナルノチ見タリ秋ノユフガタ木ノ葉ノオチル音ヲキ
イタリ

あるひとととよかゞとの影は見ゆる雪と浪ととなけ
き

○或ハ鏡ノ影ニ見エルツガ白髪ヤ面ノシツノ毎年多ウナルノチ見テ歎イ
タリ

草の露水のあわと見てわが身をおどろさ

げさへにくれぬとお
もへ
長歌ニ難波のうらに
立なみのなみのしほ
にやおほれなん
露をなとあたなるも
のと思ひけんわが身
も筆におおぬばかり
ぞ
水の沫のきえてうき
身といひおがらなが
れてもなほたのまる
いしへの賤のをだ
巻いやしきもよきも
さかりありしもの
なり
わくらばにさふ人あ
らば酒のうらにも
まはたれつゝわぶこ

○草ノツユヤ水ノ沫ノキユルヲ見テ。我身モアノトホリギヤト云フヲ知
テ驚イタリ

あるひのきのふのさかえおどりて時をうしなひよよわ
びしたしかりももうとくなり

○アルヒハ昨日マデハ繁昌シテ。何ノ思ヒユトモナカツ者ガ。ニハカニ
不仕合せニナツテナンギチシタリ。又モトシマシカツ中ガ。ソエン
ニナツタリシトキ

あるの松山の浪をかけ野中の水をくも秋萩の下葉をな
がめわかづきのしぎのばねがきとかぞへ

○或ハ末ノ松山ノ波ヤ野中ノ清水ヲタトヘニシタリ。萩ノ下葉ヲナガメ
タリ曉ノ鳴ノ羽根ガキスル数チカツヘタリ

あるのくれ竹のうきふしを人よいひよとの川をひきて
世の中をうらとまづるよ

こたへよ
君をおきてあだし心
をわれもたば末のま
つ山なみもこえなん
いにしへの野中の清
水ぬるけれどもとの
心をしる人ぞくむ
秋萩の下葉色つく今
よりやひさりある人
のいねかてにする
曉の鳴の羽むきもも
ほがき君がこぬよ
われぞ敷かくよにふ
れはことのはしげき
くれ竹のうきふしと
さになぐひすぞ啼
ながれていもせの
山の中にあつるよし
の川のよしやよの

○或ハ **身ノウイ事ナ人ニハナシ**。吉野川ヲタトヘニ引テ世ノ中ヲ恨
ンダリ
きつるといへる詞次の文どあひかなはず。いか
今いふじの山もけふりたすなりながらの橋も造るな
りとときく人の歌ふのまご心をさぐさめける
○又今デハモウ富士山モ烟ノタ、ヌヤウニナリ。長柄ノ橋モ又アタラシ
ウ。出来タルト聞ク人ナドハ別シテ歌ヨムバツカリデハ心ヲハラシタ
ヤヤワイ
つくるを。盡なりと見たる説の。ひがとなり。もし盡なれば。つきぬ
かりとこそいへ。つくるなりといはず。これ雅言の必ズ定れる格なり
いよしへよりかくつたはるうちにもならの御時よりぞ
ひろまりにけるかのおほんよや歌の心をしろしめしけ
む

中
上に富士のけふりに
よそへて人を戀とい
ひてこゝにハその烟
も立すなりにたるさ
いへりこれは延暦十
九年にこの山大にや
けその後も貞觀のこ
る又大やけしがその
後けけふりの絶たる
なり
いにしへ今の歌よむ
人さいへり
ならの御時よりとい
ふよりみつのくらさ
さいふまでハ後人の
書そへたるものさか
い

○ズツト昔ッガラ右ノ通り。傳ハツテキタウチニモ奈良ノ御時カラ別シ
テヒロマツクワイ。其御時代ニハ定メテ歌ノワケヲヨウ。御存知デア
ツタモノデアガナアラウ
かのおほん時よおほきとつものくらるかきのもとの人ま
ろかん歌のひじりなりける
○其御世ニ正三位柿本ノ人磨ハ哥ノ聖人デアツクワイ
これハ君も人も身とあはせたりといふなるべし
○コレハマコトニ君臣合體ト云モノデアアラウ
秋のゆふべ立田川よあがる紅葉をばとかどの御目よ
錦と見給ひ春のあはれ吉野山の櫻ハ人まろが心よハ雲
かどのとかんおほえける
○秋ノ夕ヅレニ立田川ニ流レル紅葉ヲハソノ奈良ノ帝ノ御目ニハ錦ノヤ
ウニ御覽ナサレ。春ノ朝吉野山ノ櫻ヲハ。人磨ノ心ニハ雲カトハツカリ

云とく奈良の宮に
いたりて歌に君臣合
體と云べき君ましま
さすまして人丸の時
代もたがへれば云に
たらぬことなり

ある人これは世説新
語補といふ書に陳元
方季方といふ兄弟の
人あり元方が子の
長文季方が子の孝先
とあるの、その父の
才を祖父太丘にとひ
しゆバ太丘かこたへ
に元方は兄さなしが
たく季方は弟さなし
がたしと云しなもて
かきしものぞといへ
り

思ハレタツイ

又山のべのあか人といふ人ありけり歌よあやしくたへ
なりけり

○又山ノベノ赤人ト云人ガアツタツイ。コレモ哥ニ妙ナ名人デアツタツ
イ

人まろいあか人がかまにたゝむとかたかくあか人の人ま
ろがまもにたゝむとかたくなむありける

○人マロハ赤人ノ上ニヌツコハナリニクカラウヤ。赤人ハ人マロノ下ヘ
オキニクイクラ井ナコトデアツタツイ

ならのとかぎの御うた

立田川もまちとだれて流るりりわたらバ錦なか
やたえなむ

人まろ

奈良の帝の御歌は右
にいへるとどくなり
又梅の花ほのく等
の歌のみなよみ人し
らずと表にしるされ
たるを正しすすべし
左の注は採まどきこ
とその所々にいはん

梅の花それとも見之ずひさかたのあまぎる雪の
なべてふれゝバ

ほのくくとあかしの浦の朝ぎりよ島かくれゆく
船をしぞ思ふ

赤人

春の野にすれつとにこと我ぞ野となつかた
みよねにける

○春ノ野ヘスミレラツマツト思ウテ。オレハ來タガ。アマリノドカデ面
白サニ。此ノ野デサ一夜寐タツイ

わかぬ浦よしはとちくれはかたをなとあしづき
さしてたづ鳴わたる

○若ノ浦ヘハホガミチテクレバ。干島ガ無サニ。蘆原ノ方チ指テ鶴ガ鳴
テワタルアレ

いにしへよりよく
める人々世にたはす
となり
このくだりも注なり
是こゝに云べきにあ
らず文のつゝかぬも
て後のしわざなるを
しらす

年八百余歳世八十代
になれるとは平城天
皇より延喜の御時ま
でなかぞふるなり

この人々をおきて。又すぐれたる人もくれ竹のよゝにき
こえかたいとのよりのくゝまたえきてぞありける

○此二人ノ外ニモ又スグレタ人ハ 竹が 御代々 たけが 時々々エズア
ツタツイ

これよりさきの歌をわづめてなん萬葉志うとあづけら
れたりける

○サテ此奈良ノ御時代マデノ哥トモヲ集メテ萬葉集トサ。題號ヲツケラ
レタツイ

こゝよゝいよゝへのとをも歌のこゝろをも忘れる人わづ
かよひとりふたりなりきまかあれどこれかれえたる
ころえぬどころたがひになんある

かの御時よりこのかた年のもゝとせあまり。世へとつぎ
にあむありにける

○其御時代カラコチへ年々百年アマリ。御代八十代ニナルツイ

こゝよゝいよゝへの事をも歌のこゝろをも忘れる人よむ
人おほからずわづかよひとりふたりなりきまかあれ
どこれかれえたるどころえぬどころたがひになんある

○其間ニ昔ノフモ哥ノワケモ。ヨウ知ツタ人ヨシ人ハ。タリサンニハ
ナイ。ワツカ二人カ二人ト云ホドノフデアツタ。チヤガツレモツガヒ
ニ得タトコロト得タトコロガアツテ。カノ人磨ヤ赤人ホド二十分前ノ
ナイ名人トハイハレヌ

今此事をいふよつかさくらる高き人をばたやすきやう
なればいれま

○サテ今其人々ノ事ヲ云ウチヤガ。其内ニ官位ノ高イ人ノ事ハ云ノハ
慮外ナヤウナ物ヂヤニヨツテ。ツレヤノケオイテ

そのほかよちかきよにその名きこえたる人ハ

かれこれ得ぬと得る
とをいはんも官位高
き人々を申し出んこ
とばかりあれバの
ぞきていはぬなり

歌のまきを得たるは
は體のよろしきとい
ふなりまことすくな
しきは此僧正の口が
ろくをかじきさまに
よまれたれは深くし
づまりたる歌なきを
云なり

こゝに注せる歌ども
は下にねらみ出たれ
バその所にいふべし
下みなこれにならふ
ぞ

○ツノ官位ノ高イ衆デハナヤニ。其外ニ近代ニ哥ノ名ノ聞エタ衆ハ
そなりち僧正遍昭の歌のさまのえたれともまどすくな
したとへはるにかけるとうなを見ていたづらよ心をこ
がすむごとし

○マツ僧正遍昭ハ哥ノテイハ。得テアツケレドモ。マユトガスクナイ物
ニマトヘテイハウナラ。繪ニカイテアルオヤマヲ見テ。センノナイ
ニ必ラウゴカスヤウナモノナヤ

浅とどり糸よりかけて白露を玉にもぬけるはる
のやなきか
そちす葉のよごりよまぬ心もて何かの露を玉
とあざむく
嵯峨野よて馬よりおちてよめる
名にめでゝおれるばかりぞ。女郎花われおちにき

いたりて心ふかくよ
まれたれは詞ハかす
かにめぐらせて聞は
させたり詞のたらし
さ云にあらざ且ッし
ほめる花にたさへた
るはいかにぞや業平
の歌は幽にして心に
はなやきたることか
きりなきや

こゝに巧なりといふ
下の歌どもに見え

と人にかたるか

ありはらのなりひらのそのこゝろあまりてことほたら
きまほめる花の色かくてよほひのこれるがごとし

○在原ノ業平ノ哥ハコノロガアツテ。詞タラズテウドシボンメ花ノ色ハ
ナウナツテ。ニホヒノ残ツテアルヤウナ

月やあらぬ春やむかしの春ならぬわがみひとつ
いもとの身にして

大かたの月をもめでしこれぞこのつもれば人の
おいとあるもの

ねぬる夜の夢をいかなとまどろめはいやはかな
にもありまごる哉

清
ふんやのやすひでいとわたくしにてそのさまに
おは
きいはしあき人のよきぬきたらんがごとし

て眞にしかりそのま
ま身におはす音楽の
巧のうるはしきに歌
の風體はいやしとい
へり

詞のかすかなる
とは後、幽玄體にて
はなやかならすきく
らき言なり

始終たしかならずと
ハとのころを始終
たしかに云はてぬ
なりこれも詞曲に
てはほむるなりたし

かならぬは得ぬ所を
云たさへの意あきら
かなり

喜樂の歌多く見えず
よりにかく書るもの
と思へ此六人の詞
ども各對の詞もてか
きたるをこれらのこ
とありては文のつく
きみだれてきこも是
なも注さし除きみれ
ばよくつゞきてめで
たし
あはれなるやうにて
とはほむる詞つよか
らぬはまこし得ぬと
ころを云ふ歌はもと
よりつゞきをよしと
すればか、云あはれ
の詞こ、はうるはし
きに用ひたり

○文室康秀ハ詞ハタクミデ。哥ノ體ガソノ詞ト相應セヌ。イハッアキン
ドノエイキル物ヲ着タヤウナモノデヤ

吹からに野への草木のささるれはうべ山風をあ
らしといふらむ

深草のとかどの御國忌に
草ふかき霞の谷にかけかくして日ひのくれしけ
ふにやのあらぬ

宇治山の僧させんいとほかすかにしてはじめをほりた
しかならずいはゞ秋の月と見るに曉あかつきの雲くもよあへるがで
とこ

○宇治山ノ僧喜撰ハ。詞ガオクフカケテ。ソシテ。始メトハテトノツリア
ヒガシツカリトセヌ。イハッ秋ノ月ヲ見ルノニ曉ノ雲ノデ、キクヤウ
ナモノデヤ

わが庵のまやこのたつとしかぞすむ世をうぢ山
と人のいふなり

よめるうたおほく聞えぬはかれこれをかよひしてよく
しらさ

○此ノ人ハヨシダ哥ガ多ウハ傳ハラヌニヨツテ。アレヤコレヤチ見合ヌコ
トガナラネバ。トクトハシレヌ

をのよこまちないにしへのそとほりひめの流なりあひ
れあるやうにてつよからさいはゞよき女のなやめると
ころあるに似たりつよからぬいおうなの歌なればなる
べし

○小野小町ハ昔ノ衣通姫ノ流ナ哥デヤ。アハレナヤウデ。ツヨウナイ。イ
ハッエイ女ノナヤム所ノアルニ似タ物デヤ。ツヨウナイノハ女ノ哥ユ
エデアラウ

このむのこまちの
手に「いにしへの衣
逆姫の流なりさいへ
るも後のしわざなり

そのさまいやしの上
に何さかほめたる詞
の落たるならんどあ
る人いへりしからざ
ればこの六人おの
く得るど得ぬさを
云にかなはずすべて
交け對にかくさる

思ひつゝぬればや人の見えつらん夢とまりせば
さめざらまを
色見えでうつらふ物よの中の人心の花にぞ
ありける
わびぬれば身をうき草の根と絶てさそふ水あら
ばいなむとぞ思ふ
そとほり姫の歌
わがせこがくべきよひまりさゝがけのくものふ
るまひかねてとるさる

大とものくろぬしコトバろのさまいやしいはぐたき
木おへる山人の花のかげやすめるがごとし

○大友黒主ハオモシロイ所ガアツテ。哥ノ體ガイヤシイ。オハハオチタリ薪チ負テ。
オモシロイトコロカアツテ。さあるは。眞字に類行ニ送與。さあるに。より
て。袖ハれたるなるべし。此序には。これにあたる詞の右しが。落たるなり

は對のかたちなくて
はあらぬものなり

今は歌のよむ人の多
きをはひひろされる
葛としげき木葉にた
まへたりされど歌を
りとは見えてそのよ
しあしを評するまで
の人はずくなしさい
へりすべてのと大か
たにてはよしあしを
きめがたくいたれる
うへにていたれる人
のきはめたる評にあ
るべきものなり

思ひいで、戀しき時のはつかりの鳴てわたると
人のあらきや
鏡山かがみいざ立よりて見てゆかんとしへぬる身にお
いやしぬると

このほかの人々その名きこゆる野へにおふるかづらの
ひひろごりはやしよまはきこの葉のごとくよおほか
れを歌とのとおもひてうのさましらぬなるべし

○此ノ外ニモ名ノアル人々ハ野ニハヒヒロガツテツツ林はやしヲゲウハエテ
アル木ノ葉ヤナドノゴトクニ。タントアルケレドモ。ミナ自分ニ哥ギヤ
ト思ウテ居ルハカリデ。實ニ哥ト云モノ。クハシイヤウスヲバ知ラ
ヌモノヂヤト見エル
かゝるよいますべらきのあめのとたしろとめすとよつ

のときこゝのかへりよなむかりぬる

○サテ右ノ通りデアツタトコロニ御當代上様ノ天下ヲ治メサセラル、ノ
モ。今年デ九年ニナルカ

わまねきおほんうつくとも浪やしまのほかまであが
れひろきおほんめぐものかけつくり山清のふもとよりの
まげくおとしまして

○ドコカラドコマデモモレタ所ノナイ御慈悲ガ。日本ノ外マデイキサマ
ツテ。イツクノウラマデモ。ミナソノ御蔭ヲカウムラヌ者ハナイ。難
有イ時節デ

よろづのまつりごとときこゝめすいとまもろくの事
とすてたまはぬあまのりよ

○イロくノ御政事ヲトリ行ハセラル、御ヒマトニ其外ノ一切ノ事
マデヲ。御ステアソバサレヌマリニ

うつくしみのなみは
やしまさいふによせ
て云御國を大八州と
いふこと神代紀にみ
ゆ

萬機なきこしめすあ
まりにもろくの事
なもすて給はぬより
して歌の古をもわを
れぞおこしいで給ふ
となり萬葉集の撰の
後はさることたえに
しなこの度おぼしお

こして仰せごさあるな
り此おこし給ふの下
にいにしへ今の歌を
あつめてはらばせ給
ふこと云詞本はぶきた
るものぞ

この人々の中に友朋
のみ五位にてその外
ハ賤官なるがおふせ
おうふれるは時にす
ぐれたわびなり

いにしへのとをもわすれじふりにとをもおこし給ふ
とて今も見そかひし後の世にもつたれとて

○古ヘアツタ事ヲモ御忘レアソバサルマイ。年久シウナツタヲモ御取
立アソバサウト云フ思召シデ。今モ御覽アソバサレ。又後々へモ傳ハ
レト思召テ

延喜五年四月十八日に大内記きのとものり御書のとこ
ろのわづかりきものつらゆきときのかひのさうくわんお
ふとかふちのみつね右衛門府生とぶのたぐみねらにお
はせられて

○當年延喜五年四月十八日ニワレテ四人ノ者へ仰付ラレテ
まんえうさうよいらぬふるさうたごづからのをもちたて
まつらごめ給ひてなむ

○萬葉集ニ入ラヌフルイ 哥并ニ自分くノ歌ヲモ集メテ差上マヌルヤ

春夏秋冬の部より鶴
龜の賀、あき萩夏草
のたこへは戀逢坂山
の手向は旅と離別を
かね春秋にも入らぬ
くさんぐのは雜體よ
り大歌所までの歌を
かねたり

ウニト仰せ付ラレテサ

うれがかかよも梅をかざすよりはじめてほととぎすと
きよもとぢをり雪を見るよいたるまで

○ソノ中ニモ春梅ノ花ヲカザス哥カラウツタツテ。郭公ヲキク哥。紅葉

ヲ折ル哥。雪ヲ見ル哥マデ四季ノ部

又つるかめにつけて君をおもひ人ともいはひ

○又鶴龜ニツケテ君ノ御壽命ヲ長カレト思フテ御祝申シタリ。其ノ外ノ
人チモ祝フマ哥

秋萩夏くさを見てつまとこひ逢坂山にいたりて手向を
いのり

○又秋ノ萩ノ花ヤ、夏ノ艸ヲ見テハ妻ヲ戀シウ思フマ戀ノ哥。逢坂山マ

テ旅立テ行テ手向ノ神ヲ祈ル歌ナド

あるの春夏秋冬にもいらぬくさんぐの歌をなむえら

バせ給ひける

○アルヒハ四季戀ナドノ部ニモイラヌイロノ雜ノ歌マデナサ。撰ミ
マセイト仰付ラレテ其通り撰テ集メタ

すべてちうたはたまきなづけて古今和歌集といふ

○其歌數都合千首卷ノ數ハ廿卷。顯號ハ古今和歌集ト名ケタ

かくこのたびあつめえらばれて山下水のたえき瀆のま

さごのかぎつもりぬれバ

○カヤウニ此度此集ガ出来テ 山下水 昔ノ撰集ノ跡モ斷絶セズ たえき瀆

ヨイ歌ガ數多クアツマツタフナレバ

いまわすか川の瀬にたるうらとも聞えきさぐれ石の

いはほとなるよろこびのみぞあるべき

○モウコンカラハ歌ノ風ノワルウ變ルキツカヒモナウテ次第コノ道ノ

末長ウ繁昌スルメデタイフハカリガサアラウ

この集に千二百余の
歌をばらばれしゆミ
文のさまにて千歌ミ
いふなり
此集一度えらば未永
くつたいらんずるい
はひとをいへり山下
水ハ絶ゆ響ハ浪の
眞砂は數多きたこへ
あすか河ハかはらぬ
を云され石ハ萬代
經ておひまさらん
と云なり

にほひすなるはうる
はしき餘情もなく
むなしき名のみなが
きこと云こころな
るを秋の夜春の花は
文のあやなり

それまくら詞の春の花にはほひすくなくしてむなしき名
のみ秋の夜のながきとかこてれば

○サテ我々ドモガ儀ハヨミ歌ハ 秋の上手ナヤウコ云ヒハヤサレルコナレバ
實デモナイ名ハカリ

おのがをしへ子なる。三井、高蔭がいはく。まくらら。われらを寫しあや
まれるなるべし。われとまれと似たり。同じ貫之の大井川、序もわれ
らみじかき心の云々。後拾遺集序にも。仰せをうけ給ひれるわれら云
々。伊勢が長哥にも。涙の色なみだいろのくれなるわれら。が中の時雨よて云
いはく。それまくらら。それがしらの誤あやまちなるべしおのがとを。それが
しといへるとも。中ひかしの文又例ありといへり。今思ふ此ふたつ
のうちなるべしまららの誤とするにわろしまららといふ。無禮さ語よ
用ひたる例なれば此、序などいふべきとあらす

かつの人のみへにおそりかつの歌の心よは思へど

○世間ノ人ノ聞ットコロモナント思ハレ又一ツニハ歌ノ思フ心モ恥カレ
ケレドモ

たあびく雲のたちる鹿のおきふしつらゆきらがこの
世におあじくうまれて此、事の時にあへるをなむよろこ
びぬる

○拙者ドモガ此、世コ同ヤウコ生レアハセテ。カヤウナ仰付ラレノアル
時節ニ逢フタコトヲサ。 たあびくタツテモ居テモ あはれ兼テモサメテモ
悦ビマス

ひとまろなくなりたれと歌の事とゞまれる哉

○カノ人歴ハトウ無クナツテマウタケレドモ。歌ノ道ハノコツテアル
サテ、難有イイカナ

たとひとまろつりつりたのしひかなしひゆきかふとも

人の聞をおそれまた
歌の心にはお思へる
となりかく歌を生あ
るものやうにいへ
るハ色の巧みなり年
のおもはんことぞや
さしきよめるたぐ
ひなりかつハその事
をするうちに又々化
の事をもなすの詞な
りたなびく雲は立
居さいはんため鳴鹿
はおきふしさいはん
體なり

この詞は論語ニ文
王すでに没したれど
文王にあらすやと
云フをうつして書キ
たるならんかれハ孔
子のみづからを云な

りその意にてハこゝに貫之のみづから云フに聞キまがひて上にへりくだりて云ふことすじだがへるやうなり

これよりこの集の末ひさしく傳はらんことをいふさて世のたにすうしなはず傳はりて世にさつまうば末の世に歌の風體意旨をも知たらん人が奈良の京より今の部のはじめて集撰されしころのこゝなるひいたふさびあるひは乞ねがはさるめかもといふなり松の葉あをやぎの糸正木のつらなごは冠辭

○コレカラ後タトヒ時代が段々カハツテ。ドノヤウニナリユクト云テモこのうたのもも若あるさやあをやぎの糸たえず松の葉のちりうせせしてまよふまきのかづら長くつたはり鳥のあと久しくとゞまれば

○此集がモシ世間ニ。青柳のタエウセバニ末と長ウ。久シウ傳ハツテサヘアツタナラバ。あるをやの四字ハ。次のあをやぎよりまざれたる誤なるべし。もしハ。若よて。久しくとゞまらばといふへかゝれる詞なり

歌のさまともちりことこのころをえたらむ人の○末代ニ玉哥ノヤウスヲモヨク知り。物モ心得テアラウハハ大ぞらの月を見るごとくよらいよらへをあふぎて今どこひざらめかも

○此集ヲ。サテく結講十集チヤト云テ。天ノ月ヲ見ルゴトク仰ギ。マツトシテ。今此當代ヲシタハヌト云フハアルマイワサテ千秋云。いにしへふ古にてすなはち此延喜の御代をさせり

のやうにいへり鳥のあさハから國のいにしへに鳥の足あをを見て字をつくりたるをいふことより文字をしいへりかもものは助を語にてもこハツの一言のみなり別にふかきことわりあるにあらず

春歌の上

ふるとしに春たける日よめる 在原元方

年の内は春の来はけり一とせをこぞとやいはんとこと
やいのむ

○年内ニ春ガキタソイ。コレデハ。同ク一年ノ内ヲ。去年ト云タモノデ
アラウカ。ヤツハリ。コトシト云タモノデアラウカ

春たちける日よめる 紀貫之

袖ひちてむすびと水の氷るを春立けふの風やとくらむ

○袖チヌラシテスシウタ水ノコホツテアルノヲ。春ノキタ今日ノ風ガ。
フイテトカステアラウカ

題しらき よと人しらき

春霞立るやいづこみよと野のよとの山に雪はふりつ

ことしの春の歌なれ
バ假りに去年ぶると
しさいへるなり
此ノ歌はらびとりて
は置くべきところな
くまづ天の春にした
がひてこゝにのせ
なり
或人此歌は巻頭のめ
いづく比類なきよし
に云ハ心を得ぬひが
ことなり
この歌は時々のうつ
り行こまをいへり二
句は夏あるハ冬その
間に秋を省けりさて
その氷をははる立け
ふの風はとくらんご
よめり「奈良の都の
ころの人のよめるな

るべし此歌のすなほ
にたけ湯きを見て上
の袖びちてのこまか
なるを思ひくらべよ

春かけては冬より春
懸ていまだ雪のふり
つぐと云ことさり此
詞前へより後へかけ
ることに又後より
前へかくるにもいへ
り是をばやくより思
ひあやまれる歌多し

○君ガキテ。霞ノ立タハドレトコキヤツ。見レバ吉野山ニハマダ雪ガフ
ツテ。ナカク春ノケキハミエヌガ

二條後の春のはじめの御歌

雪の内に春の来にけり鶯の氷る涙いまやとくらむ

○マダ雪ノツモツテアル處へ春ガキタソイ。コレデハ鶯ノ氷ツタ涙モモ
ウトケルデアラウカ

題しらき よと人しらき

梅がえにきさるる鶯春かけて鳴ともいまだ雪のふりつ

○梅ノ枝ヘキテ居ル鶯ハハヤ鳴ケレドモ。マダ此ヤウニ春マデカケテ雪
ガフツテ。春ノヤウニモナイ

鶯なけども。春かけて。いまだ雪のとつとく意なり。

雪の木よふりかゝれるとよめる 素性法師

春立ば花とや見らむ白雪のかゝれる枝に鶯のなく

○春ニナツタレバ。花ヂヤト思フテヤラ。雪ノフリカ、ツテアル木ノ枝
ヲ驚ガナク

題とらぎ

よみ人たらぎ

心ざし深くそめてしとりければ消あへぬ雪の花ととゆ
らん

○トウカラ花ノ事ヲ深ク思ヒコンデ。居ルガソノユエデヤヤラシテ。春ニ
ナツタレバ。ソノマ。雪サヘマダロクニ消ヌノニ。ソノ残ツテアル。
木ノ枝ノ雪ガ。ハヤ花コミエル

此歌古く聞ゆれば。三の句。をりけれかなるべし。をりければよの
意なり。この格萬葉多し。然るを此集のころよいたりて。けれか
といふ詞。耳なれぬ故。ければととなへ來つるか。はた後の人の。か
のはの誤と心得て。さかしら改めたるよもあるべし。然れども。け
ればよての結。のらひとかけあひわろし。されば結を一本よ。見ゆる

ある人のいはくさき
のおほきおほいまう
ちぎみの歌を注しあ
れど後人のかけるも
のなればさるにたら
すこの君のよみ給へ
るならば此集になど
かおもてにかいざら
ん是れは忠仁公の御
事あり後に昭宣公を
も大政大臣になし給
へは前のさはいへり
下に年ふればよはひ
は老ぬの歌に前のお
ほきおほいまうち君
と云ども見えたれば

こにのみよみ人しら
すさあるべきいはれ
なし

はる
春のひかりさひ即ち
東宮の御事にてその
御恵みなかうふる我
なれど年の老ゆくを
わびしく思ふとなり

木のめの萌るをはる
と云ゆまにはるにい

かどあるも。後よかけあひを思ひて。改めたるよやあらん。

ある人のいはくさきのおほきおほいまうちぎみの歌なり
御母御様申した

二條后のとう宮のまやをむ所とさここえける時正月

三日おまへよめしておほせごとあるあひだよ日の
康秀を

てりなぶら雪のかしらにふりかへりけるをよませ
康秀が およませあそび

給ひける ぶんやのやまひで

春の日の光りよあたる我なれど頭の雪となるぞわびし
き

○此節ノ春ノ日ノ光ノヤウナ難有イ御恵ミヲ装リマヌル私デゴザリマス
レドモ。年ヨリマシテカヤウニ頭ガ雪ニナリマヌルハ難儀ニ存マ
スル。コマリマシタ物デゴザリマス

雪のふりけるを

きのつらゆき

霞たちこのめもはるの雪ふれば花なき里に花ぞ散ける

ひかけたる香りさて
雪のいづこにもふる
ゆゑに花かき里も花
ぞあるこよめり
はるの初めのさまを
はかなくいひしうた
歌なり

この歌ひひたすらに
鶯を思ひ入てよめり
かうやうにひたすら
によむが歌のめでた
き香り

○霞ガタツテ。木ドモノコノメモ張ッ出ル春ノコロ此ヤウニ雪ガフレハ花
ノナイ里ニモッ。花ガナルワイ。トント花トミエル

春のはじめによめる ふぢのらのよきは
春やとき花や遅きと聞わかん鶯だにも鳴きも有かな

○ハヤ春ニナツタフナレバ。モウ花ガ咲サウナ物チヤニ。マダサカヌハ春
ノ來タガホドヨリ早イノカ。花ノサクノガホドヨリオソイカ鶯ナリ
トモ鳴イタフ。ソレデドチラヂヤト云フコトガシレウニ。サテモマア
鶯サヘナカズフカナ

春のはじめのうた

春きぬと人のいへども鶯のなかぬかぎりいあらじとぞ
思ふ

○春ガキタト人ハ云ケレドモ。マダ鶯ガナカヌ。ナンデモ鶯ノナカヌウ
チハ。イツマデモ。オレ。春デハアルマイト思フ

寛平御時きさの宮の歌合のうた

源、よききみ

谷風は解る水のひまどとさうちいづる波や春のはつ花

○春ノ初メニ。谷ノ風ニ。アソココトケル氷ノヒマト。カラウチダス浪
ハ。テウド花ノヤウニ見エルガ。コレガ春ノハツ花ト云モノデアラウカ

花の香を風のたよりまたへてぞ鶯さそふふるべいの
やる

○風ノ吹テイク幸便ニ花ノ香チコトツケテ。ヤツテ。ソレヲ鶯チサソヒ
ダシテクル案内者ニハスルヤ

大江千里

鶯の谷より出る聲あくの春くるとを誰かあらまし

○谷カラ鳴テ出テクル鶯ノ聲ガナクバ。春ノキタト云フヲメレガシラウ

あら下は春といへど
しかにはあらどとい
ふなほぶきてきかせ
たり

さて上にはまたうぐ
ひすの鳴めほどの歌
をあけて其間に谷風
の歌をへたて、又鶯
をあげたるはこの歌
は專々鳴ころをよめ
るとすべし

新撰萬葉にハ春はく
るともたれかしらま
しきありこいにな
ほして入られしにや
意あきらかにてめで
たき歌なり

聞く人の心にうきこ
ぎなきありける時う
ぐひすの聲もそのと
こくきいなるるいな
るべし

この歌は古體なり朝
なく聞よるこへる
そのよろこぶを詞に
云に云盡さよむむが
古歌なり上のみそも
かざりなくおもしろ
けれこの歌のこま
ひろきには及ばぬな
るべし

若草はつまといは
ん冠鮮なり春のわか

在原棟梁

春立と花もよほぬ山里のものうかる音に鶯ぞなく

○春ニナツテモ。花モナイ。山中ノ里デハ。ナニモハリアヒガナサニ。鳴キ
トモナサウナ聲ヲシテサ。鶯ガナク。千秋云。下句。ものうかる音にて、鶯のなく
れるてにをはな
りこの類おほし。

題くらき

野へ近く家あるとせれば鶯の鳴るこゑの朝なく聞。

○ワシハ野邊ノ近イ所ニスマヒテサレハ。鶯ガヨウ鳴チ毎日アサカ
ラ聞マス

春日野のけふのを焼く若草のつももともれり
れり

○此ノ春日野ヲバ今日ハ焼テクレルナヨ。妻モ來テアツンデ居ル。我モキ

ヲ遊デ居ルホドニ

かすが野のとぶ火の野守出て見よ今いくかありて若菜
摘てん

○此ノカスガ野ノ飛火野ノ番人ヨ。出テヤウスヲ見テクレインチハコノ野
ニ付テ居レバ。タイガイ知レルデアラウガ。マウイクカバカリアツテカ
ラ。若菜チツミヨハ來ウツ

と山にの松の雪たよ消なくに都の野への若菜つとけり

○山ニハアレ雪サハマダキエズニアツテ。松ナドモ白ウミエルニ京ハ。ハ
ヤメツキリト春メイテ。野ヘンヘ人ガデ。若菜チツムワイ

梓弓おして春雨けふふりぬ明日さへふらはわかあつみ
てん

○オシナメテドコモガモ春雨ガマツ今日フツタガ。アス。一日フツタ
ナラバ。オホカタ若菜ガツマル。クラ井ニナルデアラウホドニ。野へ出

仲のめづらしうつ
くしまるものなれ
バ夫婦にたさへたり
いせ物がたりにむさ
しのはけふはなやき
そさあるはこの歌を
作りかへて物語にし
たるまでなり

さぶ火野は春日野の
内にあり烽のこま軍
防令にくはし
あつち母ははるさつ
いく冠鮮なりこは語
をへたてはるさつ
いきたらん又弓のお
して張ものなればさ
しいひ下しつさいふ
もあしからずされを
已におすてふこまに
むかしのおみにみ

えねばしはらく隔句
ならんさいふなり
君さよむこさいにし
へハ友ごちほもさよ
りにて天皇、后の臣
下をさしてものため
へる例ありまた親王
の時にてましませバ
誰人をも指給ふべし

春日野ハ奈其のみや
この時宮人たちいで
遊ぶと石高きによ
りてこの人土佐日記
にもけふなれどわか
なもつます春日野の
とはるこいひてさへ
よめり

テ。若菜ヲツマウツ

仁和のミかどみこにたましくける時に人よわ
かな給ひける御歌

君がため春の野よ出てわかたつむ我ころもでよ雪のふ
りつゝ

○ソコモトへ。進しんセウト存ゾテ。野へ出テ此若菜ヲツンダガ殊ノ外寒コ

トデ。袖へ雪ガフリカ、ツテ。サテくナンギヲ致シテ。ツンダ若菜

デゴザル

歌奉れとおほせられし時よみてたてまつれる

つらゆき

春日野の若なつみにや白妙しらたへの袖ふりはへて人の行らむ

○ツザく春日野ノ若菜ヲツミニヤラ。アレ白妙ノ袖ヲツテ。ツレダ

ツテ人ガイクワ

打開ふりはへの説いか延ひとはねあふのはねどり。假字さへ異なるも
のをや

題くらぎ

在原行平朝臣

春のきる霞の衣ぬきどうをみ山風にくそ亂みだるべうなれ

○春ノ若ル霞ノ衣ハ横ノ糸ガウスサニ。山風ニマミダレルデアアラウサウ

見エル

寛平御時きさいの宮の歌合よよめる

源むねゆきの朝臣

ときひなる松の緑も春くれは今一しほのいろまさりけ
り

○イツモカハラヌ松ノ青イ色モ、春ガキメレヤ。マ一入染ハシヌヤウ一色ガマ
シタウイ

歌奉れとおほせられし時よみて奉れる

衣をはるといひかけ
しより緑のころもて
ふ色によせてよめる
なり

新撰和歌集に糸より
かくる時しもぞ見え
むたり

わがせこが衣はる雨ふるごとし野へのとどりぞ色をよ
りける つらゆき

○二ハル雨ノフルタビニ。野ヘンノ草ノ青イ色ガマシク増ワイ
わがせこが説。打聞よろし。妻が柳の衣をはるといふ詞なり。餘材あ
やまれり。

青柳のいとよりかくる春しもぞとだれて花の綻にける

○糸ヲコツテハホコロビモヌフコギヤニ。青イ夫ノ糸ヲヨリカケル春ノ
コロハケツクサ。花ガ咲ミダレテ。ホコロビルワイ
はころふる。花のひらくをいふ

西大寺のほとりの柳をよめる 僧正遍昭

淺とどり糸よりかけて白露と玉にもぬける春の柳か

○アレアノ柳ヲ見レバ。ウスマモエギ色ノ糸ヲヨツテカケテ。キレイナ白

玉にもといふにてさ
てもかく玉になして
つらぬけるもの哉と
めで入たるをいへり
この詞づかひをよく
心に入てみぬ人の常
あることのみ思ふ
なり

百千鳥にさまぐの
説あれどみないにし
へにあきなきつくり
ことなりゆめく信
すべからず
よぶこ鳥の春の暮よ
り夏かけてなく鳥な
り此聲の人をよぶが
ごとく聞ゆるにより
て呼子鳥と云是をも
秘め事のやうにいへ
り

イ露ヲマア玉ニシテツナイデ。サテモト見事ナ春ノ柳カナ。餘材
わろし

題しらぎ よみ人しらぎ

も千鳥さへづる春の物ごとにあらたまれども我ぞふ
りゆく

○鶯ヤナニカヤ。鳥ノオモシロウサヘツル春ハ物ゴトコナニモカモ改マ
ツテアタラシウナルケレドモ。オレガ此身バカリハサ春ノクルタビニマ
ンクトフルウナツテイシ

をちこちのたづまもあらぬ山中よおほつかなくも呼子
鳥かな よぶこ

○アチモコナモ。案内モシラヌ此山中ニナンギヤカ呼子鳥ガナイテ人
ヲヨブガ。ドコチヤヤラサチノマアシツカリトシヌマカナ

雁の聲とさしてこしへまかりける人を思ひてよめる 北國

凡河内躬恒

道行ふりと道行ふるなり物に觸るるとなるをもて道行ついでのとにされり

春くれバ雁かへるなり白雲の道行ふりにとやつてまし

○春ニナツタレバ。アレ雁ガカヘルヲ。雁ハアノヤウニソラチトシテ。北

國ヘ方ヘユクギヤガコレハヨイトコロデ。ユキアフタ。コトツケチシ

テヤラウカヨ

かへる雁をよめる

伊勢

春霞立を見すて、行雁ハ花なき里に住やあらへる

○オツ、ケ花ガ咲ギヤニマア。此ヤウニ春ノ霞ノタツタノヲ。ミスチ、イ

スルアノ雁ハ。花ト云モノ。昔カラ。ナイ里コスミナレタカイツレ

デ花ノ面白イコラ。ラヌデガナアラウ

餘材花なき里の説わろし

題とらず

よみ人しらす

折つれバ袖こそにはへ梅の花わりやとこゝに鶯のなく

こゝにそのあたりに來啼かといへど

さまざまのこぼりに過たり野山にすむ鳥のちかくの軒ばなごにや來なきけんをこゝといふなるべし意あきらかにてめでたき歌なり

○梅ノ枝ヲ折タニヨツテ。ソレデ袖ガニホフノデコソアレコ、ニ梅ノ花ハアリモセヌノニ。此袖ノニホフノヲ。梅ノ花ガコ、コアルト思フカシテ鶯ガ來テ鳴ク。打聞わろし色よりも香ころわのれとおもほゆれ誰袖ふれと宿の梅ぞも

○梅ノ花ハ色モヨイガ。色ヨリ香ガナホヨイワイ。ア、ハレヨイニホヒヤヤ。此ヤウニヨイニホヒノスルハ。タレガ袖チフレタ此庭ノ梅ノ花ツイマア

宿近く梅の花うゑじあちきかく待人の香よあやまたれぬる

○ムヤクナフギヤニ。庭ノ近イ所ニ梅ハウニマイツ。花ガサケバアマリヨウウウデ。待人ハ來モセヌニ。ソノ人ノ袖ノニホヒニトリチガヘラレルワイ。千秋云。梅うゑじ佐のあちきなくと心得へし

かく物ごとにかへ立入て云事はいにしへの風流なり

梅の花立よるばかり有とより人のとがむる香よぞしみる

○梅ノ花ノ下ヘチヨット立ヨツタト云ホドノコガアツタガ。ツレカラ。人

ノフシンチウツヤウニ。衣モノガ香ニツマツタワイ。キツイ匂ヒナモノギヤ

梅の花をとりてよめる

東三條左のおほいもうちぎみ

鶯の笠に縫てふ梅の花折てかざらん老かくるやと

○ソウタイ笠ハツムリヤカホヲカクエ物ナレバ。鶯ガ笠ニヌウト云梅ノ

花ヲヲツテ。吾ガ年ヨツタ形ガカクレルカドウキヤトツムリヘサシテ

見ヤウ

題くらす

素性法師

よそよのみあわれとぞ見し梅の花あかぬ色香のをりて
なりけり

籠馬樂に青柳を片糸
によりてうぐひすの
ぬふてふ笠はうめ
花笠これによりてよ
まれしなるべしさて
梅化を折てかざしに
せん老たる頭髮もか
くるにやとふなり

○オレハアハウナ今マデハ。梅ノ花ヲタビヨソニバツカリ。サアハレ見
ナカト思フテ見テ居タガ。梅ノ花ノドウモイヘヌ色ヤ香ハ折テカ
ウ近ウミテノコギヤワイノ。又々ヨソニ見タヤウナコデハナイ。餘材
わろし

梅の花をりて人におくりける とものり

君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をもある人ぞし

る

○此ノ梅ノ花ヲ貴様デナウテハ誰ニ見セウツイ。色デモ香デモ。ヨウ知テ
居ル人ガサ。ヨウアサハ。ヨウシリマス。ツレテ知ラヌ人ニ見セテハ。

ナンノセンモナイコサ

くらぶ山よてよめる つらゆき

梅の花匂ふ春べのくらぶ山やとよこゆれとあるくぞ有
ける

激あきらかなりそれ
が中によるづのもの
を大かたの人のえれ
りと云はまたじきな
り萬葉によき人のよ
しとよくみてよしと
いひしとよみませし
はよく長たる人のよ
しといはぬはまこと
はよきにあらざ此
歌も同意ニてそのほ
とくにて物のかぎ
りたるぞかたし
くらぶ山といへざら
づらくらぶとていふ

らぬと云詞によりて
をさなくくらきかな
にいふの歌のあやな
り

あやと本の細の文
のわりれてみゆるを
いひわかちなきを文
なすと云よりして何
にても分ちなきこと
をいふこと一なれり

○梅ノ花ノニホウ。春サキノコロハ暗部山ヲクライ闇ノ夜ニユル時デ
モ梅ガサイテアルト云フ。見エイデモ。ソノ句ヒデ。ヨウシレルワイ

月夜一梅の花をよりてと人のいひければさると
てよめる

月夜よいそれとも見へき梅の花香を尋てぞさるべかり
ける

○ハテヨイトコロラ一枝折テヤラウト思フガ此ヤウナ月夜ニハ月影ノサ
ス所ガミナオンナシヤウニ白ウ。見エルニヨツテ。梅ノ花ガソレチヤト
ドウモ見分ラレヌコレデハ句ヒヲツツテ行テ。知ラウヨリホカハ
ナイ

春の上梅の花をよめる

はるの夜の闇のあやなと梅の花色こそ見へね香やんか
くるゝ

あるじの詞はよく門
なもたがへ給はでや
ざらんさは云へ入給
ふよとあまりにう
さくしきをかすり
て聞えしなり
花こそむかしの如く
うるはしくかほれる
はとあるじが詞のく
ねくしきにこたへ
たるなりかたみにな
かしき風流なりける

○春ノ夜ノ闇ト云モノハ。ワケノタ、ヌ物チヤ。ナゼト云ニ梅ノ花ガ。
暗ウチ。色コソ見エチ。香ガカクレルカ。香ハナンボ。クラウテモ隠レ
ハセヌ。色ハカクレテ香カカクレチハ隠レカ。テモナシ隠レヌデモナシ
イナラヒワケノタ、ヌ闇チヤハサテ
まへかた長谷へまゐる たびに
はつせよまうづるごととにやどりける人の家ま久
申絶してトマらずめて そののち 久しぶりでそのいへいたわいたわいたわ
しくやとらで ほこへて 後よいたれりければか
いへのていしゆが このやまはこれの ときほりにまへかたのまてあひかはら
の家のあるじかくさだか にあむやどりさあると
すしつかりとあるぞや口上で申してたしませてとされば、そこにさいて あり
いひ出して侍りければそなたてりける梅の花
とりのよめる づらゆき
人のいざ心もとらずふるさとの花ぞむかしの香よ句ひ
ける
○人ハドウチヤヤラ。心モカハラヌガ。カハッタカシラヌガ。ナシミノ所
ハ梅ノ花ガワシガ来タレバコレ此ヤウニマヘカタノトホリノ句ヒニ

いせが集にこの歌の
端書に京極の院に亭
子のみかきねばしま
して花の宴せさせ給
ひまぬれとおほせら
れしにまゐりて池に
花などちりたるを見
てさあれバ川には
あらぬことしらるさ
れど歌には川さよめ
るを合せ見れば此池
どかけるもいぶかし
むべし

カハラズ。ニホウワイノ

水のほとり梅の花のさかりけるをよめる

伊勢

春ごとよ流る、川と花と見てをられぬ水は袖やぬれな
む

○流^ニレタイク川へ花ノ影ノウツ、タノヲ。アノ水ノ中ニモ花ガアルトミ
テハ。イツノ春デモダマサレテ。折ラレモセヌニ。ヲラウトシテハ
ソノ水デ袖ガヌレリガ。今年モ又ヌレルデカナアラウ

詞書は水とある、京極院の庭の池あれば、哥よながる、川とよめる、
その池又つゞきたるやり水をいふなるべし。上句二三と句を次第し
て心得べし、
年をへて花の鏡となる水のちりかゝるをやくもるとい
ふらん

この二首かしこく巧
みてもしるけれど
小町のほかなくなた
らかなるにはおどれ
り歌はおろかげによ
むこそよけれ女はま
して香り

めがれぬは目をはな
たすと云事にて萬葉
に離の字をかるゝ
さよめる意なり

○年チ重子テ。毎年春、花ノ影ガウツ、テ。其ノ花ノ鏡ニナル水ハ花ノ

チリカ、ルト鏡ノクモルト云ノデアラウカ。花ノチリカ、ルト云ト、年

ヘテ鏡へ塵ガカ、ルト云ト詞ガ同シコトデヤニヨツテ。カウヨシダノ

デヤツエ千秋云。としをへてといふ詞は上の句にへさして用なきを。たゞ鏡の年をへてく
もることないはんためにおけるなり。さてこの歌など俳諧、無に在るべきさまに
せや

あら

家よりのける梅の花のちりけるをよめる

貫之

くるとあくとめかれぬものと梅花いつのひまよかうつ
ろひぬらん

○日ガクレルト云テハ見。夜ガアケルト云テハ見イシテ。シハツモ目モ
ハナサズ見テ居ルノニ。此ノ梅ノ花ハイツノヒマニ。此ノヤウニナツテ
シマウタイヤラ

打聞。うつろふの説、なか／＼よわろし。千秋云。此初句の二つのど、
どての意なり與にはあらす

香をりをわが袖にうつしてさめたらばと云をつめてさめてははいへりてのはは濁るべし

うたては古事記に須佐之男命のさてもかくておかしきわざし給ふことを轉有と書めまりしきことに云なり
だにはたにの略なり

寛平の御時ささの宮の歌合のうた

よと人しらす

梅の香を袖よりうつしてとめて^濁春の過^{すた}ともかたをか
らまし

梅ノニホヒヲ。袖ハウツシテ。トメテオイタラバ。春ハ過テシマウタ
ト云テモ。ソレガ春ノ形見デアラウニ

素性法師

散と見てあるべきものと梅花うたて句^はひの袖にのこれ
る

○ハアチツタワトバカリ。見テソノブンデアラフイギヤニ。ヒヨ^{ちて}ンナ
ヤ。句ガ袖ヘノコツタ。コレドドウモチツタ梅ノ花ノ^わガ忘^わレラレヌ

題しらす
よみびと志らす

ちりぬとも香をだにのこせ梅花戀^こきま時の思ひ出^でせ

む

○梅ノ花ヨ。チツタリ^レセメテハ香ヲナリ^レノコシテオケ。ソレチ後ニ
戀^こシトキノ思ヒダシグサニセツ

人の家ようゑたりける櫻の花さきはじめたりけ
るぞ見てよめる
つらゆき

ことしより春しりうむる櫻花ちるといふと^のならんぞ
らなん

○春ハサク物ヂヤト云フチ外ノ櫻ニナラウテ。今年カラ始メテ知テ。咲
イタ此ノサクラ花ヨ。ドウツナルト云フバ。外ノ櫻ニナラハヌガヨイ
ツヨ

題しらす
よと人志らす

山高と人もすさめぬ櫻花いたくなわびそ我見はやさむ
○山ガ高サニコ、ハ誰モ來テ見テ。賞齋スル人モナイ此ノ櫻花ヨ。人ガ

是より下の巻に水なきそらに波で立けると云歌まては櫻の歌なりよりてさくらとよみ且つ花とのみよめるは端書に櫻とことわれりそれより次にふるさとになりにし奈良のみやこにいと云よりひろく百花なふりよりて歌にも詞にも櫻といはず

すさめぬはすいまぬ
なり心ずさみ手ずさ
みなどひさつ心なり
すべてさつこほらす
心にまかすここにい
へり

峯ハ高きところをば
山の末をいふをとい
ひぞかさいふ同意な
り

染殿后は文徳天皇の
后清和天皇の御母忠
仁婦の御女香り殿
ハ忠仁婦のおほせし
家なりていに住せ給
ひしより染殿の申
奉りしなり

御むすめの后を花に
たとへてこのほなを

きへ見れば身の老て
ものうきともわする
いよとなり

業平歌は大かたある
べきことはいはでそ
れが上をのみ詠る故
に心あまりて詞はた
らぬと云さだも序に
いへり

今の本に石ハしるを
よめど石はいはさよ
むべし高業ニ別あり
瀧は岩の上を走おつ
ればしか云なり

シヤウクワンセヌトラ。アマリツラウ思フナイ。オノレ見ハヤシテヤラ
ウホドニ

又は里どほみ人もすさめぬ山ざくら
山櫻わが見にくれば春がすと峯よも尾よも立かくしつ

○山ノ櫻ヲオレガカウ見ニクレバ。霞ガ一+メンニドコモカモ立テカク
シテ。花ヲミセヌワイ。サテモイデノワルイカスミカナ

染殿后のおまへは花がめよさくらの花とさへせ給
へるを見てよめる 前のおほきおほいさうちぎさ

年ふればよひひの老ぬさかひわれと花をこゝれば物思
ひもなく

○年数ヲ経マシタレバ。ワタクシモイカウ。年ハヨリマシタガサリナガラ
。アナタノ御繁昌ナサル。此御慮テ。カヤウニ花ヲ見マスレバ。ナン

ニモ物思モコザリマセヌ

なぎさの院にてさくらを見てよめる

在原業平朝臣

世の中にたえて櫻のなかりせば春の心の中のどけからま
し

○イツ世ノ中ニトント櫻ト云モノガナイナラハ。ケツク春ノヨランノ
心ハ。ノドカニアラウニ。櫻ト云モノガアルデ。此ヤウニイロくト心

ガサツツイテ。春モノドカニオモハヌ
題くらす
よと人くらさ

石はしるたきなくもがな櫻花手折てもこむ見ぬ人のた
め

○岩ノウヘヲハヤル此早川ガ。ナケレバヨイニ。ツシタラ内ニ居テ。ニ
見ヌ人ノタメニ。アノ川ノアチテナ櫻ノ枝ヲ折テキタマア。ミヤゲニ持

つと今も菟直など
を字をわらづとよ
むとく野山などに
出てそこなるめづら
しきものを何にても
つゝみもて持かへる
なり

こきまぜはかきまぜ
に同じ伊せものがた
りにこけるからども
いひ今も稲のほきこ
きたるといふとこし

テイノウモノヲ。川ガアルドウモチリニイカレヌ

山のさくらを見てよめる そせい法師

見てのみや人にかたらん櫻花手をとに折て家づとにせ
ん

○カウシテアノ見事ナ櫻花ヲ見テ。人ニハタゞ咄スバカリテ。オカウイカ
イ。ソレデハ見タカヒガナイホドニ。手ンデニ折テ來テ。持テイニ
内ヘミヤゲニセウ

花さかりに京を見やりてよめる

見渡せば柳さくらとこきませて都ぞ春の錦かりける

○此山ノ上カラカウ見渡セバ。柳ノ青イ色ト。櫻ノ花ノ白イ色トラユキ
マセテ。トント錦ト見エル。此ノ見ワタシタトコロノ。京ノケキガ春
ノ錦ト云モノヤワイ

さくらの花のもとよて年の老ぬることをかげきて

よめる

きのこのものり

色もかも同じむかしに咲らめと年ふる人ぞあらたまり
ける

○櫻ハアノヤウニ色モ香モ。イツノ年モ同シデフ昔ノトホリニサクケレ

ドモ。年ニ經テ人ハサ。コレ此ノトホリニ。若イキトハ大キユカハツタワイ

此歌三ノ句さくらめとよひて。うさノかかなひがたきやうなるを櫻

をたちいれむとて。さひたりとまてゆ千秋云。さくらめとよひにさけれどもとよひ

をれるさくらとよめる つらゆき

誰とかもとめて折つる春がすと立かくすらん山のさく
らを

○此櫻ノアツタ山ハ。サダメテ霞ガ立テカクシテ。知レニクカラウニ。タ
レガマア。タンダヘテイテ折テキタコトツ

歌奉れとおほせられし時よよとてたてまつれる

今の本におなじ昔に
さくらめとよあれと
六帖に昔ながらにと
あるをさるおなじ昔
のかたはいひたらぬ
なり

常にかすみかくれな
る物にてなきなくよ
めるハおもしるし折
たる花もかくひろく
おもひやりてよめる
こそめでたけれ
あし引は山さいはん

爲の冠辭なりあしび
木のしび木は繁シ
木の謂なりさて山の
さまんあれど木の
繁きをめづればすべ
て山の冠辭とほせし
ならん
打きいたるまゝなり
されどいにしへの一
すぢによむをまねび
たる歌なりよしの
山の花ざかりを見て
雪かどのみぞといひ
たるいきほひありて
めでたきなりかやう
によみたらんこそ
事ッねがふべきこと
なれ

櫻花さきよけらしなむと引の山のかひより見ゆるあら
雲

○櫻ノ花モサイタサウナツイマア。アノ山ノアヒダカラ白イ雲ノ見ユル
ノハ

寛平の御時きさの宮の歌合の歌友のり

とよしの山べに咲る櫻花雪かどのとぞわやまたれけ
る

○吉野山ノアマリニ咲テアル櫻花ヲ見レバ。トント雲チヤナイカト。ト
リナガヘラレルツイ

やよひにうるふ月のありけるとしよとける

しせ

さくら花春くひれる年だよる人の心あかれやいせ
ぬ

○櫻花ヨイツモノ年ハ早ウチルモノ。セメテ春ノ一月加ハツテ長イ。今年
ハカリナリ也。人ノ心ニタンノウスルホド。ユルリト咲テアツタガヨ
イニ。ナゼニイツモト同シヤウニ。今年モ早ウチルツイ。此結句のて
にぞの一格なり。例多き。詞の玉の緒は出せるがごとく。打聞ひひさま
あしくて。いかなる意ともまゝとりがたし

さくらのさかりに久しくとひざりける人のまた
りける時よよみける

よみ人しらせ

あだなりと名にこそたてれ梅花年にまれなる人も待け
り

○櫻花ハアマナ物ヂヤト名ニコソタツテアレ。ナカクアマナモノデハコ
ザラヌ。一年ノ内ニモタマノナラデハ。尋子テクダサレヌ人ヲサヘ
キドクニ今日マデチラズニ。待テ居タツイノ。スレヤ久シウ尋子テモ
下サレヌ貴様ノアマナ御心ヨリハ櫻ガハルカマシヂヤ

あださひいにしへ他
國をあだし國といひ
他人をあだし人と云
たよそほかのとな
りあだし心をわがも
たばさいふもほかの
心のことなり
この二首いせ物が
たりに戀の歌として

交なせりすべてかの
物がたりハ萬葉又ハ
此集の四季の歌をも
戀にとりなしてあや
なせり此歌はただ相
おもふ人のうへにて
はおぼつかなく返し
も戀ならでも人わろ
く閉めるなり

しるしは垂仁記に何
益の二字をばなにの
しるしかあるとよめ
るこゝにあたり何
のかひかあると云に
同じ

せしげハ惜きやうに
もあるかなと云なり
すべてかやうなる氣
と云はしがこそれと
ハなくあらんと云
ほどのことなり

後世の注にさくらか
さねの事にて表白裏
赤花といへるはたが
へり

かへし

なりひらの朝臣

けふこぞの明日の雪とぞふりなまじ消すのありとも花
と見ましや

○貴様ハ。櫻ハアダニハナイ。業平ヲアダナト云ハシヤルガ。ソレヤ大
キナチガイジヤ。ワシガ今日泰ツタレハコソアノ櫻ヲ花ヂヤトハ見レ
モシ今日泰ラズハ。明日ハモウ雪ニナツテ降テシマウデアラウ。タトヒ
ソノ雪ニナツタノガ。消ズニアツタトモ。雪ヂヤトコソ見ヤウケレ
ドモ。モトノ花トハ見ヤウカヤ

題くらき

よみ人くらき

ちりぬれハこふれとあるとなき物とけふこそ櫻ぞらば
をりてめ

○櫻花ハナツテシマウテカラハ。ナンボ見タウ思フテモ。ソノセンハナイ
モノヲ。折ルナラ早ウ今日ノ内ニコソ折ウナレ。明日ハモウチリデ

アラウ

折とらばをこけよもあるか櫻花いざやどかりて散まぞ
の見む

○コノ櫻ガアマリ見事サニ。一枝ヲリテミヤウカト思ヘド。折テ取ルハ。
イカニシテモマア惜イヤウナ物カナ。サイノナントセウツイヤノ
折ルノハ惜イコヂヤニ。ドレヤ。此木ノ下デ宿ヲカツテ居テ。チルマ
デハ。ソノマ、テ見ヤウ

きのありとも

櫻色ハ衣ハふかくそめてきむ花のちりなん後のかたみ

○花ハオツ、ケ散テシマウテ。アラウツノ後ノ形見ニ。キル物ヲ櫻イロニ
コウ染テ若ヤウツ。千秋云。此さくら色といへるはたさくら花のいろにといハ
るなるべし。さくら色とて定れるそめ色をいへるにはあらし
櫻の花のさかりけるを見にまふそまたりける人

がてらは兼ながらな
つめたる詞なりこ
れき過りて行がてお
とくひとつに心得る
はわろしそれは過か
たく行がたきなり

さかましいたく咲ん
さいふ詞ながらかや
うに云すて、はさく
べき事はさ聞なまる
なり

よよみておくりける

みつね

我宿の花見がてらに來る人の散なん後ぞ戀しかるべき

○コナノ花ヲ見カテラニ尋ネテクル人ハ。花見ガテラノコナレバ花カチツ
ダラモウ來ハスマイヂヤニヨツテ散テシマウタ後ニ其人ガ戀シカラ
ウ

亭子院の歌合のときよめる

伊勢

見る人もなき山里のさくら花外の散なん後ぞさかまじ

○來テ見ル人モナイ山里ノ櫻花ハ。ヨソホカノ花ガミンナ散ラシマウテ
後ニ咲ウコトヂヤニ。今ハドコニデモ澤山ニ花ハアルヂヤニヨツテ
ソレデ遠イ山里ナドハハ。誰モ見ニクル人モナイヂヤガ。ホカノ所ノ
花ガモウ無イソブンニナツテカラ。咲クゾイヤトモ遠イ所デモ見ニク
ルデアラウワサ

古今和歌集遠鏡卷之一終

古今和歌集遠鏡卷第二

春歌下

題しらす

よみ人しらす

春霞たな引山の櫻はさうつろんとや色かひりゆく

遠山櫻を見さけよめ
るなるべしこのう
つろふはちるないふ
この歌ちらんとする
ほごの事なればちる
さくらの始におきて
次よりちるさくらを
よめり

○霞ガタナビイテ其カスミハ色ノウツ、チ見エルアノ山ノ櫻ハナガチラ
ウトチヤラ霞ノ色ガカハツテキタ

まてといふよ散でてとまる物からは何を櫻よ思ひまて
まよじ

○チリカ、ツタ櫻ニ向フテシバラクナラズニ待テクレト云フノヲ聞入レテ
ソレデシバシデモナラズニ留ルモノナラバ何チ櫻ヨリマサツタモノ
チヤトハ思ハウソソレデハモウ世ノ中ニ櫻ヨリマサツタモノハアルマ
イニ惜イノニ早ウナルハツカリガアツタテ櫻ノキヅチヤ

めではほめいづるを
いふ詞なりたさい
たきなはぶきてその
上の詞助けてこそを
つよくする見たき聞
たきのるのみな同ト

うつせみとい世とい
ふ冠群なりこは嶺し
き身の命題の身の世
とつづけるなり古今
集のころに下りてハ
即ち蟬のもぬけに

のこりなく散ぞめでたき櫻はな有てよの中はてのうけ
れば

○ワルウナツテウザくト残ツテアラウヨリサツハリト残りナシニ早ウ
散テシマウノガサアくケツカウナコトチヤ櫻花ハ世ノ中ト云モノハ
ソウタイ何ンデモ長ウアレバカナラズシマイクチガウルイ物ナレバサ
此里にたびねとぬべしさくら花ちりのまがひに家路わ
すれて

○コヨヒハ此ノ里デトマラウチヤ此ヤウニオモシロイ櫻花ノナルマギ
レニ内ヘイヌルチハ思ヒダサズニサ

うつせみの世よも似たるか花さくら咲と見まにみつ
散よけり

○櫻花ハサ咲イタワト思フタウチニハヤカタ一方カラ散テシマウタワイ
人間ノ一生ノアヒダハナンノマモナイモノチヤガツレニモマアヨウ似

タフカナ

僧正遍昭よよみておくりける

これたかのみこ

櫻花散のちりなんちらすとして故郷人の來ても見なくよ

○遍昭師が大方コノ花ヲ見ニ來テシレラハ、デアラウト思フテ。毎日
くマテドモ見エヌ。ケフマデ見エヌカラハ。モウ大方見エヌノデアラ
ウ。スレヤヨイワ櫻花ヨ。ナルナラ勝手ニ散テシマウサ。ナラズニアツ
タトテ在所ノ人が來テ見モセヌニ。カヤウニヨミ候ニエ御目ニカケ候
已上

雲林院よてさくらの花のちりけるを見てよめる

そらく法師 承均

櫻ちる花のところの春をがら雪ぞふりつゝ消かてよす
る

○櫻花ノナル所へキテ見レバ。時節ハ春デアリナガラ。雪ガサチラく

てはかき意にもい
ひなしたり

この皇子雲林ぬんに
ましくける頃よみ
給えるかしからば都
をふるさといよみ給
ひしならん又みやこ
にてむかしの友なれ
バ何ぞなくふるさと
人よよみ給ふべきな
り

雲林ぬんは今の京の
北むらさき野に在り

父さしるせり

この下に典待因秀、朝臣さみの典待の四位なれば姓を下に書なり萬葉と此集は四位の人ハ必しもしるせりいにしへハ女もかくしるせる例なり

を

○霞ハナゼニ此ヤウニ櫻花ヲカクヌヤラ。ニルリトミルイハナラズ也。

セメテハ枝カラナルアヒメナリ也マア。見ヤウモノチ。ソノ間サヘ

霞ヲ見ラレヌ

こころこなひてわづらひける時に風にあたらじとでおろしこめてのみ侍りけるあひたにとれる櫻のちりがたよなれりけると見てよめる

藤原よるかの朝臣

たれこめて春の行へも志らぬまゝ待と櫻もうつろひしけり

○ワツハアンハイガワルウテ帳ノ雌ヲオロシテ。ヒツコモツテバカリ居

テ。春モイクカヤラ日ノ過ダイクモシラヌマニ。咲タラ見ヤウノト思フテセツカク待タ櫻モ。ハヤコノヤウニウツロウテシマウタウイノ

水沫のごまくながる花をいふなり

萬葉に殊離者等酒者などやうに書しもすみてよむべき證なり

東宮の雅院にてさくらの花のみかの水にちりてながれけるを見てよめる

すがの、尊世

枝よりもあだにちりにと花かれは落ても水の泡とこそかれ

○氷ノ上ヘチツテ流レル櫻花ガ。アレトツト沫ノヤウニ見エル枝カラモ。モロウ散タ花チヤニヨツテ。下ヘ落テモ。又同クアノヤウニモロイ。水ノ沫ニヤナルヤウ

櫻の花の散けるとよめる

つらゆき

とならばさかぎやのあらぬ櫻花見る我さへにまづ心を

○トテモ此ヤウニ早ウナルクラ非ナラバ。一向ニシヨテカラサカニガ

イニ。ナゼニサカズニハ。非ヌツ櫻花ハ。此ヤウニ早ウ散テハ見テ居ル
コナマデガ。心ガサワノトシテオナツカヌ
打聞。とならバの説。いと物どほし此詞のいづれも右の譯の意と以て見
るべきなり。例を考へ合せて味ふべし。

櫻のごとくちるものなると人のいひければ。
よめる

櫻花とくちりぬとも思ほへず人の心ぞ風も吹あへぬ

○オレハ櫻ノ花ハ早ウナルモノヤハ思ハレヌ。ソレヨリハ。人ノ心ガ
アズナモノヤ。ナゼト云ニ。櫻ハマダ風ガフカチバメツタニナリモセ
ヌガ。人ノ心ハ風ノクマデモマズニ早ウウル物ヤワサテニ
餘材。下句の注わろし。

さくらの花のちるとよめる

きの友り

吹あへぬは吹合せぬ
あり

ひさかたさは天雨月
みやこなきいふ冠辭
世天のかたはまろ

ひさかたのひかりのどけき春の日にまづ心かく花の散
らん

○日ノ光ヲ。ノドカナ。ニルリトシタ春ノ日ヤニ。ドウ云フテ花ハ此ヤ
ウニ。サワノト心セワシウナルコヤラ

東宮のたちはきのぢんよてさくらの花のちるを
よめる

藤原のよとかせ

春風ハ花のあたりをよまてふげ心づからやうつろふと
見ん

○春風ハ花ノ咲テアルアタリヲハヨケテフケ。モシ風ハフカイデモ。花ハ
ヤブシノ心カラヒトリデニモ。ナルモノカナ。タメテミヤウロ
ウシラのちるとよめる

凡河内のみつね

くてうつろなるを、靴
の内のまろくむなし
きにたさへて靴形の
天さいふならんさお
ぼゆ
久かたのひかりのど
けき春の日にてふハ
空のひかりといはん
びとさし
成案なるにひさかた
の説ハ久老が萬葉考
の日刺方の意といハ
るがまされるやうに
おぼゆ
帶刀の隙とは帶刀舎
人ミ云て宿直をし種
々の事に仕へまつる
武士の集るを、ころな
りそれらが集るを、こ
ろを隙といふなり禁

中にて瀧口といひ春
宮にては帯刀といひ
院にては北田と云み
な同下武士なり

雪とのみふるだにあるを櫻花いかにちれとか風のふく
らん

○サクラ花ハ。ヒトリデニモ。ヒタスラ。雪ノヤウコナルモノヲ。ソレサヘ
アルニ。マダコノ上ヘドノヤウニ。ナレト云フテ風ハフクコヤラ

ひえにのぼりてかへりまうできてよめる

つらゆき

山高み見つゝわがごとく櫻花風ハ心にまかすべうなり

○アノ櫻ノアル所へ行テ。見テ折リタカツタケレドモ。山ガ高サニエノボラ
イデ。残念ナガラオレハヨソニ見イ〜來タニ。風ハアノ櫻ヲ心マカ
セニ。スルデアラウト思ハル 餘材。山高みの説わろし

題しらす

一本
大友ぐるぬし

春雨のふるハ涙か櫻花ちるきししまぬ人となければ

なごりは涙邊にこい
かしこいさゝかに涙
ののこりたるを云。
さて何にも失去たる
物のなほのこりてあ
ることにいへり

○櫻ノナルヲ惜マヌ人ハナケレバ。此ノヤウニ此ノセツ春雨ノフルノハ。
世間ノ人ノ櫻ヲシンデ。泣クナメダカイ

亭子院歌合のうた

つらゆき

櫻花ちりぬる風のなごりにハ水なき空に浪ぞ立ける

○櫻ノナルキニ風ガ吹タテ。其ノ花ガシバラク。中デサウグケシキハ。テウ
ド浪ノタツケシキチヤ。ソシテ海ヘニナゴリト云フガアル其ナゴリハ
浪ガタツチヤカ。花チチラシタ此ノ風ノアトノナゴリニハ。水ノアリヒ
セヌ空ニ浪ガタツタワイ

ならのみかどの御歌

ふるさど、なりにしならの都にも色のかはらき花ハ咲
けり

○フルイ昔シノ都ニナツテシマウタ此ノ奈良ノ京ニモ。ヤツパリ色ハ昔ニ
カハラズ。都デアツタ時ノトホリニ。花ハサイタワイ

桓武天皇の延暦中に
山城の長岡に都を遷
されしかば奈良はや
がて故郷となりにし
によりて物みぢかハ
りぬるニ花のみ昔の

いろにほほりきき
詞まひやせに心お
しきはこのぬしの歌
なりわかき時より口
かろく興ある人なり

花にいたく心をそみ
たるあまりに云がお
もしうし

春のうたとてよめる

よとみねのむねさだ

花の色ハ霞にこめて見せきともかきだにぬすめ春の山
風

○花ノ色ヲハ霞ノ中ニコメテ。オイト見セズ庄セメテツノ香チナリトモ。
霞ノ中カラヌスミダシテキテ。コ、ハ、モ。ニホハセイ春ノアノ山ノ風ヨ
コレヤ

寛平の御時きさの宮の歌合のうた

素性法師

花の木もいまのほりかきと春立ばうつろふ色よ人なら
ひけり

○花ノ咲ク木モ。モウ今カラハ。ホツテ來テウエマイ。春ニナレバ。花ガサ
イテ早ウ。ウツロウ色ヲ見ナラセテ。人ノ心モウツロヒヤスウナルワイ

題をらき

よみ人しらす

春の色に至りいたらぬ里のあらし咲る咲ざる花のみゆ
らん

○春ノ色ハドコモカモ。ヒラマイナレバ。イキワタツタ里トイキワタ
ラヌ里トノ。ツケヘダテハ。アルマイニ。ドウ云フデ。花ハ咲タ所ト
サカヌ所トガアルコヤラ

春の歌とてよめる

つらゆき

三輪山を忘かもかくすか春霞人よ忘れぬ花や咲らん
○サテノ三輪山ハキツウ霞ンダカナ。コノヤウニマアカスミノ隠ス
ノハ。此ノ山ニハ人ニシラサヌ。ナイシヨウノ花ガアルカシラヌ
うりんるんのみこのもとに花見にきた山のはと

上下の間にい
云詞もりて下にら
んさうたがふきり

高橋に三輪山をしち
もかくすか霞だにも
心あらなんかくさふ
べしやといふ歌の一
二の句のそのまに
用ひて雲霞をとり
かへてよめるなり

うりんゆんに皇子の
住せたまへばよもす
がらに御ものごたり
し奉らんのごころを
こめてよめるなり

りにまかれりける時よよめる

そせら

いさけふの春の山べよまじりなんくれなびさけの花の
陰かげかり

○ドレヤケフハ日ノクレルマデモ。此ノ春ノ山ベチ。カケアルイテアソ
ハウソ。日ガクレタトテモ。花ノ陰ガナサ。サウナカイ。イクラモ花ノカ
ゲガアレヤ。モシ暮タナラ。サイハヒギヤ。花ノカゲニトマラウワサ。な
げの。なり。無なよて。げの。何げとおほくいふ詞なり。打聞なげの説わろ
し。くれなびといふよかなはず

春のうたとてよめる

いつまでもか野べに心のおくがれむ花しちらずの千世も
へぬべし

○花ガチラズハ。イツマデコノ野邊ニ心ガウカレテ居ルデアラウ。モシ花

ガチラズニアツタラハ。千年デモ此ノ野デマテウヤウニ思ハレル

題しらす

よみ人志らす

春ごと花のさかりありなめと逢見んと命なりけ
り

○花ハノ今年チツテモ。又來年カラ後モ。春ゴトニ盛ハアラウケレモソノ
盛リニ逢テ見ルコトハ。コチノ命次第ヤワイ。ナンボ花ザカリガ。毎年ア
ツテモ。命ガナケレヤ。又ト見ルコトハナラヌ。サウ思ヘバア、残りホ
ホイ。花キヤ

花のごと世のつねならば過しては昔の又もかへりまな
ま

○花ハチツテシマウテモ。又春コナレバ。年々相替ラズ。定マツテ咲ク
物キヤガ。世ノ中ガ花ノトホリニ定マツテ。カハラヌ物ナラバ。過シ

ありなめはあらめ
を延べたる詞なり

過しては過したり
しを約めていへるな
り

素性集六帖又は顯昭
注に一本を一枝と見
へたり

一本に枝を折てける
哉ともありいづれに
ても明也

あだながら花はした
はしきものになら
諸木の花なるにより
てちぐささ云

たなびく山はかみの
霞よりへだてつ
くなり

新撰萬葉にこの左
に花々数種一時開
け流し従風遠近來
るあるをよほせて意
あきらかなり

テキタ昔シモ。又フタ、ピカヘツテクルデアラウニサ。世ノ中ハ過タ
昔シガフタ、ピカヘルト云フハナイ

吹風にあつらへつくるものからば此一本のよきよと
いはまじ

○吹テクル風ニ。頼ンテ。イヒツケラル、物ナラ。此花一本ハ。ヨケテ
吹テクレトイハツニ。サウイフフハナラヌモノナレヤ。ドウモ散テモ
セウフガナヤ

待人もこぬものゆゑに鶯のあさつる花をいりてける哉

○此花ヲ馳走ニ折テ生テオイテ。來タナラハ見セウト思ウテ。待ツ人モ來
モセヌニ。ア、鶯ノオモキロウ鳴テ非タ。アツタラ花ノ枝ヲオレハ折
タワイ。サテモヲシイフチシタコトカナ。待ツ人が來ヌクラ非ナラ。折
ラネハヨカツタニ
こぬものゆゑより。來もせざる意なり。

咲花ハ千種ながらあだなれと誰かハ春を恨ばてぬる

○ヨコ春サク花ハイロクアムガ何ノ花デモ皆アマナ物ナレド。ソレ
デモ誰レガ春ノ花ハアマナト云テ。トント見カギツメ者ガアルゾ。ア
マナモノヤヤノトハ誰モイヒツ、咲ケヌ又ヤツハリ賞翫スルヤヤ
餘材。後の説はわるし。

春霞色の千種見えつるのたなびく山の花のかけかも

○霞ノ色ガイロク見エルノハ。ソノ霞ノナヒイテアル中ナ山ノ花
ノイロガ霞ヘツツ、タノカイノ

在原元方

かきみ立ッ春の山べの遠けれと吹來る風ハ花の香ぞをる

○霞ノ立ッテアル春ノコロノ山ハ遠ウミエムケレト。カクベツ遠ウモナイ
カシテ。吹テクル風ハ花ノニホヒガサスル

この歌の意諸説ともよくはしからず。

花に心の入たるよし
なりそれをうつらふ
まはいふ

うつろへる花を見て よめる つね花
花見れば心にさへぞうつりける色にはいでと人もこそ
忘れ

○ウツロウタ花ヲ見レバ。アノヲシヤト思ウ心ガ花ニシミコンデ。コナ
ノ心マデガ花ノ色ニウツ、タウイ。此ヤウニ花ノ色ニウツツタ心ヲ。
トウツ顔イロニ、ハダスマイ。人ガ知ラウモシレヌホドニ人ガ知テハ。
アマリアハウラシイトヤヤ
打聞よるし餘材わろし

題しらすぎ よみ人しらすぎ
うぐひその鳴野邊ごとに来て見れば移ふ花に風ぞ吹け
る

○鶯ノナク野へ来て見レバドコノ野モノウツロウタ花ヲ風ガ吹テナラ
スワイ。鶯ガ惜シガツテナクハヌウリチヤ
千秋云二の句の。を心にまはいふ
詞は。下の句へかけて心得べし

うぐひすを吹風の上
におきゆへて心得べ
し

吹風をなきてうらみよ鶯のわれや花よ手たにふれた
る
来て見ればへは
かみざるなり。

○鶯ガオレガチカクへ来て恨メシサウニ鳴クガ。ソチハ花ノチルガ惜ウ
テウラミルナラアノ吹テクル風ヲ恨ンデナケサ。オレガアノ花ニチヨ
ツトナリテ手ドモフレタナラコソ。オレヲ恨ミヤウケレ。オレハ手モ
フレハセヌゾヨ。スレヤコナガ知タドハナイワサテ

典侍治子朝臣

散はなの泣にいとまる物あらばわれ鶯よおどらましや
ん

○散テユク花ガ。惜ンデ泣ノデ。チラズコトマルモノナラ。コナモ鶯ニオ
トロウカイ。鶯ニオトラヌホド泣ウケレド。ナンボ泣テモ花ハドウモ
トマラスワイノ

今の本に後陸とある
いわるし下に藤原の
のちかげがから物の
つかひに假名にて
おけるは即ちの人な
るべし

六帖に初、の句登の
とあれども登の
にあらざるべし
に花のするはうぐ
ひすの鳴るる歌を
相むかへて登の鳴を
よめるとかきて歌に
はちる花をよめる此
集の心づかひなりた
やすく見過すべから
ず

仁和の中將のみやすん所の家に歌合せむとて
けるときによみける

藤原後陸

花のちるとやわびしき春霞たつたの山のうぐひすの聲

○霞ノツツテアルアノ立田山ニ鶯ノナク聲ガスルガ。花ノナルコトガツ
ラウ思ハレテ。アノヤウニ鳴クカイ
うぐひすのなくをよめる

こづたへばおのが羽風よ散る花をたれにおほせてこゝ

ら鳴らん

○鶯ガアノヤウニ花ノ枝チアナラヘコナラヘ。コツタヘハ。自分ノ羽ノア
ヲチノ風デ花ハナルモノヲ。ソレチ誰レガ答ニシテ。アノヤウニ恨メシ
サウニ。シナリニ鳴クコトヤラ。外ノ物ガチラスカナシクアノヤウニマ
千秋云。このうぐひすの物の数の多きをいふはシキリニといふ譯はあたはざるがごとくあれど
も。俗語にていふときハ必ずしもうぐひすになくといふ勢なるをいふなり。すべし。この類多し。○な

鶯の花の木よてなくとよめる

みつね

ふるしなき音ども鳴かな鶯のとしのみちる花ならあ

よ

○鶯ノナンノセンモナイ鳴ゴトカナ。今年ハカリナル花デハナイイツノ
年トテモツヒニ鶯ノナクノ花ガチラズニアツタト云フハナイニ

題しらす

よみ人あらき

こまかへていさ見に行んふるるとの雪とのみころ花ハ
散らめ

○タレカレサンヒアハセテ。馬チノリナラベテ。打ツレテ。ドレヤ見ニ
ユカウツ。此、セツフル京ハサツヤ。雪ノフルヤウニサ。ヒタノト花
ハナルデアラウワイ

さて雪とのみこそと
いへるけしき本末の
句さよよましの巧
なくあるがまよによ
みて何となくおもし
るき歌也奈良の京の
末の人なるべし

ちる花をなにか恨みん世の中に我身もともよあらむ物
とハ

○花ノチツテユクラ。何ノ恨メシウ。コナガ身トテモ。イツマデモ。

此世ニカウシテアラウモノカイ。花ト同ヲヤウニオツ、死ンデユク
モノヂヤ。花バカリヲ早ウチルトテ。恨ミヤウヤウハナイ

小野小町

花の色ハうつりにけりないたづらハ我身世にふるおが
めせしよよ

○エエ、。花ノ色ハアレモウ。ウツロウテ。シマウタワイナウ。一度モ見
スニサ。ワシハツレンツテ。居ル男ニツイテ。心苦ナガアツテ。何
ノトシヤクモナカツタ。アヒダニ長雨ガフツタリナドシテ。ツイ花
ハアノヤウニマア

世よふるとハ男女のかたらひするをいふ男女の中らいのことを。世と

ながめといふ春の長雨
せしまに花のうつろ
ひぬと云てそれを思
ひあかて長目するに
かけたり

この歌小町のよめる
中にてはすぐれたる
にあらむ百人一首に
いでたるゆゑにしき
りにさ思へるハ古歌
の心をしらで人のし
りに立ていへるなり

も世の中ともいへる多し此集戀の歌もこれかれあり。いせ物語よ。
世とハ。つける。源氏物語よ。また世をまらぬ。などあるたぐひもこ
れなり。

仁和の中將のみやす、いところ家に歌合せんとて
とけるよよめる

ろせら

とこと思ふ心いといよよられなん散花ごとのぬまてと
とめん

○散テユツ花ヲ。ヲシイト思フ心ハドウツ。糸ニヨラル。物ナラヨイニ
ツシタラ。ツノナル花ヲ一ツ。ツノ糸デツナイデ。チラヌヤウニ
トメテオカウニ

志がの山こえよ女のおほくわへりけるよよみて
つかはとける

つらゆき

しがの山越ハ今の京
の東なる北しら河の
瀬の方よりのぼりて
如意がたけをこへ近
江の志賀へいする道
をハハシ

梓弓はるるをいはん
冠辭なり已にいへり

落花に道まじふとい
ふおもしろき體なり
わか菜つまんさいふ
を正月七日の事のみ
とおもふは後のかた
くななりすべて年の
内の雜菜わか菜と
云ふなりこの歌花の
ちるころによめるに
ても心得べし

端に山寺とてきて歌
には寺をいはず花多

き山寺にやざりたる
けしき見えたり後の
歌ならバ猶山寺とも
にみ入る故にも多く
てこまやかにいやし
くなれるなり

延昭花山寺に住れし
時なり

あづさ弓はるるの山べをこえくれは道もさりあへき花ぞ
散ける

○日春ノコロ山ヲ越テクレバ。ドウモ道モヨケラレヌホド。花ガナツテ
クルワイ。アノ女等ガサ

寛平御時きさの宮の歌合のうた

春の野は若菜つまんとこし物を散かふばなほ道はま
ひぬ

○此春ノ野テ若菜ヲツマウト思フテ。來タモノヲ。アチヲヘコチヲヘチ
リマガウ花デ。ワカナチツム所ヘニク道ハマギレテ。フミマヨウテ。
ソデモナイ所ヘキタワイヨレヤ

山寺に詣でたりけるよよめる

ある人のいはく。此詞書なる下のよよを寫し誤れなるなるべし。

やどりおて春の山べはねたる夜の夢のうちよも花ぞち

りける

○春花ノナル時分ニ山ニトマツテ。寐タ夜ハツノ花ヲ惜イクト思フユ
エカ。夢ノウチニモサ。花ノナルトハツカリヲヨルワイ

寛平御時きさの宮の歌合の歌

吹風と谷の水とさかりせはみ山がくれの花を見ま
や

○フキチラス風ト。流レテユク谷川ノ水トガ。ナイモノナラバ。ミ山ノ
オクニカクレテ咲テアル花ヲ見ヤウモノカイ。見ラレハスマイニ
スレヤ風ヤ川ノ水モ。花ノタメニメツタニワルイトハカリデモナイモ
ノサヤ

志賀よりかへりける女どもの花山はいりて藤の
花の下は立よりてかへりけるによみておくりけ
る

僧正遍昭

六帖に下句をばひま
つれよとかんまを
たにどあるか此僧正
の口よりなり

よそに見てかへらん人にふちの花はひまついれよ枝の
をるとも

○チヨット立ヨツマバカリテ足モ留メズニ。ヨツニ見タイヌル人ニハヒ
マツウテイナスナ藤ノ花ヨ。タトヒ枝ハ折レルトモ。ドウツハヒマツ
ウテトメヨ

家に藤の花さけりけるを人の立とまりて見ける
とよめる
みつね

我やどに咲るふちなみ立かへり過ぐてにのみ人のみる
らん

○コナノ庭ニ咲テアル藤ノ花ヲ。アノヤウニ人ガヒツカハシノシテド
ウモ見ステ、イナレヌヤウニ。ヒタスタ見ルガ。ドウ云フヤラ。エイ
庭デモナイニ

ふぢなみさは花のな
びくをいふそれを涙
にさりなすは歌の常
なりなびくをなみさ
いふしのをおし
のるゐなり

題しらせ

よみ人志らせ

いまもかも咲よほふらむたちびなの小島のさきの山吹
の花

○タナバナノ小島ノ崎ノ山吹ノ花ハ。ケフコノゴロカナ。見事ニサイタ
デアラウ

初句も。二つともよやすめ辭まて。今かなり。今もといふよのあら
春雨よにはほへる色もあがなくて香さへあつかい山吹の
はな

○此山吹ノ花ツイ。春雨ニヌレテ一入マサツタ。色モドウモイハヌニ。
色ハカリデナシニ。香マデガ。雨ニヌレテ別シテ。シホラジウニホウ

春雨の香の方へもかへれり。物のよはひの。まめれは増る物なり。
山吹のあやかく咲そ花見んとうるけん君がこよひこな
くに

たちびなの小島が崎
は大和のあすかのた
ちびなの島と云とこ
ろなり萬葉にあまた
みえたり

萬葉に山吹はあまつ
ゆにほへる花を見
ることによめり山
吹はいろにのみほ
ひて愛るほごの香は
あらねど女郎花にも
香をよめるとさくこ
の頃はかくしひたる
こともはやく出こし
なりむかしはしつ實

香きこもよまきり
しなり
あやなくさきそひ文
なくさきそ
無勿咲てふ詞あり

萬葉に橋のうた君が
いへの花たちばな
なりにけり花のさか
りにあひまじ

○山吹ハツケンタ、ヌ物ヂヤ。コンナナラサカヌガヨイ。花ガサイ
タラ見ニ來ウト。思フテ植テオカシヤツタデアラウニ。其御方ガ。コ
ヨヒミエモセヌニ。咲テモ何ンノセンモナイフヂヤ。咲。クラ井ナラ。
其御方が見ニミエルヤウニシテ。クレレヤ。ソレデハ。咲タカヒガアツ
テ。ワケノタツト云モノヂヤニ。戀の哥あり

よしの川のはとりに山吹の咲りけるをよめる

つらゆき

吉野川さしの山吹ふく風に庭のかけさへうつろひまけ
り

○吉野川ノ岸ナ山吹ヲ見レバ。風ガ吹テチルガ。ソノ風デ川ノ氷ガ。ウ
ゴクニヨツテ。底ヘウツ、タ影マデガチツタウイ

題しらす

よみ人しらす

蛙なく井手の山吹ちりまけり花の盛にあいまし物を

ものをこの歌を山
吹にせりかへしのみ
されど古哥なればし
らへはうるはしく聞
ゆは下めの二句かは
づなく神なび川のと
さくそのまごころの物
を冠らせて哥のには
ひさせるにしへの
風流なり

○コノ井手ノ山吹ガ。ハヤモウ散テシマウタウイ。ア、残念ナナラシタ
マソツト早ウ。花ノサカリノ時分ニ逢フヤウニ來テ見ヤウデ。アツタ
モノ

この歌のある人のいはくたちはなのさよともが歌なり

春のうたとてよめる

そせい

思ふどち春の山へ打むれてそこともいはぬ旅ねしてと

○ソソデフツコヘイト云テ定マツタ旅デハ。ヨソニトマルノハ。ウイ
物ヂヤガ。サウイン定マツタ旅デハナシニ。心ノアフタドウシ。春ノ
山ハツレダツタイテ。一日日ノクレルマデアソソデ。イキガリニトマ
ツテミタイモノヂヤ。ソレデハオモロイ旅寐デアラウ

打聞。下句の意くはしからず。

春のとく過るをよめる

みつね

月の入ると弓を射る
さなかねてはやき思
なふくめてよめるが
この集のころもはら
の巧みなり

物うくは何となく心
憂なもいへど是ハ物
にうみ果たるをいふ
あり

梓弓あしゆみはる立たより年月のいるがとくもおもはゆるかな

○古歌ニ梓弓春トツマケテヨシアルガ。マコトニ月日ガ早ウタツテ。

矢やチイルヤウニ思ハル。春ニナツテカラマダナンノマモナイニ。サ

チモ早ウメツメーカナ

とし月とよめるハ。まとの年の暮くの歌なればなるべし。春の暮の歌よ
ては。此詞いかゞよきこゆ。

やよひに鶯のこゑ久しう聞えざりけるをよめる

つらゆき

鳴とむる花しなけれバ鶯もはてハ物うくありぬべりな
り

○ナンボ惜ンチ鳴テモく。花ハミナ散テシマウテ。鳴なタテトマル花

ナケレバ。コレデハセンノナイチヤト思フテ。鶯モシマヒニハ鳴ト

モナウナツタデ。アラウサウアリソナコニ思ハレル。ソレデ久シウナカ

スチヤマデ。餘材わろし

やよひのつごもりかたは山をこえけるよ山川よ

り花のあがれけるをよめる ぶかやぶ濁

此ハ人のこゝよ始めて出たれば。姓をのぐべき例なるよ。姓なき
いかゞ。又打聞よ。此名のぶを。みなばとせるハひがとなり。

花ちれる水みづのまじくとめくれバ山やまの春はるもなくなり
にけり

○花ノ散テ流レル川スチニツウテ。段々ミナカミノ方へ尋テテキテミレ

バ。山ニハモウ花ハミナチツテシマウテ。ハヤ春モナイヤウニナツタ

ツイ

春をくしみてよめる もとかた

をしめどもとゞまらなくよ春霞かへる道みちにしたちぬと
思おもハバ

春ヲ惜ムケレドモ。モウシヨセントマリハセヌ。春ハモウヌツテイヌ
ル道へ旅ダチシタレバ。トマラヌハズヂヤ

霞ハ。たつ縁よいへるなり。結句ハた々ちぬれバといふ意よて。思ふ
よハ意なし。すべて思又いふ詞を。そへていへる例つね多し。思ハバ
を。春の思ふと見たる説りわろし。

寛平の御時ささの宮の歌合のうた

おき風

聲たえず啼^なや鶯ひとせにふたゝびとだよくべきはる
かハ

春ハ一年ノ内ニ。イク度モ来レバ。重疊ノコヂヤガ。サウハナラズ
也。セメテ二度トナリ^た来レバヨケレドモ二度トモクル春カイ。ヌツ
タ一度ナラデハ。ナイ春ヂヤニ。クレテユクハサテノコリ多イ
ヂヤ。鶯ハズ井ブン絶ズ鳴テ恨ミヨヤイ。イカニモ鳴キドコロヂヤ

六帖がこゑたて、な
げやうぐいすどあり

花つみさの二三月の
ころ野山よもきて花
をつみて先祖の墓を
まつることなり今の
京の人は四月に日元
の山にのぼりて花
つみさて草花などを
つみもてかへるなり

端に雨のふりけるを
云て哥にぬれつゝと
よみ藤の花をさば
しにかきて哥に折つ
るとのみよめる此ふ
たつを哥のかた二大
にはぶきたり
この染はし香と哥を
相てらして心得るや

やよひのつもごりの日花つみよりかへりける女
ともと見てよめる

みつね

とくむべき物とをさしよばかなくもちる花ごとよたぐ
ふ心か

アノ花ガアマリ惜サニ。一本くチツテユク花ゴトニ。コチノ心ガ
イテイクワ。アノ女ニ。サテモマア。アホラシイコカナ。ツイテイタテ
トメラレウモノデハナイニ。打聞みなわろし

やよひのつもごりの日雨のふりけるよふぢの花
をりて人よつかはしける

かりひらの朝臣

ぬれつゝぞまひて折つる年の内に春ハいくかもあらじ
と思ハバ

此藤ノ花ハ。ドウツソコモトへ。御目ニカケウト存ヲテ。今日ノコ

うによく心してゆき
たりはしの詞短くて
よく味ひなせり

後撰六帖にこの哥を
おもひてよめる哥多
し

ノ雨ニヌレノヨリニ折リマシタ。春ハマダイクカモアルデアアル
マイ。モウ當年ノ内ニハ。タツタケフ一日ナラデハ春ハナイト存ズル
エエニ。諸説。下句の意を得ず。

亭子院歌合に春のはての歌

みつね

けふのみと春を思はぬときたにもたつとやすき花のか
けかひ

春チ。モウ今日バカリヤヤトハ思ハヌ時デサヘ。花ノ下ハ。立ッテイヌル
ノカ何ントモナイガサア。ソレデサヘ花ノ下ハ。立ッサリトモナイニ。
マシテケフギリノ春チヤモノ

頭古今和歌集遠鏡卷之二終

頭古今和歌集遠鏡卷第三

夏歌

題しらす

よと人しらす

我やどの池の藤なと咲よけり山時鳥いつかきなかむ

○ユチノ庭ノ池ノ邊ナ藤ノ花ガ咲タツイ。郭公ハイツ來テナクデアラウ

此歌ある人のいはくかきのもとの人まろがなり

うづきにさける櫻を見てよめる

紀とことさだ

わはれてふとぞあまたよらじとや春よおくれてひと
り咲らん

○今月ニナツチ。櫻花ノアルハメツラシイナヤ。コレハナンデモ見ル

こゝのあつれいめつ
るにいへり

や一卯月の来て時鳥
のいつか鳴んどあも
へる歌のすがた高く
心ひろまなり

時鳥の鳴ら五月に
なげはさ月まつと云
てこれの卯月によめ
るなり

人ガア、ハレ見ゴトナ。ア、ハレ見事ナト云フ其詞チ。方々ノ櫻ヘ分テ
ヤルマイ。己ヒトリガサウイハレウト思フテ。ワザト春ヨリ後ニオン
ウヒトリ。咲タデアラウガ。千秋云結句にさくらを
かくしてよみたるなり

題をらす

よと人しらす

五月まつ山時鳥うちいふも今も鳴なむとぞのふるこゑ

○郭公ハ五月ヲ待テ鳴クキヤガ。マメ五月ニハナラチドモ。去年ノ残り
ノフル聲ヲ出シテ。ドウツ今モナケカシ。千秋云うちはぶきの。萬葉打羽
振と云て。羽ふるを云この聲なき
いなきがよらしきなる入し

伊勢

五月こい鳴もふりなん郭公まだしきはとこのこゑをまが
ばや

○時鳥ハ五月ニナツタナラバ。モウ澤山ニナツテ。メツラシウナイデモア

ラウ。ドウツマダソノ時節ニナラヌウチノ聲ヲ聞タイモノキヤ

よと人しらす

さつき待花橘の香をかけは昔の人の袖のかぞする

○五月ニサク橘ノ花ノニホヒチカゲハ。マヘカタノナツミノ人ノ袖ノ香
ガサスル

いつのまに五月きぬらん足引の山ほととぎす今ぞ鳴を
る

○イツノマニ五月ニナツタヤラ。ヒゴロマチニ待ツタ時鳥ガ。今始メテ
ナツツアレ

けとまなまらまだ旅なる時鳥花たちはかゝ宿のからを
ん

○ケサ始メテ来テ。マダエ住ツカズニ旅ガケテ居テ鳴ク時鳥ヨ。定メテ宿
ヲトルデアラウガ。コチノ庭ナ橘ニ宿ヲバカレカシ。ソシタラ存分ニ

たちばなも五月に咲
もの香ればさ月待ッ
さいへりこいたが袖
ふれしやどの梅ども
なき云となく橘の
香をかきてわがこひ
しく思ふいにしへの
人のそでの香おほゆ
るよめるのみ田道
間守が故事漢の事ま
で引いていへるハ
みち古歌をしらぬ人
の心なり

聞ウ

おとと山とこえける時よほととぎすのなくと聞て
よめる 紀友則

音羽山けとこえくれは時鳥梢はるか今ぞまくる

○音羽山チケサ越テクレハ時鳥ガアノハルカナ。梢テ。アレ今始メテナ
クワ

音羽山とらふるよほととぎすの聲の意なし

ほととぎすのはじめて鳴けるをまゝてよめる

そせら

時鳥はつ聲きけはわぢまきくぬし定まらぬ戀せらるは
た

○時鳥ノ始メテ鳴聲チキケハ。オモシロウハアレドモ又サ何トナウカン
シヤウガオコツテ無益ナ。其人ト定マツテモナイ戀コトチガスル。す

素性集に鳴こまきけ
はとあれは右のほし
詞にあつてはつこ
ゑなることを聞せた
るものなるべし此集
はし書もて歌の意を
扶くる例なり

石上と云はるるに布
留の社あるを本にて
古きことにも雨のふ
るにもいそのかみふ
ると云かくるなり

べてはたひ又なり。此の哥なるなり。三の句の頭よりうつして聞べし。おも
しろけれども又の意なり

あらのいそのかみ寺にて郭公のなくとよめる

いそのかみとふるき都の時鳥こゑばかりこそむかとな
りけれ

○此石ノ上ノアタリハ昔ノ奈良ノ都チヤガ。今ハモウ何モカモ昔トハ
變ツテシマウタニ。郭公ノ聲ハカリガサ。カハラズニ昔ノトホリチヤワ
イ。同書なる石ノ上寺なり。山邊郡石上よあるを。奈良といへる事なり。今
の京よてり。石上のあたりを造もひろく奈良といひならへるなり。た
とへば今の世よ。丹波の國なる愛宕山をも。他國よてり。京の愛宕と
いふ類なり。打聞の説ひがとなり

題とらき

よと人しらす

夏山に鳴ほととぎす心あらは物思ふわれに聲なきかせ

荆楚時記に杜鵑初
鳴先聞者主別離とい
ひて客中に多くよめ
り
あかなくハ汝が鳴な
り、なほいかにしへ
ハ未^{まだ}てふ意なる言な
り後のいよくに用
ひたるいかにしへに
かつてなし

そ

○アノ山ヲナク時鳥ヨ心ガアルナラ。此、ヤウニ物思ヒナシテキルワシニ
キカマテツレナイ

ほととぎす鳴聲きけハ別^{わか}れニ故郷さへぞ戀しかりける

○ホト、ギスノナク聲ヲキケバ。感情ガオコツテ。ハナレテキタマヘカ
タノ在所ノコマデガサナツカシウ思ハレルワイ

時鳥あかく里のあまたわれハなほうとまれぬ思ふも
のから

○ホト、ギスヨ。ツチハ。ナク里ガアソユニモコノニモアマタアツテ

コ、バカリデ鳴カヌニヨツテ。賞翫ニ思ヒハスレドモ。ソレデモウト
くシウ思ハレル

思ひらづるときいの山の時鳥からくれなるのふり出て
ぞ啼^な

人のなく時ハなみだ
のいつるをもて應^かう
ぐひをなごにもなみ
だといひ又泪ハみえ
をともいへり

○戀^シイ人ヲ思ヒダシタ時^ニハ^の山^の三^三聲^ヲアケテサ。ワシヤナクワ

イ。四の句の。たゞふり出の序のみよて戀より。紅のふり出つゝなくと
あるの。異なれり。さてこの哥の。もなら戀の哥なるを。こゝよ。入れる
にいかにぞや。

聲ハして涙ハ見えぬ時鳥わが衣手のひづ^ほをからなむ

○時鳥ハナク聲ハシテ。涙ハ見エヌガ。涙ガナクハ。オレガ袖ガヒツ
タリトスレテアルヲ。借シテヤラウホドニ。コレヲソチガ泣涙ニカッ

タガヨイ

あし引^清の山ほととぎすととりはへて誰^レかまゝるとねをの
とぞなく

○オレハイツシユク泣テハツカリ居ルガ。アノ時鳥モオンナシヤウニ。
間タモナシニ鳴テオレト。誰レガ勝^{かつ}ツ。サアナキクラバヲセウテ。

ヒメスラナクワイ

何事になくかくよめ
るハ一寸おにその物
に思入たる心なり古
歌ハこの意を思ひ入
て見るべし

これを死出の山へ言
うてせんといふ説ハ
うたのおもてにも見
えぬあだし言なり

さみだれてふこさバ
を亂るゝに思ひよせ
たりとみおるは六帖
にさみだれにみだれ
そめにしわれおれバ
さよめるがあれぞこ
ハの歌はしからむ

たち花を時鳥の宿と
ほめるは高葉より見
ゆ梅の露の宿といひ
秋の鹿の妻といふ類
にて時の物もていひ
なすのみ

をりはへり。時延ときはへにて。時長くつゞくとをいふ詞なり。をりはへて鳴
クハ。時長く。おひだもなしよなくとなり。

今さら山へかへるを時鳥ときどりこゑのかぎりわが宿やどよな
け

○山カラ出テ來テ。モウ里ナレタ。イデヤニ。今サラ山ハカヘルナヨ
時鳥ときどりノアリタケハ。シマイマデ。コチノ庭デナケ

とくよのまぢ

やよやまで山時鳥とづてんわれ世の中よすとわびぬと
よ

○出ヘカヘル時鳥。ヤイノウ。チヨット待テタモ。コトヅテラセウツシ
ハモウ世ノ中ニ住ミアゲンザワイノ。ソレデ追付ワシモ山ヘユモラウ
ト思フホドニ。サウ云フテタモ

寛平御時みときさといの宮の歌合のうた

紀友則

さまたれ物思ひをればほとゝぎす夜ふかく鳴ていづ
ち行らん

○五月雨がフリツバイテ。イヨク夜モ。モヤクヤト物思ヒヲシ居レハ
時鳥ガ鳴テイクガ。夜モフケタニ。ドチラヘイクヤラ。オレモ此
ヤウデバ。ドチヘナリトモイキタイ

夜やくらき道やまどへる時鳥。我やどとしも過がてよま
く

○夜ルテクライニヨツテ。ドチヘモイカヌノカ。又ハ道ニマヨウタノカ
ホト、ギスガ。所モ多イニ。コチノ庭デハツカリ。ドウモ過テイナレ
ヌヤウニギツト鳴テサル

大江千里

やどりせし花橘もかれなくになどほとゝぎすこゑたえ

かれが聲のうちにも
夜の明るうに夏の
よの短きほごを甚し
くいひなすなりすべ
て大きなるもさや
かなるも過すいでいひな
すハ古歌のあやなり

あかすにあかすぞか
ねたり源氏さゆきの

ぬらん

○宿カツテ居タ橋モマダカレモセヌニ。時鳥ハナセニユツヘインデ聲モ
セヌヤウニナツタヤラ

まのつらゆき

夏の夜のふすかどうればほととぎす鳴一こゑよあくる
まのゝめ

○チルカト思ヘバ。時鳥ノナク聲デ。ハヤモウ明方ニナツタ。サテく
短イ夜カナ。下句又ハホト、ギスノナイメ一聲デ目ガサメメガハヤモ
ウ夜ガアケル

まのゝめを打聞の如く。朝あしたの日とする時の後の辭なり。餘材まのゝめ
の説わるし。千秋云初句の、のもつらゆきの意に
て結句のあくるへつらく詞なり

とふのたゞみね

くるゝかと思れば明ぬる夏の夜をわかきとやなく山時

鳥

○日ガクレルカト思ヘバ。ハヤアケタ此度ノ夜チ。アマリ短サニノコリ
多ウ思フテ。郭公ハアノヤウニナクカヤ

紀秋峯

夏山に戀しき人や入よけんこゑふり立てなくほととぎ
す

○コノ山へ時鳥ノ戀シウ思フ人ガコモツタカシラヌ。ソチヤヤラ。聲ラ
アゲテナク。餘材わろし。打聞よろし

よと人しらす

こぞの夏鳴ふるしてと時鳥それかわらぬか聲のかはら
ぬ

○去年ノ夏タクサンニタエズナイテ。ヨウ聞知テ。居ル。時鳥ガ今又ナ
ク。アレハ去年ナイタクノ時鳥歎。サウデハナイカ。聲ガオナツイ

巻にかんの君の曉か
たの歌に心がらかた
く袖をぬらすかな
あくるをなしふる聲
につけても此外にも
さる意なる歌多し

新撰萬葉にこの歌の
右に一夏山中驚レ
耳根郭公高聲入ニ
禪門とあり

チヤガ

時鳥のなくと聞てよめる

つらゆき

五月雨の空もとろろ時鳥をいせうしとかよたど鳴らん

○時鳥が五月雨ノ空モドンド、ヨヒトヨヒタヌラ鳴クガ。何ヲウイト思フテアノヤウニナクコヤラ

さふらひよてをのこ共のさけたうべけるにめして時鳥まつ歌よめとありければよめる

みつね

時鳥こゑも聞えず山びこいほかゝ鳴音をこたへやいせぬ

○時鳥ガナクカ〜トマテドモ聲モ聞エヌガ。ヨシデ鳴ク聲ナリヒコ、

といろは今もどろく〜と鳴といふに同じくそれを清めていふは古言なり
夜た〜は夜直にて夜をひたすらといふなりよもすがらといふに同ト心なり

人まつ山を名所と云はわろしたゝ松の生る山に人まつと云ひかけたるなり

むかしへは方さいふ意にていにしへ行へなまに同じ且此へは潤りていひがたき所は元のごまことなるなり

山にほととぎすの鳴けるをきいてよめる

つらゆき

時鳥人まつ山になくあれば我うちつけし戀まざりけり

○人が來モセウガト待テ居ル此ノ松山ニ。アノヤウニ時鳥ガナケバ。今マデサホドニモ思ハナンゾカ。ニハカニコナモ人ヲ待ツ心ガマサツタ

ツイ

はやくすまけるところにてほととぎすのあまけるを聞てよめる

たぐとね

むかしへや今も戀しき時鳥ふるごとくにも鳴てきつらん

○時鳥ヨ。ソチモオレト同シヤウニ。昔カ今デモ戀シイカ。所多イニ此本、在所へ鳴テ來タノハ昔ガ戀シイヤラ。千秋云今もはなれもとあらまほしくおぼゆ

時鳥の鳴けるをきくてよめる

とつね

ほととぎす我といなしに卯の花のうきよの中は鳴渡る
らん

○世ノ中ヲウイ物ニ思フテ泣テクラスモノハオレヤガ。時鳥ハ其オレ
デハナシニ。ドウイフデ。世ノ中ガウイト云テ。卯ノ花ノアタリヘ
キテ。アノヤウニオレト同ヤウニ。鳴テクラスヤラ

蓮の露と見てよめる 僧正遍照

はちを葉の濁りよまぬ心もてなにかの露を玉とあざ
むく

○蓮ハ世ノ中ノ濁リニツマヌ。譬ヘニ御經ニトイテアルガ。サウ云フ清
淨ナ心デ。ナゼニアノヤウニ葉ノ露ヲ玉ト見セテ。人ヲマダマスコト
ツイ

我まはなしになわれ
もまはなしに云は
わろしわれならでま
いふこころ心得べし
うの花はうき世にい
はん冠辭に時のもの
を用て歌のほひま
するなり
法花經の涌出品の文
に不染世間法如蓮花
在水これなしてよめ
り
白氏文集に荷露雖圓
豈是珠

月のおもむろかりけるよわかづきがたによめる

ふかやぶ

夏の夜のまだ霄ながら明ぬるを雲のいづこに月やとる
らん

○ア、ヨイ月デアツタニ。夏ノ夜ノ短イコトハ。マダヨヒノマ、デ。フケ
ル間モナシニハヤ明タモノ。コノ夜ノ短サデハ月ハ。西ノ方ノ山マデ
イキツク間ハアルマイガ。アノ曉ノ雲ノ。ドコラニトマツタコヤラ

隣より床夏の花をこひおこせたりけれバ惜て此歌
をよみてつかひしける とつね

塵とだますとぞ思ふ咲より妹とわがぬる床まつ
の花

○手前ノトコナツハ。カトワヤガ。寐マス床マツデ。大事ノデゴサル
花ガサイテカラ。塵サヘカケマイト。存ズルホド大事ノデゴサル折テ

床ははらはぬはちり
はつもるを友誼する
にはいさゝかのあり
をもおかすの心をい
へりおくこころをす
るさふなり

行かふはゆきかへり
なり萬葉に往反さか
けり

ハエシシマスマイ。千秋云、此ノ歌上句、三一
ニミ句を次第して見るべし
とあ月のつごもりの日よめる

夏と秋と行かふ空の通ひぢのかたへ涼とき風やふくら
ん

○今晚クレテ。ユク夏ト來ル秋ト。イキチガウ空ノ通り道ハソノ夏ノ通
ツテユク片一方ハマダ暑ウテ。秋トホツテクル片一方ハ。スマシイ
風ガフクデアラウカイ

書頭 古今和歌集遠鏡卷第二終

歌の意詞よくとくの
ひてあきらかありか
くことひうく打しつ
まりてよむことのか
たきなり
さやかは日本紀に亮
の字をよみて見るも
のにもきくものにも
清くあざやかなるな
いへり

書頭 古今和歌集遠鏡卷之四

秋歌上

秋たつ日よめる

藤原敏行朝臣

あきゝぬと目よぬとやかに見えぬとも風の音よぞ 驚か
れぬる

○秋ガキタトイフテ。ソレトハツキリト目ニハ見 ヌケレド。ケフハ風
ノ音ガ。ニハカニカハツタテコレハ秋ガキタワトビツクリシタ

秋立日うへのをのこともかもの川原に川せうえう
しげるともにまかりてよめる づらゆき

河風のすゞしくもあるか打上する浪とともよや秋の立
らん

○川風ガサテモマア。涼イフカナ。浪モ立ット云フナリ秋ノ來ルノモ立ッ

こゝめづらしき秋の
はつ風さゝふにて上
は序によめるなり

さなへはわさなへの
とよむいふ説さもは
り さだを萬葉に
早田さかけりさわら
びやも和を略きた
る同類なり

トイへバ。此岸へウチヨセル浪トイツシヨニ。秋がタツタカシラヌ

題しらす

よと人しらす

わがせこが衣のすそを吹かへしうらめづらくき秋の初
風

○田コレハくメツラシイ秋風サヤ。サラモ涼シイ。コ、ロヨイ。餘材
よ。わがせこの。女をさせりといへるなり。いみじきひがとなり。これ
の女の哥あるべし。又哥林良材集に引れたるより。わさもこがとあり。
新古今集有家郷「さらで。だも恨みんと思ふわ。さもこが衣のすそよ
秋風予吹く。これらよよれば。わさもことある本も有しあるべし

まのふまでさなへとりしかいつのまゝ稲葉そよぎて秋
風の吹。

○マダ昨日コソハ田ヲウエタレ。ツレニマア。イツノマニ此ヤウニ稻
ノ葉ガソヨトシテ。秋風ノ吹ヤウ。ニハナツタフツ

いにしへは織女の心
になりてよむなり後
世に思ひやりてよむ
故心おとれり

いにしのかぢいふの
今の櫓のことなりそ
のかぢといふものは
なかりしとみゆ

たなはたつめは萬葉
に織女の二字をよみ
てたなはたは機いたたの事

秋風の吹よむ日より久かたの天の川原にたぬ日いな
と

○ツシハ秋風ノ吹キツメタ日カラ。毎日く此ヤウニ。コノ天ノ川ノ
川原へ出テ立テ。君チマタヌ日ハ一日モナイ。千秋云。この歌などは。たな
はたつめになりてよめるなり
七夕の歌の
の類多し

久かたの天の川原の渡し守君わたりかばかぢかくして
よ

○天ノ川ノ渡し守ヨ。君ガコチラへ御渡リナサツタナラ。ギキニツノ
船ノ棹チレレヌヤウニ。カクシテオイテクレイ。ツシタラ川ヲ渡ツ
テ御カヘリナサルフガナルマイニヨツテ。イツデモコチニ御逗留デア
ラウニ

天の川もとぢと橋は渡せばやたなはたつめの秋をよむ
まづ

なりつは助字

○天ノ川ノ橋ニ紅葉ヲ渡スユエカシテ。時節モ多イニ。柵機サマガ。秋
サ御待ナサル

こひく〜て逢夜ハこよひ天の川霧立わたり明ずらあら
かん

○一年ノアヒダ長ノ月日ヲ戀々テ。ヌツタ一度彦星ト柵機ト御逢ナサル
夜ハコヨヒギヤ。ドウツ天ノ川へ霞ガ一トメンニ立ッテ開ウナツテ。イ
ツマデモ。夜ガアケテハヨイ

寛平の御時をぬかのようへ〜さふらふをのこど
も歌奉れと仰せられける時人にかはりてよめる
とものり

あまの川浅瀬をら浪たどりつゝ渡りはてぬは明ぞ志よ
ける
○此天ノ川ノ淺瀬ノ所チシラス故ニオボツカナウテ。ホノナカチアチヤ

あま瀬しら波は淺
瀬をしらせかけ
たり渡り果ねバ後
世にハわたりはて
ぬに云に似たり
こはわたりはて

されバともわたりは
てぬにとも心得べし

コチヤトシテヒマドツテマタ渡ツテシマイモセヌツニ。ハヤ夜ガ
アケタワイ。千秋云。四の句。ねバ
ハ。ぬにの意なり

同御時さ〜の宮の歌合の歌

ふぢのらのおきかせ

契りけん心ぞつらき柵機の年にひとたびあふりあふか
りける

○一年ニタツタ一度ヅ、ト。約束シテオイタ柵機ノ心ガキコユス一年ニ
タツタ一度グラ非アウノガアウノカソレヤ逢ト云ッモノデハナイ

七日の日の夜よめる 凡河内躬恒

年をといあふといすれと柵機のぬる夜の數ぞすくなか
りける

○柵機ハ毎年逢ツシヤリハスレドモ。一年ニタツタ一度ヅ、ナレバ。逢ッ
シヤル夜ノ數ハスクナイコトヂヤワイ

今夜手向るものなが
すといふはいつより
のこゝにか菫葉に人

に衣をかしの人も
かりたる事多きをそ
れらよりうつしにいふ
にや織女祭の玉簫
歳時記に見えたり唐
詩にも家々此夜持
針線云々是により
てこいにもこよひハ
糸など手向る香り年
のながくどこいに
よめるはまたよくも
意を得ず玉の緒息の
緒などの緒にひとし
く常に命のきづなき
するさじふ如く年も
絶す續く意にて緒を
云詞をそふるにや猶
考べし

棚機よかしつる糸の打はへて年のを長くこひやわた
らん

○タナバタ祭、ニコヨヒ手向テオ借申シタ糸ノヤウニ長ウ引ノビテコ
レカラミ年久シウ此ノヤウニ戀シウ思フテ月日ヲタネコルトデアコウ
カ。是ハ七夕よめる心のが戀の哥なり

題しらせ

そせい

こよひこむ人あひあひじたかばたの久しき程も待もこ
そすれ

○今夜クル人ニハアウマイ。今夜ハ七夕ギヤニヨツテ。棚機ノ久シイ一年
ノ間ヲ待ツノニアヤカツテ。ヨチモ久シウ待ツヤウナ中ニナルモ
アラウホドニ

七日の夜の曉によめる 源むねゆきの朝臣

今んとてわかるゝ時の天の川渡らぬさきに袖ぞひぢぬ

る

○サアモウト云テ別レルトキコハ。マダ天ノ川ヲ渡リモセヌサキニ此ノヤ
ウニ袖ガヒツタリト涙デヌレヌ

やうかの日よめる とぶのたぐみね

けふよりの今こんとこの昨日をぞいつとしかどのと待渡
るべき

○タナバタ様ハサツ。今日カラシテハ。又今カラ來年ノ七月七日昨日
サ。イツカノトヒタスヲ待テ月日ヲ。タテサツシヤルデアラウト。思
ハレル

題しらせ

よみ人しらす

このまよりもりくる月の影見れば心つくこの秋の來に
けり

○木ノ枝ノ間カラモツテクル月ノ影ヲミレバ。廣ウ見ルトハナガウテス

大かたの凡すべてな
ぎ云に同じくひろく
云調なるをこそ云
物一つをさり出てせ
ばき詞に合せたるに
てこの哥の意をあき
らむべし

詩に秋風を朝来ニ
庭樹一孤客最先聞

コシツ、ホカ見エチバ。サテくシンキナ物チヤ。是ヲミレバ。今カラ
總體モノゴトシンキナ秋ガキタワイ

大かたの秋くるからにわが身こそかなしきものと思ひ
しりぬれ

○世間一同ノ秋ガキタカラシテ。人ハコノヤウニハナイサウナニオレヒ
トリガ秋ハカナシイ物チヤト思ヒシツタ。秋ハオレ獨ノ秋デハナイ
世間一同ノ秋チヤニ

我ためにくる秋にともあらなくに虫の音きけばまづぞ
かかしま

○オレニ悲シウ思ハサウタメニ來ル秋デモナイニ。虫ノ聲ヲキケバ人ヨ
リサキヘ。マツ一番ガケニオレハカナシイ

物ごとに秋ぞかかしまもとぢつうつろひゆくを限り
とおもへり

○草木ノゾクカハツテ散テイクノハ草木ノシマイニナルノチヤガ
オツケサウ物ノシマイニナル時節ノバシメチヤト思ヘバ。總體ノ物
ナニツケテモ秋ハ悲シイ。打開よろし餘材わろし

ひとりぬるところの草葉にあらねども秋くるよひの露け
かりけり

○草ノ葉コソ秋ハ露デヌレルモノナレ。ワシガヒトリチル床ハクサノ葉
デハナケレドモ。秋ニナレバ夜ルハ此ヤウニ涙デ露ノヤウニヌレルワイ
これさだのみこの家の歌合のうた

いつの時の時わかねど秋のよそ物思ふとのかぎりか
りける

○イツハ物思ハストキチヤト云フ時節ノ差別ハナシニイツデモ物思ヒハ
アルケレドソノウチニモ秋ノ夜ガ。イツチ物思ヒスル頂上チヤワイ
かむなりのつぼし人あつまりて秋の夜とむ

よひとは初更をもち
ひ又一夜の間のこも
をも云この哥もひろ
く秋來る夜と心得べ
し

この哥宗千の集に入
たりこは名ッおち
たるにや

かむなりのつばは
宮中五舎の中子襲芳
舎とて有それを神鳴
の壺といふ

をしと思ふは惜むと
のみにはあらで愛る
をいにしへはをし
といへり即萬葉集に
愛の字をしとしよ
めりこの意も夜の
あけ行によめること
さへす惜の字に心
得てはかなはぬなり
顯昭本に影へみゆ
るさあり新撰萬葉に
も影へさありて左

歌よみけるついでよめる

つばの。御坪の内よて。梅壺盛きといふ。その御坪の内よある木
草をもてそこの命の異名よしたる物あり。かひありのつばも雷の落
たるとありしより。異名よなれるなり。壺字の。宮中、衛謂之壺とあ
るこれなり。器の壺とい別なり。まがふことなけれ

かくばかりをしと思ふ夜といたづらよねてあかすらん
人さへぞうま

○コレホドニ面白イ。アツタラ秋ノ月夜チ。寐テシマツテ。ムサムザト明
ス人モ。アラウカサウシメ人マデガサ。キコエヌトヤト思ハレル。餘材
らたづらの説わるし。いたづらよねて。ねていたづらよと心得べし

題しらす

よみ人志らす

白雲にはね打かいしとふ雁の數さへ見ゆる秋のよの月
○サテモサヤカナ月カナ。雲ヘトバシホド高イツラヲ。ツレマツテトシテ

の詩に秋天飛翔雁影
見とあり

白氏文集に燕子樓中
霜月夜秋來唯爲二
人一長とあるを千里
は儒士なればおもひ
よりてよめるにや

今の本に秋はなほと
あれ古本の忠孝集
に秋くれはさあるを

ユク雁ノ數マデガヨウ見エル。千秋云。はれつちかかし。くつもつらなりて
しらすとちかはすにはあらず 雁と雁と羽をならへかはして飛わたるをいへり。

さよ中と夜いふけぬらじ雁がねの聞ゆる空に月わたる
らむ

○夜ハイカウフケル。モウトント夜半ニナツタサウナ。見レハ雁ノ鳴聲ノ
聞ユル。ズットツラノ方ヘ。モウ月ガマハツタ

是貞とこの家の歌合よよめる 大江千里

月見ればちゞ物こそ悲しけれ我身ひとつの秋いあ
らねど

月ヲ見レバオレハイロクト物が。悲シイワイ。オレヒトリノ秋デ
ハナケレド たゞとね

久かたの月のかつらも秋はなほ紅葉すればや照らする
らん

○月ノ中ナ桂ハコノ國土ノ木ノヤウニ秋チヤト云テモ。紅葉スルナド云

用ういかになれ
いにしへ猶てふ詞
まだ云意にのみ用
ゐていよ、其なごに
用ゐしはなしこの
猶は後の詞つかひな
り

くま山さいへきこ
にくらきこはなき
を詞につきてなき
くよめるかめでたき
なり

この歌の意はこころ
きなりこのころには
やくきりくすどひ
さつものにあやまり
てよめり

トハアリソモナイモノチヤニ。ソレモヤツハリ。秋ハモミヂフルカシテ
C イツモヨリハ光リガテリマサツタ。紅葉シタニヨツテ此ヤウニ照リマ
サルデアラウ。打聞わろし

月をよめる

在原元方

秋の夜の月の光りあかければくらぶの山も越ぬべう
なり

○此ヤウニ月ノ光リノアカイ。秋ノ夜ハ。ナンボ聞イクラフ。山デモ越ラ
レウト思ハレル

人のもとよまかりける夜きりくすのまきける
をききてよめる ぶぢとらのたゞふさ

きりくすいたくを鳴そ秋のよの長き思ひの我ぞまよ
れる

○コレ御亭主貴様ハ。心苦ガオホウテ。イロくノコヲ思フテ夜ノ長イ

ヲ明シカネルトイハシヤルガ。御亭主アノキリギリスト同シヨウニア
マリ泣カシヤルナイ。心苦ガ多ウテ秋ノ夜ノ長イノガ。メイワクナフハ
貴様ヨリ。拙者ハナホノコトチヤワイ。餘材打聞ともよわろし

是貞、この家の歌合のうた

ととゆきの朝臣

秋のよのあくるもしらす鳴虫のわがごと物やかなしか
るらん

○此長イ秋ノ夜ノアケルモシラズニアノヤウニナク虫ハオレガヤウニア
レモ。物ガ悲シイカシラス

題しらき

よと人あらず

秋萩も色つきぬればきりくす我ねぬとやよるのかな
し

○萩ノ葉モ色ツイテシロく枯カケテシル時節ニナツタレハ物ガナシウ

このきりくすもこ
うろきなり

わぶるも心ふるも
云に同じく物おもひ
にうみはてたるとな
り
しのぶはしたふの古
言なり

テ夜ルモ。チラレヌニアノ葦モ同シヤウニ夜鳴クハ。ソチモオレガヤ
ウニ物がカクシイカ

秋のよハ露こそとに寒からし草むらとよ虫のわぶれば

○クサムラゴトニアノヤウニ虫が難儀ガツテ鳴クノチキケバ。秋ノ夜ハ

歌ガサカクベツニ寒イサウナ

君志のふ艸よやつるふふるといまつ虫の音ぞかなし
かりける

○人ガ見ステ、ヨリツカイデドモカモキツウアレテ。軒ナドヘハシノ

プガハエテ見苦シウナツテ。其人ヲ戀タテテ居家テハ庭テナク松虫

ノ聲ガ。人ヲ待ト云ユエカ。一入カナシウ聞エルワイ。打聞やつる、

の注わろし

秋の野道もまどひぬまつ虫の聲する方よやとやから
まじ

訪はんのさはんなり

日ぐらしの秋のはト
めより鳴小蟬なり日
をさふる木陰になく
故に日ぐらしさは名
つけつらん

○此秋ノ野デ。モウ日モクレニ及ブ道モフミマヨウクホドニ。アノ人ヲ

待ット云名ノ松虫ノ聲ノスル方ヘイテ。宿ヲカツタモノデアラウカイ

あきの野人まつ虫のこゑすかり我かど行ていざとふ

トはん

○此秋ノ野ニアレ人チマツト云名ノ松虫ノコエガスルヲ。ソチヤオレ

ヲマツノカト云テ。ドレヤ行テオミマヒ申サウ

もこぢ葉の散て積れる我宿誰とまつ虫こト鳴らん

○モミヤガ散テツモツテ。誰モフミ分テ来ク人モナイコチノ庭デ。タレ

ヲ待ッテアノヤウニ松虫ハ鳴コトヤラ。タレモ来ル人ハアルマイニ。

打聞よるし餘材いろし

日ぐらしの鳴つるなべ日くれぬと思ふ山の陰よ
ぞ有ける

○ヒヅラシガ鳴イタニツレテ日ハクレタト思フタハ。サウデハナカツタ

山ノカタケデサ。聞イノデアツマワノ。千秋云なべには並ににてこれさかればならぶ
もこれに
ちかしに

日ぐらこの鳴山里の夕ぐれハ風より外よとふ人もなし

○ヒグラシノナク此山坐ハユフグレニハ風ヨリ外コハ一向ニ尋ネテクル
人モナイア、サビシイコトデヤ

まつかりをよめる 在原元方

まつ人よあらぬ物からはつ雁のけさ鳴聲のめづらしき
かな

○待人ガキタカナヅノヤウニ。ケサ始メテ雁ノ鳴ク聲ガサテモメツラ
シウ思ハレルコトカナコナガ待テ居ル人。テハナイヤヤケレド

是貞のよこの家の歌合のうた とものり

秋風よはつ雁がねぞ聞ゆなる誰玉づさをかけてきつら
ん

から國に籍武さいへ
る人胡國に年久しく
とらはれぬて雁に文
をつけて京へせ
しとよりこゝにも雁
を遠つ人のつかひさ
いへり

これも右の古事ニよ
りて誰カ玉ぞと
いへり

○秋風ノ吹ク空ニアレ始メテ雁ノ聲ガスル。雁ハ遠方カラノ狀ヲクビ
へ掛テ來ルト云フヤ、ヤガアノ鳴雁ハドコカラタガ狀ヲカケテキタ
ヤヤヤラ

題しらす よみ人忘らす

わがかどよ稻負鳥の鳴なべよけさ吹風よ雁のきよけり

○コチノカドテ稻負鳥ガナクニツレテ。ケサノ風ニ雁ガキタワイ
いとばやも鳴ぬる雁かえら露の色とる木もももちぢわ
へなくよ

○キツウ早ウマア雁ハナイタフカナ。露ノ色ドル木ドモモマダロクニモ
ミヤモセヌウチニ

春霞かすきていよしかりがねハ今ぞ鳴なる秋霧のうへ
に

○春霞ノ中ヘカスミニ見エテインダ雁ガ。ソノ時ノ霞ト同シヤウニ秋ノ

稻負鳥のいたく知
がたきとにてさまじ
まき論ぜしを見るに
或鶴なり田夫なりな
ごいふはこの歌をよ
くも心得すなべてふ
詞をもしらぬひがと
さもにてみな云に足
を庭たききのと云
ハあたれり

歌の意ハ夜寒に雁の
鳴くとのみなり

古注に柿本の人まろ
のなりと云は例のこ
らぞ

雁のわたるを舟と見
なすことくも聞ゆれ
ど文粹 雁 雁來とも
いへれバ聲を櫂を
す音と聞なして聲を
帆ニ揚てくる舟はさ
いへるなり

霧ノウヘノ方デ。アレ今又ナクワ

夜を寒と衣雁かねなくさべよ萩の下葉もうつろひよけ
り

○夜ガ寒サニ衣ヲカルト云名ノ雁ノ鳴ニツレテ。萩ノ下葉モウツロウ
タツイ

此歌のある人のいはくかきのもとの人まろがなりと

寛平御時きとらの宮の歌合のうた

藤原菅根朝臣

秋風ノ聲とほにわけてくる船のあまのど渡る雁よぞ有
ける

○アレくアノ青イ、海ノヤウナツラチ。秋風ニ聲ヲ高ウ帆ノヤウニア
ゲテ。船ノヤウニ見エテ來ルモノハ。鳴テワタル雁ヲヤツイ

かりの鳴けると聞てよめる

とつね

萬葉に山ちかく家や
なるべきを鹿の音
かきつらぬがて
りか

うきことを思つらねて雁がねのなきこそ渡れ秋のよなく
○雁ノイタツモツヲナツテ鳴テワタルヤウニオレハ秋ノウイコノ數
々ヲオモヒツマケテ。毎夜ノ泣テアカスツイ

是真みこの家の歌合のうた

患岑

山里ハイツデモト云フヤニ。秋ガサ。別ヲツラウナンギニ思ハレ
ツイ。ヨムく鹿ノナク聲ヲ目ヲサマツ。夜ハ長シ何ヤラカヤ
ト難儀ナコトヲ思ヒツマケラレテサ

よみ人あらき

おく山よもとじふとわけ鳴鹿の聲聞時ぞ秋のかさしま
○秋ハ物體カナシイ時節チヤガ。其秋ノ内デハ又ドウイフ時カイツチ悲シ
イツトイハハ。紅葉モモウ散テシマウタ奥山デ。ソノナツタモミチヲ。

鹿ガフミツケテアルイテ鳴ッ聲ヲキク時分ガオ。秋ノウチデハイツチ
悲シイ時節デヤ

ふみわけり。鹿のふみ分るなり

題しらす

秋萩ようらびれをれば足引の山えたどよと鹿の鳴らん

○萩ノ葉モ段々枯テイクヲ見テ。時節ノ物カナシサニ。此ヤウニ。ウチ

ヲナゲテ居ルノニ。ドウ云フデアノヤウニ山ノ下マデヒビクホド鹿ガ

鳴コトヤ。アノ鹿ノ聲ヲキケバイヨク悲シウテドウモタヘラレヌ

ニ。をれば。をるよの意なり。

秋萩をふからみふせてなく鹿のめよ見えず音のさ

やげさ

○野ノ萩ノ中ヲフミアラシテオツフセテガラミニヤテ鳴テアルク鹿ノ

目ニハ見エイデ。アノマア聲ノサヤカニヨウ聞ユルコトイ。千秋。古

奥義抄に普通の本に
は秋風にさほべるど
いへりさあらば意あ
きらかなり
しがらみ河をせき
岸のくつるゝをさ
いれるて紫竹など
枕にからみ付るか云
こへ萩原に入て鹿
のふみからみなをす
るをそのしがらみに
よせていふなり

の鳴こもおとせいへり。
萬葉に露のおとなさもよめり。

是真、この家の歌合によめる

ふぢのらのとゆきの朝臣

あきのぎの花咲にけり高砂のをへの鹿の今やなくト

ん

○アレ萩ノ花ガサイタツイ。山ノ鹿ガモウナクデアラウガ

むかしあひまりて侍ける人の秋の野よてあひて

物がたりとけるついでによめる

秋萩のふるえよまさる花見ればもとの心のわすれざり

けり

○萩ノ去年ノ古枝ヘアレアノトホリ又花ノサイヲ見レバ草木デモマヘ

カタノ事ヲハ忘レハシマセヌツイ。スレヤソコモトモ。中絶ハ致シタ

ケレド。先年御コシニ致タコトハオ忘レナサハマイ

萩を鹿の妻さもたは
ふれにいへばその心
もあるへへし

冬ハ葉もみな枯て春
あらたに生るあり又
莖立がれすしてその
くきより春ハ枝をさ
すありそれを木萩と
いふなり

題とトキ

よと人にとす

ひさりある人とは天
なうしなひ妻に別を
とじてひさりのみあ
るなりさらすても云
へけれご上にもとの
心いわずれすと云に
次で下には物おもふ
やごのさ云あいたに
入るとにてしらす
なり

秋はぎの下葉色づく今よりやひとりある人のいねかて
にする

○萩ノ下葉ガツロク枯カケテキタ。ア、段々ト夜ハ長ウナラウシモウ
コレカラ又。オレガヤウナ。獨ズミノ者ハチラレヌデ。アラウガイ。

千秋云。此歌。二の
句にてきたり。

鳴渡るかりの涙や落つとん物思ふ宿の萩のうへの露

○アレハテ、悲レイコチノ庭ノアノ萩ノウヘ、露ガキツウ。シゲウオ

イヌガ。ツラヲワ。タル雁モ。オレガヤウコカナシイ。ガアルカヤ

テ。泣テイク。スレヤアノ雁ノナク涙ガオチヌノガシラス。アノ萩ノ

露ハ

萩の露玉にぬかんととれわけぬよと見ん人の枝なかと

見よ

○萩ノ露ガキラ／＼トシテアマリ見トサニ玉ニシテツナガウト思フテト

ツマレバチキニ消タ。エイワ。ソシナラ見ヤウト思フ人ハトラズニヤ

ハリ枝ニアルマンテ見ヨサ

ある人のいはく此歌のならのみかどの御うたなりと
をりて見やおちぞとぬべき秋萩の枝もたわとにおける
白露

○萩ノ花ノエダモヒワ／＼トタワムホドオイタアノ露カキツウ見事ナガ。

アレヲ。折テ見ヤウトタナラ。サダメテ落テシマウデアラウ

萩が花ちるとん小野の露霜にぬれてを行んよよふく
とも

○今夜妹ガトコロイヘカウト思フ野道ハ萩ノ花ガ散テ。サツ露モフカイ

デアラウガ。ヨイワヌレナイカウツ。夜ガフケケ。露ハシゲツトモ。

露霜といふいたゞ露のとなり。萬葉多し皆まかり。
千秋云。ぬれてをの
ハ助ががら。其草を

たわらたわ／＼とた
わめる香りとさきと云
も同言なり

露霜の所によりて露
と霜と二つなるもあ
れ。二つのさまに
へる。秋更で露なが
ら霜をかねていよと

萬葉にみゆその時は
つゆ下も霜をにと
りてよむ例

成案に熟字を一義に
用ふること、和漢にも
にその例いさみし左
傳ニ賜諸侯使臣委之
唯布とあるハ臣と委
さふたつにあらず源
氏物がたりの雨夜の
品定めの際になつた
しきつまこと頼んど
いへるも妾のことに
て子の義にあらずま
た令致解隨國隨華に
も説あり猶委しくハ
全杉日記にいへり今
ハ概畧を云フのみ

つよくいへ
る詞なり

是貞のみこの家の歌合よよめる

文屋のあさやす

秋の野よおくち露の玉なれや貫きかくるくもの糸す
ぢ

○萩ノ野ノ露ハ玉ヲヤカミテ。蛛ノ糸スギヘツナイデカケタ

題しらせ

僧正遍昭

名よめでゝおれるばかりぞ女郎花われおちにきと人に
かたるか

○女郎花ト云。名ガヨサニ。チヨツト馬カラオリテ見タバカリ。チヤツ

カナラズ。オレガ。女ニオチタト人ニ云デハナイゾヨ。千秋云。そのかみ
然るべきはどの法
師。つねに馬にのりてありき。おれると。馬より。おりたるをいふ。とみな
しなり。ものよ多くみえたり。おれると。馬より。おりたるをいふ。とみな
へしを折れるよりあらず。打開わろし。

僧正遍昭が

ならへまかりける時よととこ

山よてをとなべと見てよめる

ふるのいまもち

まをかへしうと見つゞぞ行過る男山にたてりとお

もへバ

○アノ女郎花ヲバア、イタツラナ女ヂヤト思フテオレニヨソニ見テ、通
リ過テイクコ、ハ男山ナレバ。男ノ中ニマツツテ。居ル女ヂヤト思フ
ニヨツテ、

是貞みこの家の歌合うた

とゆきの朝臣

秋の野よ宿りのすべと女郎花名をむつましむ旅な

くよ

○トマルナラ秋ノ野ニトマルガヨイ。女郎花ガアツテ女ト云名ガムツマ
シサニヨツテ。寐ルヤウアハナイツサ。二の句のはもじ。心をつく

こゝにうしと云はね
なめるあまりに愛し
さなりいせ物たり
にきのふけふ露の立
まひかくさふは花の
林をうしとさなるべし
と云に同ト

萬葉に赤人の野をな
つかしみひこ夜ねに
けりさいふたぐひな
り

上の歌と贈答のやうに次でたり

べし。餘材打聞ともよきさむるし。
千秋云。必達き所にあらざり。常の家にはなれて。他所にて寐るな旅寐と云ふこと常なり

題しらず

そのよしき

女郎花多かる野べにやとりせばあやなくわたの名とや立かん

○女郎花ノ多クアル野ニトマツタナラ。ワケノナイトコアマダ名ガタ、ウカヨラヌ。女郎ト云ハ名バカリデコソアレホンノ女デモナイニ

朱雀院のをみかへし合あはせによみて奉りける。

左のおほいさうぢぎと

をみなへし秋の野風に打なびき心ひとつをたれよすらん

○チミナメシガ。秋ノ野ノ風コナビクカ。コレニ心ヲヨセテ。アノヤウニナビクヤラ。心ひとつといふいたゞ心ひとつとなり

藤原定方朝臣

秋ならで逢とかたき女郎花あまの川原よかひぬものゆゑ

○天ノ川コソメナハタノ秋デナウテハアハヌ所ナレ。アノ女郎花ハアマノ川ノカハラニハエテアルデモナイニ。秋デナウテハアアフイガナリガタイ女ヂヤ

つらゆき

誰秋にわらぬ物ゆゑ女郎花なぞ色に出てまたきうつろふ

○誰ガ飽タトイフ秋デモナイニ。女郎花ハドウシタフ。アノヤウニ色コデテ恨ンデ。マメ早イニウツロウノハ

みつね

妻こふる鹿ぞ鳴なるとみなへしおのがすむ野の花とし

このゆゑといふ詞は
おがらと云に同一
本に天の河原にた
ぬ物からとあるをも
てもものながらなる
をさしるべし

六帖にこの歌たが秋
にあらぬものからと
あり物ゆらは物なが
らの略なりとは誰も
しれりさらは物ゆし
はものながらとおな
じ言とすべきなりま
だきはいまだきてふ
言の異なりその時よ
りまへのことと云

らぎや

○アレ妻ヲコヒシメウ鹿ガアテナクワ。鏡ナヤツキヤ。女郎花ヲ巳ガ
カヨウ野ノ花チヤトハ知ラヌカイ。女郎花トイヘハ女チヤニ。ナゼア
ハヌグイ

女郎花吹過てくる秋風めめに見へぬと香こそさるけ
れ

○女郎花チ吹テトホツテクル風ハ目ニハツレト見エタケレド。テウド女
ニ逢テキヌ男ノ。ウツリガノスルヤウデ。女郎花ヲ吹テキヌト云フガ。
香アサヲウツレルツイ

たゞみね

人の見るとやくるときとみなへと秋霧にのみ立かくる
らむ

○女郎花ハ。女ノ人ヲハツカチガツテ。カクレルヤウニ露ニカクレテハ

ツカリアルガドウ云フデアノヤウニ露ニカクレルヤラ。アレモ人ノ見
ルノガメイワクナカイ

ひとりのみかびるよりの女郎花わが住宿ようゑて見
ましと

○女郎花ヨ。此野原ニコノヤウニ露ニチレテ。ヒトリ。モボくト
シテバツカリ居ヤウヨリハオレガウツシテ植テ見ハヤシテヤラウモノ
チ。餘材よまたがふべし。打聞ぬろし。千秋云ひよりとは一もにてあるよし
にはあらず女の男にそいすしてひさり
あるよし
にいへり

ものへまかりけるに人の家よとみかべしうゑた
りけると見てよめる 兼覽王

女郎花うしろめたくも見ゆる哉われたる宿よひとりた
てれば

○アノ女郎花ハ。此アレヌヤドニ。見レハ人モツカズニ。ヌタ一人居

六帖には露のまが
ぎにあり此歌も
まりのまがまどあ
りしをこそせほく
詞もうるはしやら
ぬバこの集にハ秋
露にのみとな世さ
れしならん
ながむるはもの思
ふ時のさびしくて
あるさまなりたは
見ることにあらず

うしろめたくはわ
がうしろの見だけ
れと見えぬなる
もておぼつかなき
がもさにて何と
どにても心もどな

きてさにいへり

寝んをのべてねな
まじさうへり

例によりて歌合の
歌さすべし

袴てふ言によりて
野に脱かけおまじ
と意得へしこい

レハサマモアキツカイナ物カナ

寛平御時藏人所のとのことゆさが野に花見むと
てまかりたりける時かへるとてみならたよとて
けるついでおよめる

平さたふむ

花はわかで何かへるらんとをかへしおほかる野べにね
あまし物を

○見フナ色々花ヲハライツハイエ。見ズニナセニ此ヤウニカヘル
ヤラ。女郎花ノ多クアル野デ。コヨヒハチヤウデアツタモノヲ。女ト
云フ名ナレバヨイトマリ所チヤ

是貞みこの家の歌合によめる

としゆきの朝臣

あま人がきてぬぎかけし藤はかまくる秋ごとし野べき
よははす

のにははすの香なり
且この花ハ女郎花に
似て濃紫ふなり實に
香ハいたりて深き心
のなり

歌にてやどりせし人
の事ハしらるれば端
にハ右のどとくかけ
るが此葉の例なり

○此フチバカマハマヘカタ何人ノ著テヌキカゲテオイタ袴ア。毎年ノ
秋ニナレバ所野ヘンチニホハス。今ニ此ヤウニホウハ。ナンデモコ
レハナミタイテイノ人ノ袴デアアルマイ。ヨクノレキノ人ノ袴
デ香ガヨウシメデアアルユデアアラウ

藤袴とよみて人よつかはとける

つらゆき

やどりせし人のかたとか藤袴わすられがたき香によは
ひつゝ

○此藤袴ハイツツヤ此方デオトマリナサレタ。襟ノ形見ニオイテ御歸リ
ナサツタ袴デコサルガ。今ニワスレガタイ香ガニホフデサ貴様ノフチ
オナツカシウ存ズル

ふぢはかまとよめる

そせい

ぬしをらぬかこそ匂へれ秋の野に誰ぬぎかけし藤袴ぞ

いかなるよしのあり
てかくいよみけんす
べて題しらすとある
にいかやうに事あり
げなるが有り

これは袖と袂を
あやなせし歌なりと

○此ヲヤバカマハ。此秋ノ野ヘタレガヌイテ掛テオイタ袴アマ主ノ
レヌ香ガサ。ニホテアル

題しらす

平貞文

今よりいふゑてだに見じ花すゝきはに
出る秋のわびし
かりけり

○ス、キノハドコニモタクサンニアル物ヂヤガ。ソレヤドウモセウイカナ
イヂヤガ。今カラセメテハコチノ庭ニナリトモ植テハ見マヤウニセウ
ヅ。アノヤウニ薄ノ穂ガデ。秋ノケシキガ見エレバキツウ物がナシ
ウテナンギナツイ。だよいなりどもの意なり
餘材だよの意なほとさ得せ

寛平御時きさの宮の歌合の歌

在原むねやな

て袖の衣手にてたも
さしその袖の本にて
臂の方をいふ

やまごさでしての野
にある紅梅色の花な
り是はての詞にい
しへより生れいふ
今生し立る色くの花
咲は唐なでしてなり
それにむかへてやま
ごさ云これ古言に
はあらず

秋の野の草のたもと花すゝきはに
でゝまねく袖と見
ゆらん

○ス、キノホノ風デナビクノハ。テウド人ガ色ニデ。戀シイ人ヨマネク
袖ノヤウニ見エルガ。ス、キノ穂ハ。秋ノ野ノ穂體ノ草ノ袖カシラヌ
○此歌よて袂と袖といふ詞をかへたるのみよて同じ意なり
千秋云かやうに
に留りたるら
んの格この譯
にて心得へし

索性法師

われのとやあひれと思はんさ
りくす鳴夕かけのやま
となでしこと

○キリトスガ鳴テオモシロイユフカゲニ見事ニ咲テアルアノ撫子ト云
兒ヲ。母親ヤ乳母ナドモ打ソロウテトモ。テウアイスルヤウニタ
レニモカレニモ見セラ賞翫サセタイモノヂヤニタツタ一人ノ手デソダ
タル兒ノヤウニ。オレバツカリガ。ア、ヨイ兒ヤト云テ獨リ。見ハヤサ

ウツカヤ。アツタラ此花ナ

餘材後の説ちかし打聞わろし

題しらす

よも人しらす

とどりあるひとつ草とぞ春の見し秋の色くの花にぞあ
りける

○春見々時ニハ。タツ皆同ヲ青イ一ツノ草チヤトハツカリ思フタカサウ
デハナイ。秋ニナツテ今見レバ。コレ此ヤウニイロクノサ見ゴトナ花
チヤウイ

もくさの花のひもとく秋の野に思ひたはれん人など
がめそ

○ソウタイ花ノ開クラ紐トクト云チヤガ。此ヤウニイロクノサマドノ
草ノ花ノ帯紐トイテミダレテアル面白イ秋ノ野デ。ドレヤコチモアノ
花ヲ賞斷シテトモクニミダレテ。アハウチツクサウ。人ガ見タナラ。

このたはれんはなま
めきたはふるこそ
いみぢかれども日
本紀に結婚の二字を
たへどもよみに
合てこの歌にて花
のひもとくを女の下

せ紐く方にいな
せるやまもおぼゆ
月くさは今露坤とい
ふものにて古は衣に
すりたるなり

ふるの瀧は大和の石
上のおるといふ所の
瀧なり

野らのちいそへたる
のみにてあらのらこ
もよみ今もゆな人

五
アレハマア何事チヤトフシヨニ思フテアラウガ。ユルセユルセ
月草にころもいをらん朝露にぬれてのちゆうつろひ
ぬとも

○キルモノヲハ月草ノ花デスラウ。エイ色ナ物チヤ。マカ外へ色ノウ
ツリヤスイ物チヤニヨツテ。朝ノツユニヨシメラ。色が外ノモノヘウ
ツ、テマハウモ。シレヌガ。エイワサ。後コハ。ウツ、タト云チモ

仁和のとかとみこにわいとまをける時ふるのた
き御覽せんとしてわいとまをける道遍昭が母の
家はやどり給へりける時に庭を秋のへにつくり
ておはん物がたりのついでによとて奉りける

僧正遍昭

里のあれて人のふりよし宿かれや庭もまがきめ秋の野
うなる

は野をのちとけいへり

○此ヤドノ義ハ。里ハアレマシタ里ナリ。住デチリマヌル者ハ老人ナリ。致シマヌレバ諸事不都合ナ宿ユエカ致シマシテ。庭モユハ籬モマカキ御覽下サレマストホリ。トントハヤ秋ノ野原デゴザリマス
上句のニツのはもじ心をかくべし

頭書 古今和歌集遠鏡卷第四終

頭書 古今和歌集遠鏡卷之五

秋歌下

是貞みこの家の歌合の歌

文屋康秀

吹からに秋の草木のしをるればうべ山風とあらしといふらむ

フクトソノマ、。秋ノ草ヤ木ガアノヤウニシヲレ、ハ、尤ユナコトヤヤ。
ソレデ山風ヲアラシトハ云デアラフ。
千秋云。あらしといふ名ハ此歌のと
よく物をあらま意にて。今荒か。又あ

らし風をいふことが。風をしといふなり

清清

草も木も色かかれどもわたつ海の浪の花よぞ秋をかりける

草デモ木デモ。此ノ秋ト云フ時節ガアツテ。ミナ色ガカハツテ枯テ

古今六帖にハあまや
すどあり。
うハハ諸應の字にあ
てしかるとうけか
へる言なり

涙なみを花と見たるうに
いにしへよりあ
る。いさまなした
づみいつをにとりて
よむべしわたつみと
よむべしらすまたわ

たごにむるべからせ
この歌も六帖による
におなじく朝庭なり

常磐の山てふ所山城
にあるといへてこの
歌ハそこならで常磐
木のみたてる山のよ
しなるべし

此ノ體によめるが萬
葉にいさとし
霧も立バそのしめり
にて木葉の色かへる
ゆゑに霧立てといへ
り

マウケレドモ。アノ海ノ浪ノ花ハツカリガ。イツデモ同シヤウニ咲テ
秋ト云フコガナイツイ

秋の歌合とける時よよめる きのよともち

もみぢせぬときいの山ハふく風のおとにや秋とまゝわ
たるらむ

秋デモ木ノ葉ノ色ノカハルト云フコモナウテ常住同シヤウナヤト云。
常盤山デハ。時節ガイツチヤカシレマイガ。秋デヤト云フハ。風ノ吹
ク音ハカリデヨソニ聞テヌテラアラウカ

題しらす

よみ人しらき

霧たちて雁ぞ鳴あるかた岡のあしたの原ハもみぢとぬ
らん

霧ガ立テ。アレ雁ガサ ナツウ。コレデハモウ。片岡ノ朝原ハ。紅葉
シヨデアラウ

神無月とぐれもいまだふらなくにかねてうつろふ神な
ひのもり

木葉ヲツメル十月ノ時雨モマダフラスニ。神ナヒノ杜ハ。ハヤカチテ
チヤント色ガ染マツタ

ちのやぶる神なひ山のもみち葉ハ思ひハかけじうつろ
ふ物を

心ノカハリヤスイ人ニ思ヒヲカケルハアハウナチヤガ。此ノ神ナミ
山ノ紅葉モソソナモノチヤ。思ヒハカケマイソ。ホドナウチツテシマ
ウモノヲ

貞観御時綾綺殿のまへに梅の木ありけりにしの
方よとせりける枝のもみぢとむめたりけるさう
へよとふらふとのこどもものよみけるついでよ
める
藤原かちおむ

貞観御時清和天皇
なりこの殿におはし
ますことまた三代
實録にみゆ

和切がたりにもお
なす枝をわきて霜を
く秋なれほどよめり

後撰にまつ虫の初
るさそふ秋風を音羽
山より吹そめにけり
といふも音羽の音を
もの音に云 なたた
り

同じえとわきてこのはのうつろふ西ころ秋のはじめ
なりけれ

同ヨ一本ノ木ノ枝チヤニ。西ノ方ヘサシタ枝ガトリ分テアノヤウニ色
ノカハツタヲ見レバ。ナルホド西ガ。秋ノハヨメチヤワイ

いし山よまうでけるとさおと山紅葉を見て
よめる

秋風の吹よと日よりおと山とねのこきある色づきよ
けり

秋ノマナツメタ日カラシテ風ノ音モカハツタキタガ。今日景ハ此ノ
山ノ木ドモ、ソロ／＼色ガツイテキタワイ。千秋云〇この景にて〇上句を心得
かひりたる意を思は
せたるものなり

是貞みこの家の歌合のよめる

ととゆきの朝臣

ふと露の色ひひとつをいかよとて秋のこのはをちびに
そむとん

露ノ色ハミナ同シ一ツノ白イ色チヤニ。ドウシテ秋ノ木ノ葉チアノヤ
ウニイロ／＼ノ色ニツメルコトヤラ。千秋云〇ひとつのをハ〇ものもの意
にて。ひとつなるものをいへるなり。

壬生

秋の夜の露とつゆとれきながら雁の涙や野べをそむ
らん

秋ノ夜ノ露チヤニ。白イ露デソノマ、デオイテ。別ニ雁ノナク涙デアノ
野ノ草木ヲバ。ソメルカシラス

題しらき

よみ人しらき

秋のつゆいろ／＼とよおけはこそ山のこのはの千種を
るらめ

秋ノ露ハタゞ白イ物チヤトバカリ思フテ居ルガサウデハナイサウデ。

上にも鳴わたる雁の
なみだや落つらんと
いふにおなじ

今も近江の萱津の驛
より美濃路へ行きこ
ろ小守山を替てもり
山といふところあり
そこか貫之集には竹
生鳥へまうづるとき
もる山といふところ
にてあり

かささり山の山科に
ありといへり

色くチカウヲオクサウナ。ソレデコソ。染ツタ山ノ木ノ葉ガアノヤウ
ニサマトノ色デアラウ

もる山のほとりよてよめる づらゆき

あゝ露もくぐれもいたくもる山の下葉のことき色づき
よけり

露モ時雨モキツツモルコノ 守山ノ木ドモハ下葉マデノコラズ色ツ
イタツイ

秋のうたどてよめる ありいらのもとかた

雨ふれど露もくぐれをかさとの山いかぞか紅葉そ
めけん

カサトリ山ハ傘ヲモツト云々名ナレバ。雨ガフツテモ。露ホトモモリ
ハ。スマイニドウシテアノヤウニ。紅葉ハソメタコトヤラ

神のやしろのあたりをまかりける時よいぎきの

うちの紅葉を見てよめる づらゆき

ちはやふる神のいがまよはふ葛も秋にあへずうつろひ
よけり

コレハマア神社ノイガキニハウチアル葛ナレバ神ノ御守リデ。色ハカ
ハリソモナイモノナレド。ソレデモ。秋コハエコトヘズニ色ガカハツ
タツイ

是貞とこの家の歌合よよめる たぐみね

雨ふれればかさ取山のもち葉へ行かふ人のそでさへぞ
てる

○三笠取山ノ紅葉ハコトノ外ヨウ染テ往來ノ人ノ袖マデ。色ガカマヤイ
テフリマス

寛平、御時きとらの宮の歌合の歌

よと人もらす

あへずの堪はてぬな
り歌によりてあへせ
ずと云をあへをとい
ふもありこゝはしか
らす

雨ふればと笠取山
いはんぞておけるの
み

あざりの色をいぢし
ほに染つくしたるな
り

さほ山は春日山の西
北にあり

立かくすのたつを錦
を裁とよせていへ
り云ハ遊たらんか
只さるよせの詞なく
て見よいと高しかし

ちらぬきもかねてぞとしまもとち葉の今いまのかざりの色
と見づれば

○此ハ紅葉ヲ見レバ。マダチリハセチドモ。ナラヌサヤカタ。惜いまイモウ
十分ニツメタレバ。オツケナルデアラウト思ヘバ。

やまとの國にまかりける時さほ山ふ霧のたてり
けるを見てよめる

きのとものり

誰ための錦なればか秋霧のさほの山へと立かくすらん

○此ハサホ山ノ紅葉ハ。タガタメコドノヤウニ大切ニスル錦デ。アノヤ
ウニ霧ガカクンテ。人ニモ見セヌコヤラ。セツカク紅葉ヲ見ヤウト思
フテキタニ

是真みこの家の歌合の歌 　よみ人くらぎ

秋霧のけさの立ぞ佐保山のまゝその紅葉よそにても
みん

露ハトウツケサハ立テグレナイ。アノサホ山ノ柞ノ紅葉ヲヨソカラ
ナリに見ヤウニ

秋の歌とてよめる 　坂上これのり

さほ山のはゝその色の薄ければ秋の深くもなりにける
かな

○ソウタイ柞ノ木ト云モノハ。ナンボ染テモ色ノアマリ濃ウハナラヌ物
ナレバ今。此サホ山ノ柞モ色ハウスウテ。深ウハナイケレドモ。アノ
ケシキヲ見レバ。サテクマア秋ハイカウ深ウナツタコカナ

人のせんざいに菊にむすびつけてうゑける歌

ありのらのなりひらの朝臣

うゑしうゑ潤秋なき時や咲さらん花こそ散め根さへ枯
めや

○カウシテウエテ　サヘオイタナラバ。コレカラ後秋ト云時ガナイコト

前栽せんざいの草木たてる
ころな云歌の端詞に
字音もて云フハこの
ころよりのちらし
なり

うすきさうふにふか
かきをむかへてよめ
るのみかなと云にて
秋を惜む心みゆこの
かなハ歎くことバな
り

カアツタラバコソサカヌイモアラウカシラヌガ。秋ト云時節サヘアラ
ハ咲ヌト云フハアルマイ。此今年ノ花コソナツテシマハウケレ根マデ
ガ枯レウカ根ハカレハセテハ。イツマデモ毎年秋ハ咲クデアラウハサ

寛平御時きくの花をよませ給うける

とし行朝臣

久かたの雲の上よて見る菊ハ天ツ星とぞあやまたれけ
る

○カヤウニ禁中デ見マスル菊ノ花ハ。雲ノ上テゴザリマスニヨツテ天ノ
星デヤトサ。トリナガラレマスルワイ

この歌のまだ殿上ゆるされざりける時よめとあ
けられてつかうまつるとなん

是貞、この家の歌合のうた

紀友利

この注の後の後今の
しわざなり

是レハから國に慈童
さいふ人菊を愛して
命長かりし事又菊の
水のみて百歳あま
りながらへたる人多
しといへるなどを本
まとして折てかざらん
しかして老せざる
べしといへり菊はか
ら國のものなればか
ら國の事をもてよむ
もよろし

露なづらをりてかざらん菊の花老せぬ秋の久しかるべ
く

○菊ノ露ハ壽命ヲ長ウスルモノデヤ。キケバ。イツマデモ年ノヨラズ秋
ノ久シク重テ長生ヲスルヤウニ。此菊ノ花ヲ露モツノマ、デ折テ頭
ヘサ、ウ

寛平御時きくの宮の歌合の歌 大江千里

うゑし時花待どほよありし菊うつろう秋にわんとや
見し

○春ウエタ時コハ。早ウ花ノサク秋ニシタイト。マナドホニ思フタ菊ガ
マア。盛りガ過テモウ色ノカハツテシマウ時節ニナツテコノヤウニ
ナツタノチ見ヤウトハ。思フタカイ。千秋云。結句やしん。やはの意にて。つろふ秋にあいんと。思ハシワリしものを
といへるなり

おなじ御時せられける菊合にすいませをつくりて